
MUGENな日常

雨季

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

MUGENな日常

【Nコード】

N0580X

【作者名】

雨季

【あらすじ】

とにかくハチャメチャな世界、MUGEN。そこに暮らす人々の生活を力オスに描いていきます。

これは対戦格闘エンジン『M・U・G・E・N』を題材にしています。過度なキャラ崩壊、原作無視、多重クロス、ニコニコ動画ネタなどが含まれています。嫌悪する方はバックをお願いします。それとニコニコ動画のMUGEN動画を見ていないと分からないキャラも多数出演します。それらを『MUGEN故致し方なし』と考えられる心の広い方はどうぞ。

始まりの日（前書き）

いろいろと酷い状態ですが、詳しく考えず、適当に流す程度に読んで下さいね。

始まりの日

ここは無限の可能性とカオスが折り混ざる世界。ここでは神もいれば人もいる。怪獣もいれば無機物もいる。それでも平和（？）なこの世界にも春が訪れました。

「ふわぁ、よく寝た」

小さな学生寮の一部屋で目を覚ましたのは青い鉢巻に胴着を着た青年、カンフーマンである。寝間着くらい着ろ。

「ご主人、今日は始業式ですにゃ」

この二本足で歩く猫はアイルー。カンフーマンのペットであり大切な家族でもある。

「そうだったな。んじゃ行ってくるか」

彼も一応高校生なので学校へと行かなければならない。特に今日は始業式。新しいクラスとクラスメートを確かめるためには行く必要性がある。カンフーマンはカバンを担いで部屋を出た。胴着のままだが彼の学校は特に指定の制服がないので問題ない。

「カン君おはよう。今登校？」

「美鈴さん、おはようございます」

寮を出て行こうとしたカンフーマンに話しかけてきたのはチャイナ服を着た女性、紅美鈴^{ホンメイリン}。この寮の寮長である。

「今日から新学期だっけ？ 大変ね。頑張ってね」

「美鈴さんはいつだって大変でしょう」

「そうなのよ。クリザリッドさんったら最近ね」

「行ってきます」

美鈴の惚気話が始まりそうになったのでカンフーマンは逃げ出した。

――

美鈴さんも新婚じゃないんだから惚気はやめてほしいな。あの人の話は長いんだよ。

「ようカンフー、何を疲れた顔してんだ？」

「おう七夜。もうクラス確認したか？」

こいつは腐れ縁の七夜。自称ロリコンだ。黙ればいい男なんだけどな。

「なんだ、お前はまだだったのか。早く確認してくるといい」

「なら見てくる」

どうなってるかな。げっ、また七夜と一緒にかよ。他には誰がいるんだ？

「結構知り合いがいるな」

下手に知らないのがいるよりいいが、せっかく二年生になったのに新鮮味がない。

「見終わったらなら体育館に行くぞ。そろそろ始業式だ」

「あいよ」

そついや今年度から校長が変わるんだつたな。新しい校長か。まあ校長なら俺らに直接は関係ないだろ。

――

始業式に何故か漫才や劇をやっていたが、ようやく新しい校長の出番らしい。

「それでは校長先生、お入り下さい」

「ハハハハハ！　よく聞け貴様等！！　私がこの夢弦ゆめづな高校の新しい校長の大道寺きら様だ！！」

『……………』

壇上に立ったのは小学生くらいの少女だった。しかも何故かスク水。これは固まるしかない。生徒は全員固まって

「素晴らしい！！！！」

七夜、お前すげえよ。

「そこのお前！　私が素晴らしいのとーぜんだ！！　だがその心意気を買って私の僕一号に認定してやろう！！」

「有り難き幸せ！！」

もう帰ってもいいだろうか。こいつらの世界に俺らを巻き込まないでくれ。

――
無事（？）に始業式も終わって新しい教室へとやってきた。

「カンフー、しっかり七夜の手綱を握つとけよ」

「ロック、それは無理だ。スイッチが入ったあいつは止められない」

この金髪君はロック・ハワード。ハワードコネクションってデカい会社の社長の息子らしいが、本人は継ぐ気はサラサラないらしい。将来安泰なのに。

「このクラスの副担任は新任らしいぞ」

「マジか。校長みたいじゃないといいな。担任は？」

「担任は「座りなさい。時間ですよ」ご覧の通り」

去年と変わらずナイア先生か。ナイア先生ってのはフルネームは確か、ナイア・ルラトホテップだったかな？ 本人曰く本名じゃないらしい。巨乳で胸元のぱっくり開いた修道服を着ていて、傍らには常に棺桶が浮いてる。

「おんや？」

棺桶だけじゃない。今日は神社でよく見るおみくじみたいのも浮いてる。

「知ってると思うけど、私はナイア・ルラトホテップよ。このクラスを担当する事になったわ。そしてこちらが「またあなたか。懲りないね、どうも」……七夜」

「いい加減あなたの顔も見飽きた。そろそろ自重するのが礼儀ってもんだろ」

あんな事言ってるが、家が隣なんだからしょうがないだろ。

「そう。でも私も貴方の変態行為はそろそろ止めないと思っていたところなの。消えなさい！ 虚数の彼方へ！！」

「悪いね 俺は校長に会う使命があるんだ」

ナイア先生は棺桶から大剣を取り出し、七夜はナイフを構える。クラスメートは全員そそくさと退出し、二人の試合はどちらが勝つか賭けをしていた。

「行け！！」

「隙だらけだ！！」

ナイア先生が棺桶を飛ばすも七夜が得意の体術で一瞬でナイア先生の前に移動し、ナイフを振るう。しかし大剣で受け止められ弾かれる。その先には棺桶が口を開け、中から禍々しい刃が二本、ハサミのように七夜に斬りかかる。

「止せつての！！」

七夜はそれを魔力を開放して弾き返す。だがこれでしばらく同じ事

は出来ない。

「墜ちなさい!!」

「蹴り穿つ!!」

いつの間にかジャンプしていたナイア先生は上から体重を乗せて大剣を振り下ろす。七夜はそれに対し斜めに蹴り上げるも、威力の差だろう、飛ばされて壁に激突した。当然だ。聞くところによると大剣を持ったナイア先生の体重は500kg。七夜のあの蹴り上げは強力だが対抗出来るはずがない。

「それでは、さようなら」

ナイア先生は七夜の襟元を掴んで持ち上げる。

「何か言い残す事は？」

「くっ……こんな、熟女なんぞに」

「誰が熟女か!!」

七夜は棺桶に放り込まれてしまった。一体どうなってしまうのやら。

「さて、改めて新しい副担任の紹介です。こちらに浮いているのがSTGf0394先生です」

「えっと、さっきの子は」

「気にしないで自己紹介を」

「……………初めまして皆さん。STGf0394です。教師という仕事自体初めてですので優しく接してくれると大変嬉しいです」

変な浮遊物だと思ったけど常識人……常識あるんだな。

「ちなみにSTGf0394というのは呼びにくいのでオム君と呼びましょう」

「ちよっ！？ ナイア先生どこからその名前を！？」

「司令という方です」

「司令……………」

よく分かんがオム君先生と呼ぶようにしよう。ちなみにSTGf0394はシューティングファイターおみくじと読むぞ。

「今日は特に連絡ありませんのでまた明日。ロック君、挨拶を」

「きりーつ、礼、さよーなら」

『さよーなら』

――

「ただいま」

「お帰りなのによご主人」

家に帰ってきたカンフーマンをアイルーが出迎える。

「疲れた」

「半日なのにですかにや？」

「濃かったんだよ」

「そんなのいつもの事ですにや」

「いつも以上なの」

この時カンフーマンは既に分かっていたのかもしれない。これから
の生活は今まで以上に苛烈でカオスなものになると。

「アイルー、飯だ。とにかく沢山」

「了解なのによ！！」

だから彼はやけ食いで現実逃避する事にした。

始まりの日（後書き）

後書きではこの小説に出てきたキャラの説明でもしていきます。

カンフーマン

出演：MUGEN

この小説の主人公。そこまで強くもないが弱くもない。地味だが交友関係はなかなか広い。夢弦^{ゆめづる}高校二年生。

アイルー

出演：モンスターハンター

見た目はアイルー村のあれ。カンフーマンのペットで家事はなんでもこなすスーパーキャット。戦う事だって出来るぞ。

紅美鈴

出演：東方project

カンフーマンが住む夢弦寮の寮長。既婚者でクリザリッドという夫がいる。惚気話が酷い。

七夜

出演：メルティブラッド

ロリコン。変態。残念なイケメン。原作と一番かけ離れた人。しかし作者の大好きな人。悲しみを背負うとある姿へと変貌する。七夜志貴ではなく七夜。

大道寺きら

出演：アルカナハート

何故か高校の校長をやっているスク水小学生。天才である。今回校長になれたのは誰かの後押しがあったとか。

ロック・ハワード

出演：餓狼MOW

大会社の社長の息子。だがそういうのが嫌いなのか寮で暮らしている。常識人。よくゲーセンに入り浸っている。

ナイア・ルラトホテップ

出演：MUGENオリジナル

カンフーマン達の担任。七夜の家のお隣さん。いやらしい服装で人気。だがそんな事を言うとは大剣を軽々と振り回す腕力で殴られる。片思いの人がいるとかいないとか。

STGf0394

出演：MUGENオリジナル

カンフーマン達の副担任。通称オム君。しかし本人はこの名前を嫌っている。おみくじみたいのが飛んでいる姿で、イメージ画像は猫みたいの。見た目によらず高い戦闘能力を持つ。

では次回もお楽しみに。

怖すぎる人々（前書き）

七夜はやりすぎた。だが後悔も反省もしていない！！

怖すぎる人々

ワイワイ ガヤガヤ

今日からちゃんとした授業が始まる。一時間目は社会科だったな。

「皆さんにお知らせがあります」

「どうしたんですか、オム君先生」

「社会科を担当していたバルバトス先生ですが、戦地に赴いたため……戦地!？」

「オム君先生、バルバトス先生ならしょーがないっすよ」

「えっ、あ、そう。では、戦地に赴いたため代わりの先生が来ます」

代わりか。バルバトス先生はよく休むから代わりじゃなくて本格的に交代しそうだな。

「カンフー、誰だと思う？ 俺は幼女と」

「ねーよ」

七夜め、ナイア先生にお置きされただろうに懲りないか。まあこいつが懲りたら世界の終わりだな。

「それでは授業開始まで待って下さい」

バルバトス先生の代わりとなると、誰か知らないけどバルバトス先生よりはマシだよな。バルバトス先生は……

――

「貴様あ！！ 宿題を忘れてんじゃねえええええ！！！」

「この程度の問題を解いた程度で調子に乗るなあああ！！！！」

「今日のテストは紳士的だ、運が良かったな」

「赤点なんぞ、取るんじゃねえ！！！！！」

「俺に怒られるために立ち上がってきたか！！」

「満点だ！？ ありえん、ありえんぞおおおお！！！！！！」

――

うん、バルバトス先生は濃いな。あれより濃くて危険な先生は来ないだろ。

「邪魔するぞ」

そう言つて教室に入ってきた人は背が高く、銀髪で、黒いスーツを着ていた。かなり鍛えているのはちよつと格闘技をかじった人間なら分かるほどだ。

「「ジョンスさん!？」」

その新しい先生の姿に即座に反応したのは博麗霊夢とロックだった。

「あ？ 霊夢にロックか。お前らこのクラスだったか」

「博麗とロックは知り合いか？ 紹介してくれよ」

「ちようどいい。自己紹介なんてのは面倒だから二人に任せる」

「えっと、彼はジョンスさんって言つて私の従姉妹で先代博麗の巫女をやつてた霊姫姉さんの旦那さんよ」

「んでその娘の都古ちゃんの遊び相手を俺がよくやってたんだ。カンフーは知ってるんじゃないか？」

「あの都古ちゃんのオヤジさんか。似てないな」

今でもよく寮に遊びに来るから知ってるが、都古ちゃんは母親似だったのかな。

「カンフー、都古ちゃんというのは幼女か？」

「……………」

「幼女なんだな。可愛いのか？」

「……………」

「無言は肯定と理解する！ お義父さん！ 娘さんを下さい！！」

「お前が何かは知らんが、言いたいの是一言だ。本気にさせたな」

ドガアアアアン

「か……………はっ……………！？」

一撃、それだけで七夜を吹き飛ばし壁にめり込ませた。

「八極拳！！」

あれは正統派の八極拳。一撃必殺を主に置いた技。多分ジョンス先生はそれを極めてるんだろうが、極めた人なら吹き飛ばした相手でコンクリの壁すら粉碎するという。七夜は咄嗟の回避でめり込むあの程度に抑えたのだろ。そういえば都古ちゃんもタイプは違うが八極拳使いだったな。

「一撃で沈められなかったのはいつぶりか。やるな、小僧」

「毎度、年増にいびられて、るんで……ね。ガクッ」

「余裕があるようだな。授業を始める」

また凄い先生が来たもんだ。でも授業はごく普通だった。

――

次は化学か。

「皆さんこんにちは、お久しぶりですね」

やってきたのはナイア先生とは違うちゃんとした修道服を着た女性、Wind先生だ。この高校の数少ない癒し系でもあるが、ある問題を抱えている。

ブーン

「ひっ！ 虫！？ いや、来ないでー！」

「みんな逃げろ!!」

「駄目だ! 間に合わない!!」

「いやあああああ!!」

Wind先生の背中から翼が生える。この状態のWind先生は楽園モードと呼ばれ、非常に問題である。何が問題か?

『うわあああああああああああ!!!!?』

常時全画面攻撃状態なのである。俺らは軽くお陀仏さ。次の授業はなんだっけ?

――

体育でした。体育の先生である大門先生なら特に何も無いな。

「今日は三年生との合同授業だぞ」

「どうしてですか? 三年生には三年生担当の体育の先生がいるでしょう」

「いい質問だカンフーマン。実は三年生担当の範馬先生は麻酔銃に撃たれてしまったそうだ」

「何故？」

「人間ドッグから逃げようとしたらしい」

それくらい我慢しようよ、地上最強。しかし三年生か。三年生にも濃い人が多いんだよ。

「大門先生、準備終わったぜ」

「ご苦労、京君」

「普通な京先輩じゃないっすか！！」

「本当だ！！ 普通な京先輩だ！！」

「普通にカツコイイ普通な京先輩だ！！」

「普通な強さの普通な京先輩だ！！」

「てめえら普通普通うつせえ！！」

でも普通なんだからしょうがない。普通な京先輩はそんな普通に怒るのも魅力だ。

「何をしておる京。先輩として後輩に怒鳴るなど恥を知れ、この戯けが」

『　　すごい漢だ』

次に来たのはご存知（？）すごい漢、不破刃先輩。とにかくすごい漢だ。

「では全員組み手を始める」

「大門先生！　それ無茶です！！」

「やってみないと分かんぞ」

「普通に強くて普通に俺らを薙払って普通に俺らの攻撃が効かない
普通な京先輩にどうやって勝つんですか！？」

「普通普通うつせえ！！　喰らいやがれええええ！！！！」

『ぎゃあああああああ！！！！』

やっぱり普通な京先輩は普通に強かった。

――

酷い目にあつた。だが幸いにも今日は四時間授業。これ乗り越えれば帰れる。高校なのに四時間なのは不思議だが気にしてはいけない。

「授業だよ」

「……………あれ？今日は数学だね。どうして日本史のGM諏訪子先生がいるんだ？」

「教員免許があればどの教科をやっても許される！まあ数学のワラキーは海外の学会だから代わりに来たんだよね」

ワラキア先生……………数少ない良心がないなんて寂しいです。時々狂ってるけど。

「諏訪子先生結婚して下さい！！」

「ななやんは消えてね」

「ガボボボツ……………！？」

諏訪子先生が手をかざすと強力な水流が七夜を校外まで押し流した。あれだけの事を範囲限定して出来るなんて、流石は神キャラ。

「みんなも悪い事したらああだよ」

『サイエツサー！！』

「それで数学の授業って何するの？」

「知らないのかよ!! ハッ!？」

「先生にタメ口なんて、教育がいるね、カン君」

「い、いえ、今は「流れちゃえ!!」ブバツ!! ガブブツ……」

気がついた時には七夜が隣にいた。こいつと同じ場所まで流されたのか……帰ろう。

怖すぎる人々（後書き）

ではキャラ紹介をしていきます。

バルバトス・ゲーティア

出演：テイルズオブデスティニー2

有名なアナゴ。みんなのトラウマ。実は教師としてはよく出来た人。体罰しそうだがしない。只今戦地。

博麗霊夢

出演：東方project

カンフーマン達のクラスメート。賽銭に飢えたりはしていないが、もし金欠で収入が全くなかった時、中の鬼が目覚める。

博霊霊姫

出演：東方project、MUGENオリジナル

先代の巫女さん。霊夢と名字が違うのは分家だから。霊力は少ないが肉体派なので問題ない。霊夢に姉と慕われる。

博霊ジョンス

出演：エアマスタ―

霊姫の旦那。婿入りしたので名字は博霊。正統派八極拳の使い手で大抵の相手は一撃で沈める。ユーモアが空回り。

博霊都古

出演：メルティブラッド

霊姫とジョンスの娘。なんちゃって八極拳の使い手。その技は父であるジョンスと違い、軽いが速い。ロックが大好き。

Wind

出演：MUGENオリジナル
風を使う癒し系。極度の虫嫌いで虫が寄ってくると無差別全画面攻撃の楽園モードになる。

大門五郎

出演：KOF

吸引力の変わらない人。体育教師として生徒にも保護者にも慕われている。

範馬勇次郎

出演：グラップラー刃牙

三年生の体育教師。注射や麻酔が大嫌い。それでいいのか地上最強。

普通な京先輩

出演：KOF、MUGENオリジナル

MUGENでは普通京としているけど普通に評価が高い。普通に強く、普通に勝つ。普通に留年しているけど普通に評価が高い。普通に人気な普通な人。

不破刃

出演：龍虎の拳外伝

すごい漢だ。

GM諏訪子

出演：東方project、MUGENオリジナル

とても美しい幼女。神様。その高い戦闘能力から戦いになる事すらない。子供っぽい部分もありよく力を使うが相手が怪我をする事は少ない。

ワラキアの夜

出演：メルティブラッド

数学教師。気が狂ってるような言動をするけどいい人。時々虚言の王という本気モードになる。

遊びとエロ本（前書き）

今回もやっちゃったぜ♪

遊びとエロ本

おいーす、ロック・ハワードだ。今日は休みだからカンフーでも誘ってゲーセンに行くぜ。

ピンポーン

「はいにゃ」

「ようアイルー、カンフーはいるか？」

「裏で鍛錬中ですよ」

「そか。あんがと」

「ご主人にこれ渡して下さいにゃ」

「気が利く猫だなお前は。じゃあな」

早速寮の裏に行くと汗塗れで型の練習をしているカンフーがいた。俺はアイルーから渡されたスポーツドリンクを投げ渡す。

「おっと、いきなりだなロック」

「お前なら取れるのは分かってるからな。しかし朝から頑張るな」

「俺には特別な力とか技はないから鍛えるしかないんだ」

「分かってんよ。ゲーセン行くから準備しろ」

「はいはい、着替えてくる」

着替えるつてもどうせ新しい胴着にするだけだろう。もうちつとな
いのかね、まともな私服とかは。

「ロックお兄ちゃん!!」

ドンッ

「うつ……都古ちゃん、いきなりのタックルはやめてくれ」

「へへっ、ごめんなさい」(ロックお兄ちゃんの匂いハアハア)

「分かればいいんだ」

「んゝ」(ロックお兄ちゃんが撫でてくれてる。ロックお兄ちゃん
の指チュパチュパしてぺロぺロしたいよお)

都古ちゃんは元気過ぎるところがあるけど素直でいい子だ。ジョンス
さん達の教育の賜物だろう。ただたまに俺の布団の中に潜り込ん
だりしてるが、甘えたい盛りなのかな？

「準備してきたぞ。あれ？都古ちゃんいつの間に？」

「さっき来たんだよ」

「カンフーお兄ちゃんこんにちは」(邪魔が……まあカンフーお兄
ちゃんなら許そう)

「ゲーセンに都古ちゃんも連れてくか？」

「そうはいかないだろ。都古ちゃんは小学生だぞ」

「お前は昔の堅物か。都古ちゃんは行きたいよな？」

「うん！！」（でもゲーセンなんかよりロックお兄ちゃんとホテルの方がいいな）

「……………やっぱり」

「さあ行こう」

「おー！！」

「話を聞け！！」

何が起こるか分からないこの世の中、俺らがついているとはいえゲーセンなんて場所に連れて行ったら七夜みたいな変態に襲われるかもしれない。そんな事になったらジョンスさん達に顔向け出来ない。もちろんそんな事をさせるつもりはないが。

「っってお前ら早いって！！ 待てよ！！」

――

結局都古ちゃんまで一緒に来てしまった。

「都古ちゃん、俺と一緒にいなさいよ」

「はーい」(ロックお兄ちゃんったらダ・イ・タ・ン)

「俺は『辻斬りみよんみよんむ』をやってくるな」

「ああ」

あれ見てる分には楽しいんだけど俺は苦手だな。やるなら格ゲーだろ。

「何にするかな。おっ『ストリートハンター』の新作じゃん」

「ロックお兄ちゃん子供みたいだよ」(でもそんなロックお兄ちゃんも可愛い)

ストハン、今回の新キャラはどんなのがいるかな。なっ！ こいつ復活したのか！？ 持ちキャラだったから嬉しいな。

「早速やるか。都古ちゃん、隣に座って」

「うん」(もたれ掛かっちゃお)

とりあえず再登場した持ちキャラのボレックスのストーリーモード

でもやるかな。

『challenger!!』

おつと乱入か。いいぜ、相手をしてやる。相手が使ってるのはリュ
ーか。正統派だな。

『波動撃!! 波動撃!!』

遠距離で攻めてくるか。それは待ちガイズの戦法だろ。だがボレツ
クスに遠距離攻撃がないからといって油断するなよ。

『フン! フン! フン!!』

ブロックキングをしながら近付く。これなら上龍拳を喰らってもブロ
ッキング出来る。

『ふっ!!』

『オウツ!?!』

しまった!! 投げか!! 投げ技はボレックスの十八番だつての
に。

『雷神波動撃!!』

『オオオオオウ!?!』

やられたが、まだ勝負は始まったばかり。ゲージを吐くなんて勿体
無いぜ。

『Hei!!』

近づいてボレックスのゲージ乱舞を発動させる。2ゲージの乱舞は効くぜ。

『ハアツ！ ハアツ！ ハアツ！ ハアツ！ ハアツ！ ハアツ！』

「嘘だろ!？」

乱舞を全てブロッキングしやがった!! なんてスキルだ!! これで相手のゲージも一気に貯まっちゃった!!

『はああああああ』

これは3ゲージからの超乱舞! ボレックスの体力で耐えきれる自信がない。ここはガード……

「そんな事出来るかよ!!」

『let's go!!』

カンカンカンカンカンカンカンカンカン

「馬鹿な!？ 全てJDだと!？」

JD、ジャストディフェンスと呼ばれるそれを成功させると体力とゲージが回復する。乱舞をJDしたボレックスの体力は全回復。ゲージもマックスだ。

「お返しだ!!」

まずはボレックスのノーゲージコンボを決めていく。そして空中コンボの締めはもちろんゲージ投げだ!!

『ボッ!!』

「そこ!!」

ボレックスの投げは一切のコンボ補正を受け付けない。そして3ゲージある場合、追加コマンドで相手を離すことなく連続投げが出来る。

『ボッボッボッボッボッボッ!!』

「ラストオ!!」

『スーパ―ボッ!!』

これで相手の体力は9割吹っ飛んだ。そしてピヨッている相手にコンボを決めて決着を着けた。

「ワンチャンアレバカテル」

「ロックお兄ちゃん流石だね!!」(でも油断したら駄目だよ。あれなら私だって勝てちゃう)

「見事だ。まさか10割りで切り返されるとは思わなかった」

「JDが決まらなかったらやられてたよ」

箱体の向こうから出てきたのは銀髪の和っぽい男と同じく銀髪の犬っぽい女。カップルみたいだが、男が俺を見た瞬間に目つきが変わった。

「青龍、このような場所で出会うとはな」

「はい？」

「刹那、何を言ってるんだ。この人は楓とやらじゃないぞ」

「久那岐、この髪、顔付き、どう見ても青龍だろう」

「服装、帯刀していない」

「……………誰だ貴様は！？」

なんだか怒鳴られた。そこまで似た人がいるのかよ。

――

ロックの奴相変わらず格ゲーやってのかな。俺はガンシューティングとか自分がキャラになるのが好きなんだが、絶対こっちのが楽し

いのに。

『千二百十九人斬り！！　まさに一騎当千みょん！！』

まあまあな記録か。だが一位のセイリユウさんにはまた届かなかった。

「なかなかだが、未熟だな。交代しな」

「あ、すみま……えっ？」

俺と交代した人ってどう見ても……うわっ、どんどん記録伸ばしてく……！

『千五百六十人斬り！！　にゅーれこーどみょん！！』

すげえ……すげえけど……

「ロック！　ロックじゃないか！！」

「はっ？」

「都古ちゃんはどうしたんだよ。はぐれた、というのはないか。一人なのか？」

「何言ってるんだよ。第一誰だよ、あんたもロックつてのも」

「お前が言ってる事がよく分からないな。遊んでんのか？」

でも何かいつものロックと雰囲気が違うような……ああ、見た目だ。

こんな服ロックは着ない。

「って誰だお前は!？」

「いい加減苛ついてきたぞ」

「サーセンwww」

人違いだったなんて、でもよく似てるな。

「カンフー!」

この声は……

「ロック? ロックなのか?」

「なんで疑問系なんだよ」

本物のロックと都古ちゃん、それと銀髪のカップルがやってきた。

「青龍が二人!？」

「刹那、別人だ。落ち着け」

「でも本当によく似てるね」(でも都古には分かるよ。こんなのとロックお兄ちゃんを見間違えるはずないもん。匂いとか筋肉の付き方が全然違う)

「青龍が一人、青龍が二人」

「ファイナル分身！！」

『帰れ』

突然割り込んでくるとは、汚いなすが忍者きたない。

――

集まった全員で昼飯食ったり、ゲームしたりしながらいろいろ話した結果、ロックとロックそっくりの奴、楓は全く関係ない事が分かった。

「紛らわしいな。ここまで瓜二つなのに血縁ですらないとは」

「よく言うだろう。世の中には似た人間が三人はいると」

「俺は久那岐を間違えるなどない」

「私もだ、刹那」

そこのバカップルは少し黙ってる。

「お前ら漫才師目指せよ」

「「なんでだよー!!」」

「息ぴったりじゃん。全ての鍵^{わかい}にぴったりハマる、笑いの鍵穴^ツ「ロック」ってな感じでさ」

「ツーロックってこいつメインじゃねえか!!」

「それになカンフー、笑いつてのは」

「「ツツコミだけでは成り立たない!!」」

うん、やっぱりいいコンビだ。勿体無い。これなら大阪に出しても恥ずかしくないのに。

「今日は迷惑を掛けたなロックとやら。また（格ゲーで）手合わせしよう。青龍、今回は見逃してやる」

「ああ、またやろうぜ」

「あんたとの因縁は特にないんだがな」

「俺らもいい時間だし帰るか」

いつもなら飯も食わずにロックに付き合っただが、今日は都古ちゃんもいる。早めに帰ろう。

「だな。じゃあな楓」

「じゃあなロック」

ゲーセンから出ると空は暗くなり始めていた。

「都古ちゃん、時間大丈夫か？」

「さっきケータイで連絡したらロックお兄ちゃんが一緒だからいいって」（これってつまり親公認って事になるよね）

「最近の小学生はケータイも持ってるのか」

ロック、それは本気でそう思っているのか？ 現代常識は備わっているか？

「……………カンフー」

「どうした？」

「ここはどこだ？」

「どこって……………」

どこだ？ 大通りを歩いていたはずなのに知らない道にいる。この街に生まれ育った俺やロックが知らない道なんてないはずなのに。

「あらあ、可愛い獲物達」

「「「！？」」「」」

突如水溜まりから女が出てきた。いや、暗くて見難かったが、あれ

は水溜まりじゃない、血溜まりだ!!

「震えちゃって、可愛い」

女は血のような赤い服と帽子、ピンクの髪をしていた。こいつ、危険だ。

「都古ちゃん下がってろ!!」

「私だって戦えるよ!! ちょうしんちゅう!!」

都古ちゃんは一瞬で女の後ろに回り込み、肘打ちを入れようとした。

「血風を纏う」

「へっ?」

「抱け!!」

「キャアッ!?!」

血の守りなのか何か知らないが、都古ちゃんの攻撃が止められて吹き飛ばされた。

「都古ちゃん!?! てめえよくも!!」

「ふふふ、貴方は私を良くしてくれる?」

「デッドリーレイブ!!!!」

「もつとよお！！」

なっ！？ ロックのデッドリーレイブ・ネオを受けきっている！？

「うおおおおおおおおおおお！！！！！」

「もう終わりなの？」

最後の気の衝撃波ですら効いていない。どんな化け物だよ。

「灼熱の血を孕む、爆ぜよ！！！」

「ぐああああああああ！！？」

血でロックは捕捉され、血の龍がロックを飲み込んだ。だがこんな大技を使ったんだ。僅かだろうが反動で動けないはずだ。その隙に叩き込む！！

「うおりゃあ！！」

後ろから三連撃の掌底を女に叩き込んだが、女は血となって弾けた。ダミーだったか！！

「こつちよお」

「セイヤツ！！」

後ろから聞こえてきた声に振り返ると同時にアップパーを放つ。だがそれも顔をズラすだけで避けられた。

「アハハ、痛いでしょう！！」

ズドン

「うがあっ!!!?!」

胸ぐらを掴まれ、走りながら壁へ叩きつけられた。

「もうイっちゃったの?」

「勝手に……終わらせるな!!」

「ああ……まだ……終わっちゃいない!!」

俺とロックは立ち上がったが、それが限界だ。ただどこで何もしないでやられるわけにはいかないんだ!!

「いいわあ、もっと高ぶらせて! さあ、愛してあげる!!」

「悪いがそのような事をさせるつもりはない。テュホンレイジ!!」

「アアン!?!」

「「クリザリッドさん!!」」

「ハッハッハ! 君、先ほどの運送技、荒削りではあるがなかなかだったよ。どうかね、我が社の試験を受けてみないか?」

「社長、こいつはうちの嫁の寮生を襲った奴ですよ。勧誘しないで下さい」

ルガル運送のルガル社長までいる。俺らじゃ相手にもならなかったけど、この二人なら……

「強者が出て来ちゃったわね。残念、引かせてもらっわ。今度はイかせてね、ボーヤ達」

逃げたか。流石にこの二人は分が悪いと踏んだか。

「大丈夫か、カンフー君、ロック君」

「なんとか」

「すみません、みつともないとこ見せて」

「この若さであれだけ出来れば十分だろう。この娘は私が家に送り届けよう」

「あ、都古ちゃんの家の場合」

「ジョンスと霊姫の娘だろう。知ってるから安心しなさい」

そう言うところルガル社長は都古ちゃんを抱きかかえて行ってしまった。相変わらずの速さだ。

「二人も帰るぞ。肩を貸そう」

「はい」

「ありがとうございます」

俺らはクリザリッドさんに肩を借りながら寮へと帰った。しかしあの女、一体何だったんだ。

――

とある地下バー。そこには二人の女がいた。そしてそこに先ほどの女がやってきた。

「ごめんなさい。若い子と遊んでたら遅れちゃった」

「また通り魔紛いの事してたの？ いい加減になさい」

女の一人、ナイア・ルラホテップがそう言う。

「楽しそうですね。それに引き換えナイアさんは教職者になって変わりましたね」

もう一人の女、間桐桜がナイアに対して嫌みのように言う。しかしナイアは気にしてもしないようにワインを飲んでいた。

「いいじゃない桜ちゃん。お陰で愉しかったわよ」

カンフーマン達を襲った女、アナザーブラッドがそう言った瞬間にその首に大剣が突き付けられたら。

「私の生徒に手を出したわね」

「ウフフ、どうかしら。赤ワインをお願い。血のように真っ赤なのをね」

大剣を突き付けられているというのに何でもないようにアナザーブラッドは注文をする。すると誰もいないカウンターに赤ワインが置かれた。

「あの子達、伸びるわよ」

「私の生徒だから当然よ。問題は貴女が手を出した事よ。無事なんでしょうね」

「途中でルガル・バーンシュタインとクリザリッドって邪魔が入っちゃったもの」

「残念ですね、アナザーブラッドさん。一人ならともかく、その二人の相手は私もしたくないですから」

「桜ちゃんは分かってくれて嬉しいわあ」

「ふん」

自分の生徒に手を出されてご立腹なナイアは仰ぐように酒を飲んでいた。

「あらあら、ナイアちゃん可愛い」

「それでは始めましょうか。音頭はどうします?」

「簡単よ。三人の再会を祝って」

「乾杯」

「……乾杯」

遊びとエロ本（後書き）

都古ちゃんが変態というのを見ないから変態にした。後悔はしていない。

そしてストリートハンターは分かったと思いますが、ストリートフアイターのパロです。
ではキャラ紹介いきます。

刹那

出演：月下の剣士

ご存知せっちゃん。久那岐の彼氏。別に楓と因縁があるとかじゃないが、同作品のキャラとしてやっておくべきかと思っただけらしい。

天楼久那岐

出演：大番長

ご存知くなー。刹那の恋人。物事を冷静に判断する。よくよく神キヤラに変身する。

楓

出演：月下の剣士

ご存知ロック！ ロックじゃないか！！ この作品では常時覚醒モードで金髪だが、普通は黒髪なのでロックではない。

アナザーブラッド

出演：機神飛翔デモンベイン

ご存知エロ本。鬼畜当て身でMUGENで大活躍。ナイアや桜とは旧知の仲。時たま今回のような行動をする。気になる人がいるらしい。

クリザリッド

出演：K O F

美鈴の旦那。ルガル運送の中間管理職として活躍している。その高い戦闘能力でどんな運搬物でもしっかり守ってお届けします。

ルガル・バーンシュタイン

出演：K O F

ルガル運送の社長。安い、速い、安全、そして強いをモットーの会社運営をしている。勿論本人も高い戦闘能力有している。

間桐桜

出演：F a t e / s t a y n i g h t

ご存知黒桜。普段は普通に一人暮らしをしている。だが戦闘になると『この世全ての悪』^{アンリマユ}の力を使っていたのでその影響か、普段も少し歪んだ考えをするように。心に決めた人がいるらしい。

オム君頑張る（前書き）

タイトル通りオム君メインです。

オム君頑張る

僕が学校の教師になったのはこの世界を調査のためという名目なんだけど、きつと司令は面白いから送り込んだんだろうな。

「では皆さん、さようなら」

『さよーならー』

みんないい子だな。この高校も僕に送る資料はデータ化してくれたり、本当にいい世界だ。

ジッ ジジッ

おや？ テレビが突然砂嵐を起こした。壊れたのかな？

『き………か…？』

「今、声が」

テレビを見ていると映像がはつきりしてきて人の顔が見えてきた。

『おっ、繋がった』

「パッチエさん！！」

テレビに映ったのは黄色い服を着たパチュリーさん、僕はパッチエさんと呼んでる人だ。普段は通信とかが出来ないからこうやって話す事は珍しい。

「どうしたんですかパツチエさん？」

『珍しい事をしていると聞いて。どうなんだ？　しっかり出来てる？』

「うん、みんないい人だから」

『本当にか？　オム君はお人好しだからな』

「大丈夫だ「わ・わ・わ・忘れも」あ、七夜君」

パツチエさんと話していたら七夜君が教室に入ってきた。忘れ物をしたみたいだ。

「……………浮遊物のオム君先生が逢い引きだとお！？　これは新聞部に売り込みだ！！」

「えっ！？　な、七夜君！？　違うよ！　待って！！」

追い掛けようとしたけど七夜君はもう廊下にはいなかった。こんな一瞬でいなくなるなんて。

『おうおう、あれがいい人か？』

「いや、いい人なんだよ。普段から変わってるけど、その、きっといい人だよ！！」

七夜君はロリコンだったり、変態的だったりするけど、いい生徒なんだよ。

『そうかあ？ それにしてもあんなに否定するなんて、私と恋人になるのは嫌か？』

「パツチエさんまで何言ってるのさ！！」

『悪い悪い。冗談だ。だから変な気起こすなよ』

「起こさないよ！！」

どうしてこんなにイジるのかな？ それに僕は肉体がないんだから恋人なんて出来てもなあ。

『パツチエさん、そろそろ時間だよ』

『了解だ妹様。じゃあな、オム君』

「うん、またね」

今度誰かと通信する時は一人だけの時にしよう。他人に見られるとさつきみたいな事になりかねない。

――

職員室で書類整理を終わらせて帰る準備をしていたら、きら校長先生がやってきた。

「やあオム君先生！ 頑張ってるな！！ うちの教師だから当然だがな」

「きら校長先生、何かご用ですか？」

「うむ。君も部活の顧問をやってみないか？」

「顧問、ですか。僕に出来ますかね？」

僕はこんなおみくじみたいな見た目だし、出来そうな部活といえばパソコン部とかかな？

「まあどこの部活になるかは教頭に任せよう」

「そうですか」

そういえばこの高校の教頭って会った記憶がないな。でもこんな学校の教頭なんだ、きつととても立派な先生に違いない。

――

この部屋が教頭室か。早速入ってみよう。

「失礼しま、うわっ!？」

扉を開けると神々しい光が目に入ってきた。この輝きは一体!？

「ようこそ、そして初めましてオム君先生。私がこの夢弦高校の教頭、マハヴィロです」

こ、このお方が教頭先生。なんというか、神様だ。神様が降臨してらっしゃる。

「オム君先生、貴方の顧問をする部活決めます」

「は、はい!！」

「そうですね……貴方なら戦闘部でもやっていけるでしょう。お願いしますね」

「了解しました！ 全力を尽くします!！」

引き受けたけど、戦闘部って何なんだろう？ 言葉だけ聞くと戦う部活みたいだけど僕でも大丈夫なんだよね。

――

教頭先生から部活動は外でやっているって聞いたけど、外っていつでもこの高校広いからな。

「何をしているのですか？」

「えつと君は？」

「二年生の山本無頼です。STGf0394先生ですよ」

「うん。あのさ、戦闘部ってどこで活動してるか知らないかな？」

「自分がちよと行くと所ですからついて来て下さい」

「ありがとう」

部員にたまたま会えるなんて、僕って運がいいな。

「先生は何故戦闘部に？」

「実は顧問を頼まれて」

「それは凄い。強いんですね」

「そうでもないよ。そういえば戦闘部ってよく知らないんだけど、教えてくれない？」

「分かりました。戦闘部はこの高校に入学した全員が強制入部する部活です。こう聞くと聞こえが悪いですが、活動は参加自由なので全く参加しないまま卒業する生徒もいますが、大抵は参加します」

「どうしてかな？ 戦闘部なんだから戦うんだよね。痛い事は自分からしたくないんじゃない？」

「そうです。簡単に言ってしまうえば戦って強くなる部活です。もちろん怪我人も出ますが、この世界では力が重視される事が多いです。ですから戦闘部で鍛えて社会に出ても大丈夫なように備えるわけです」

「そういえばこの前の席替えの時も被った人は戦いで決めていたな。それがこの世界の風習って事なんだな。」

「見えてきましたよ」

「おお」

そこはとても広い平原で、沢山の生徒が試合をしていた。中にはどう見ても生徒じゃない人もいる。

「山本さん、お待ちしておりました」

「それは悪かったね、巫浄さん」

「そのような事はございません。そちらは、STGf0394先生

ですね。初めまして、巫浄翡翠と申します」

「初めまして。二人は恋人？」

「な、ななな！？／／／／」

「ち、違います！！ 私と山本さんはパートナーです！！／／／／」

「パートナー？」

パートナーって恋人とか夫婦とかそういうのじゃないみたい。

「パートナーというのはタッグを組む相手の事です。戦闘部は試合の時、主にシングル、タッグ、チームに分けられます。今日は俺と巫浄さんがタッグを組むだけです。恋人とか、そんなのでは」

「そうなんだ。誤解してごめんね」

「「いえ」」

こういうのを誤解されるのはいい気分じゃないよね。反省しないと。

「ぬあああ！ なんだこのおみくじは！」

「うわっ！？」

突如現れたのは筋骨隆々とした巨漢の人。なんだこの人は、部外者か！？

「ラオウ君、こちらはSTGF0394先生。新しく顧問に就任さ

れる方だよ」

「なんとお！？ これは無礼しました！！ 自分はラオウ、この高校の一年生です！！」

「一年生！？」

お前のような一年生がいるか！！ ハッ、今のセリフは一体……

「山本先輩！ 自分はバイトがありますのでお先に失礼します！！」

「頑張つてね。無理して身体を壊さないように」

「ご心配感謝します」

凄い一年生もいたもんだ。いや、本当に一年生なのか？ もしかしたら留年しまくってるだけかも。

「ラオウ君には困りましたね。悪気はないですから勘違いしないようにお願いします」

「うん」

「おう山本、今日はタッグか？」

「ソル先輩、そうですね。シングルも悪くないですが、タッグは普段見えないものも見えますし」

今度はツンツンした茶髪に鋭い目つき、赤いヘッドギアを着けて剣を持った人が来た。この人も学生っぽくないけど、さっきのラオウ

君に比べたらマシだね。

「いい考えた。一人だけでは限界があるからな。それで、こっちは確か……オム君先生とやらだったか？」

「初めまして。戦闘部顧問を任されたんだ」

「三年のソル・バッドガイだ。しかしあんたが顧問か。どれ、一試合やってみるか？　顧問なんだ、相手してくれんだろ？」

「ちょっとソル先輩、いきなりは」

「大丈夫だよ山本君。よろしくね」

「覚悟は出来てるようだな。遠慮なく行くぜ！！　ドラゴンインストール！！」

身体から炎が出たという事は炎を使うのか。それにあの剣は速く攻撃するものじゃなくて力で攻撃するもの。まだ情報は少ないけど、これだけあれば多少の戦略は組める。だけど最初は……

「おみくじシステム起動！！」

僕の側面で文字がルーレットのように回り出す。これで出る文字は大吉、大凶まであり、出た文字によって使える武装が決まるのだ。

「余裕こいてんのか？　ガンフレイム！！」

ソル君が剣を地面に突き刺すと炎が地面から出てきた。僕がそれを避けると追撃がやってきた。

「ヴォルカニックヴァイパー！！！」

「うくつ！？」

地面を剣で決るような対空攻撃。掠っただけだけど、直撃してたらやられてた。

ピコーン

おみくじが決まったか。出た目は……大凶！！

「反撃させてもらっよ」

僕の身体からビットやら小型砲台やら、沢山の兵器が出てくる。おみくじシステムの特徴は占うのは相手の運勢であり、大凶はその中でも最悪。僕にとっては最高の出目なのだ。その内容は僕が使える武装を無制限に使用可能になる事。

「くつ！？　なんだこの弾幕は！！」

「耐えきれるかな？」

レーザー、小型爆弾、エネルギー弾、とにかく様々な攻撃がソル君を襲う。もちろん僕自身も攻撃をする。

「あまり……舐めるなあ！！」

この弾幕の中突撃してきた！？

「タイ」

右手に持った炎を纏った剣で殴るように攻撃してくる。もちろん避ける。

「ラン」

次は炎を纏った左手で殴ってくる。これも避けるけど、左右にはまだ炎が残っている。

「レイブ!!!」

逃げ場のない僕にソル君は剣を振り上げてきた。左右に逃げ場はなく、上空に逃げるのは間に合わない。それでも手はある。

ガキイン

「なんだと!?!」

僕の隣を剣が通り抜けていく。剣の側面をエネルギー弾で撃って軌道をズラしたんだ。そして僕はソル君とゼロ距離になるように近づいた。

「喰らえ!!!」

「うぐおあつ!?!」

ゼロ距離レーザー。これを喰らったソル君は後ろに飛んだ。

「そこまで!!!」

いつの間にかいた黒子の人^{ひと}が止めに入る。僕は武装を収めた。

「つつつ、予想以上だよ、あんた」

「ありがとう。大丈夫？」

「この程度ならな。あー、腹いて」

「凄^{すご}いじゃないですか0394先生。ソル先輩を倒すなんて」

「運が良かっただけだよ」

「だがその運が戦いでは重要な要素となる。あんたは強い、オム君先生。荒くれ者も多いが、これからよろしく頼むぜ」

「こちらこそ」

新しい職場に新しい仕事、慣れない事だっ^たて多いけど、優しい人が多いから頑張^つていける気がする。

余談だけど次の日に僕に彼女がいると報道されて生徒にも先生にも質問攻めをくらいました。

「悪いね」

オム君頑張る（後書き）

オム君頑張ってます。オム君って本当にいい性格してますよね。
ではキャラ紹介していきます。

Cパチユリー

出演：東方project、MUGENオリジナル
パッチェさん。戦闘中はオム君と同じような通信能力で様々なサポートを受ける（自爆とか自爆とか自爆とか）。オム君とは交流はそれほどないが仲はいい。だが恋心は一切ない。

マハヴィロ

出演：MUGENオリジナル
論外教頭。これまでに撃破記録はない。この高校は彼がいないと成り立たない。

山本無頼

出演：大番長
糸目男爵。ボクシング部がメイン部活。ボクシング部が休みだとたまに戦闘部に来る。女性が苦手だが翡翠は大丈夫なため、周りはカップルと認定。本人は否定。

巫浄翡翠

出演：メルティブラッド
メインは家庭科部。無頼に誘われると戦闘部に来る。男性恐怖症だが無頼は大丈夫。姉にはさつさと付き合えと言われているらしい。

ラオウ君

出演：北斗の拳

インパクトのある一年生。メインはパソコン部。現代社会において情報は必須と考えているらしい。戦闘におけるポテンシャルは三年生以上とも。そりゃそうだ。

ソル・バッドガイ

出演：ギルティギア

戦闘部に入り浸る三年生。かなりの強さを持つ。意外に丸い性格をしている。戦闘部で出会った彼女がいるらしい。

こんな七夜（前書き）

今回は七夜メインでやってみた。まあカオスだから見ていっ
てくれないか？

こんな七夜

.....子供が遊んでいる。あれは、ガキの頃の俺とカンフーか。となるとこれは夢という事になるな。

「じゃな〜」

「またね」

俺には親がない。仕送りしてくれる誰かはいるが、家で待ってくれている人間はいない。だからなのか、俺が狙われたのは。

「七夜君、こんにちは」

「こんにちは！ ナイアお姉ちゃん！」

「これからお夕飯だけ一緒に食べる？」

「うん！！」

独りきりの俺にこの誘いはどれだけ嬉しかった事か。だがいけない。これは甘い甘い罠なんだ。行くな俺！！　せめて夢の中でくらい変わってくれ！！

「さあいらっしやい」

「お邪魔しま〜す」

「お姉ちゃんのお友達もいるけどいいわよね？」

「いいよ」

「良くない！！
今ならまだ間に合う！！
帰るんだ！！」

「ナイアちゃん遅いわぁ」

「あら、その子が七夜君ですか？　初めまして、間桐桜です」

「アナザーブラッドよ」

食卓にいた二人の女。そして食料は何もなく、食卓に似つかわしくない拘束具がテーブルに乗っている。

「お夕飯がないよ？」

「だって今来たばかりだもの」

「そうねえ。今日のお夕飯って言うのは」

「君よ、七夜君」

[illegible]

――

「止めろおおおおおおおおおおお！！！！」
ハ
ア…ハア…」

なんとかギリギリのところで悪夢は終わった。良かった。

「騒がしいな。どうした？」

俺の叫びを聞いたのかとある奴が部屋に来た。白の長髪に紫のリボン、赤い服を着たガキ、煉だ。実際はガキなんて年齢じゃないんだが見た目がな。

「煉、か。なんでもない」

「そんな凄い寝汗をかいてか？ 大方悪夢でも見たんだろう。タオルと水を持ってきてやる」

「助かる」

煉がうちに住み着いたのは三年前なのでそう長い付き合いではないが、互いの事はよく分かる。

「ほら」

「ンゲング、プハア」

「七夜、少し外を歩いてきた方がいい。朝ご飯は僕が作っておこう」

「ああ、そうする」

気遣いも家事も完璧にこなす。容姿だって俺のタイプにど真ん中ストライクだ。一つの問題を除けば求婚していた。

「ああ……」

「どうかしたか？」

「何故煉は男の娘なんだ」

「いい加減しつこいな君も!!」

サクッ

煉の投げたトランプが頭に刺さる。痛いです。こんな事する子はモロッコに行け。

――

流石に早朝だから人が少ない。しばらくしたら出勤通学で騒がしく……今日は日曜日だ。

「七夜か。こんな早朝からどうした」

「それはこっちのセリフだカンフー。何をしている」

「早朝ランニングだが」

真面目、いやこいつは趣味か。好き者だね、どうも。

「お前は どうしているんだ？」

「夢見が悪くてな。なに、もう帰るさ」

「無理すんなよ」

こいつに心配されるようでは俺も駄目だな。早く帰ってもう一寝入りするか。

――

帰り道にあの公園の前を通る。それだけで嫌な思い出がこみ上げてくる。

「未熟」

こんな事をいつまでも引きずってでは成長出来ない。さつさと捨て去ろう。

「や――っ!! もりやんのバカー!!」

「いや、アンノウンお嬢様。お嬢様が大人しく帰ってきてもらえれば」

「絶対やだ!!」

なんか幼女がジャングルジムの上で籠城してるな。あの男はお嬢様と呼んでいたのをみる限りはボディガード的な存在か。あんな和服で刀持つてるボディガードは初めて見たが。

「! その通りすがりのお兄ちゃん! 助けて!!」

「いいだろう」

「!? いや、いきなり来て何を言っんだ君は!？」

「幼女に助けを求められて拒否する人間はいない。違うか？」

「……成る程、変態か。貴様のような男をお嬢様に近付けるわけに

はいかない。己の器を知れ」

「斬刑に処す」

――閃鞘・八点衝

「十六夜月華!!」

俺がナイフで無数の斬撃を放つと男も刀で無数の斬撃を放ってきた。数は俺が上だったが、威力は向こうが上。まあ相打ちだったってわけだ。

「出来るな。俺は御名方守矢。お前の名を聞こう」

「七夜。ちょっとクールなイケメンだ」

「ふっ、大口を叩くだけの實力はありそうだ。だが負けん」

男、守矢は一瞬で俺の後ろに回ってきた。瞬間移動、ではなく歩法か。だがそういう移動が出来るのはお前だけじゃない。

――閃鞘・八穿

「なっ!?!」

「寝てな!!」

また同じ歩法で避けたか。

「貴様も歩月を使えるのか? いや、歩月では宙に跳ぶなど出来ない

い
」

「これは我流だよ。ま、技なんていちいち気にする事でもない」

「……全力でやらせてもらう」

「なら見せてもらおうか。斬る！」

――閃鞘・七夜

「甘い!!」

キン

弾かれた!? マズい、さっきの剣速を考えると一気に叩き込まれる。

「ハッ! セイツ!!」

「ぐうあつ!?!」

峰打ちとはいえその連撃は速く鋭い。

「乱れ雪月花!!」

「ぐああああああ!!?!」

最後に更に強力な連撃。ああ、負けるのか。………負ける? 幼女を前にしてカッコイイところも見せられずに負けるのか? そんなの認められるか!!

「始めるか」

――

変態ではあったが見事な強さだった。だが倒したはずの男、七夜の
声が聞こえ振り返ると七夜は立っていた。

「！ まだ立てるとは……それに雰囲気か」

「行くか」

ナイフを投げてきた！？ しかも数が並ではない！！ 避けきれる
か？

「逃げるなら……」

消えた！？

「もう遅いか」

「うおおお！？」

一瞬にして全身に傷を付けられた。何をされた！？　だが七夜は後ろにいる。この機を逃すな！！

「十六夜月華！！！！」

「止せつての！！」

「ぐっ！？」

弾かれ、いや吹き飛ばされた！！

「極彩と散れ」

「がつ……！！？」

強力な斬撃をほぼ同時に二撃受けて俺は倒れた。

――

弾幕モードを使うのは久しぶりだったな。身体が軋む。慣れない事はすべきじゃない。

「ほら、もう大丈夫だ」

「お兄ちゃんやりすぎ!! もりゃんかわいそう!!」

「いや、助けてくれと言ったのは君で」

「嫌い!! あっち行って!!」

ガーン

こんな、幼女に、嫌いと言われた。ふ、ふふふ、いいんだ。どうせ俺は変態だからさ。

――

今日も美味しい味噌汁が作れたというのに七夜は遅いな。

「……ただいま」

「お帰り。暗いぞ、どうした」

「幼女に、嫌いって」

「いつもの事だろう。落ち込まない落ち込まない」

「うん……」

七夜のこういうところが母性をくすぐられるんだよな。って僕は男じゃないか。何を考えているんだ。

「煉、女の子になって癒してくれ」

「君はそろそろ爆死するかい？」

僕は持っているトランプ全てを七夜の周囲に投げつけた。

「ごめんなさい。家が爆発したら困ります」

「自分は爆発してもいいんだね。まあ僕としても家がなくなると困る。さあ朝食にしよう。今日は和食だよ」

「それは嬉しいな」

元気のない七夜のために作ったからね。た〜んと食べてほしいな。

こんな七夜（後書き）

いろいろやりすぎたかな。まあ気にする事はないさ、MUGENだもんね。

ではキャラ紹介をしよう。

煉

出演：メルティブラッド、MUGENオリジナル
レンの改変キャラ。トランプと炎を使う。本作ではまさかの男の娘。
理由はこの子の作者兼CVの人が男だからさ。

アンノウン

出演：EFZ

本当は英語で書くが、なんか英語は小説では微妙だと思ってカタカナにされた子。幼女。

御名方守矢

出演：月下の剣士

アンノウンのボディガード。優れた剣術で敵を倒す。僅かな隙も見逃さず逆転劇を披露する事もしばしば。

弾幕七夜

出演：メルティブラッド、MUGENオリジナル

七夜の弾幕モード。常時全開で好き勝手に技を使える。ナイフを使った無数の弾幕。強力な回復。無敵のセブンスなど、狂キャラ代表の一人。

アイドルコンサート(闘)(前書き)

なんだか書くのが止まらないんだ。

アイドルコンサート（闘）

学校の昼休み。俺とロックと七夜は何でもありのババ抜きをしていた。

「「「……………」」」

ちなみにジョーカーを持っているのは俺なんだが、どうやって二人にくれてやろうか。このジョーカーには小さな傷がある。それを二人も気付いているはずだ。運では取ってもらえない。負ければペナルティーがある。どうする……

「あんた達！ 良い物を持ってきたわよ！！」

「うおっ！？」

突然やってきた博麗に驚いたフリをしてジョーカーを落とす。ナイス博麗。

「あゝ、バレちゃった。これじゃあゲームの続行なんて出来ない。お開きだ」

二人は俺がわざとやったのに気付いているのだろう。ジト目で見てくるが、何でもありだからいいんだよ。

「さて博麗、何が良い物なんだ？」

「はるかっかのコンサートチケットよ。どう、欲しいでしょ。今なら安く譲ってあげるわよ」

「……別にいらないな」

「なんでよ!! 今話題の新ジャンルアイドルじゃない!! 知らないわけじゃないでしょ!？」

まあ有名だからな。テレビでも何度も見るし、コンサートチケットだってネットで高値で取引されると聞く。けどな……

「ロリじゃないし」

「ゲーセンで金使ったし」

「もう持ってるし」

「あんたは、ってカンフー! なんて純粋に興味を持たなさそうなあんたがチケット持ってるのよ!!」

「それは俺も気になるな」

「お前も昨日、俺とゲーセン行っただじゃないか」

ロック、俺はお前のように湯水の如くゲーセンには注ぎ込んでないぞ。

「簡単だよ。貰ったんだ」

「これを貰った? 誰からよ」

「クリザリッドさん。美鈴さんと一緒に行く予定だったみたいだけ

ど、急遽別の用事が入ったからって」

だから二枚持っている。それで俺とアイルーで行く予定だったんだよな。あいつが結構好きだし。

「……やはり買おう。二枚あるか？」

「四枚、私のは除くと三枚あるわ。でも七夜つたらいきなりどうしたの？」

「煉が行きたがってたのを思い出してな。なに、軽い恩返しさ」

「みんな行くのかよ。博麗、後払いでいいなら買う」

「毎度。じゃあコンサート開始2時間前に闘狂ドームに集合ね」

「早くないか？」

「多少早い方がいいの」

もしかしたら一番楽しみにしていたのは博麗かもしれないな。

「博麗はチケットどうやって手に入れたんだ？」

「私も貰ったの。それでタダでくれてやるのもなんかやだから売ってあげるのよ」

セコいな博麗の巫女。巫女がそんなに強欲で許されるのか？

――

ここが闘狂ドーム。テレビとかでは見るけど実際に来たのは初めてかもしれない。

「ご主人！ 凄い人ですニャー！！」

「そうだな」

「カンフー！ こっちだ！！」

「おう、お待たせ。七夜と博麗は？」

「七夜は煉に引っ張られて出店に、博麗はグッズでも買いに行ってるんじゃないか？」

それぞれが楽しんでるな。お祭りだからそれが正しいか。

「ご主人……」

「ははっ、いいぞ。好きにやってこい」

「ありがとうございますニャー！！」

小遣いは持たせたから大丈夫だろう。何かあればケータイに連絡も来るだろうし。

「ロツク、俺らも行くか？」

「だな。見て回ろう」

――

「ふふふ」

「そう引っ付くな。歩きにくい」

「いいじゃないか」

七夜が僕のためにチケットを取ってきてくれたんだ。こんなに嬉しい事は他にない。僕は幸せ者だ。

「たこ焼き食べるか？」

「もちろんだとも。あゝん」

「自分で取れよ。ほら」

「ハフツハフツ、ふふっ、おいひ」

「そうか」

こんな滅多にない事は楽しまないとね。いっぱい遊んでいっぱい食べて、楽しい思い出を作ろう。

「綿アメだ！ 食べよう！」

「好きだな煉も。煙草は吸わないのか？」

「こんなところで吸うのはマナー違反だし、無粋だろう」

僕は確かによく煙草を吸うけど、禁煙すべき場所ではちゃんと禁煙するよ。

「それもそうだ」

「なら早く買おう。七夜も一緒に食べような」

「甘いのは苦手なんだがね」

――

はるかつかのグッズが沢山。やっぱりこういうイベントはいいわ。ネットだと偽物もあるし。

「あ、これ二つ頂戴」

「はいどうも」

鑑賞用、保存用。これは基本よね。使用用？ 嫌よ勿体無い。

「ん」

お金が無くなってきたわ。巫女って仕事がある分、バイトとかあんまり出来ないからお金が貯まらないのよね。普段アイドルグッズを大量購入してるのも理由だけ。

「そこのお嬢さん。これどうだい？ はるかつかのサイン入り生写真」

変な男が話しかけてきた。サイン入り生写真か。

「本物だとしたらどこで手に入れたの？」

「悪い事はしてないから安心しな。俺の同級生が芸能関係者でね。デビュー前の貴重なサインだぞ」

「ふーん、見せて」

「いいぜ」

この手のものは偽物が多いからね。私はループを取り出して観察を始める。写真自体は本物、よくイベントとかで配られるコピーじゃない。撮った日付も入ってる。

「サインはどうかしらね」

ちゃんと人の手によって書かれたもののような。筆跡も私の持つてるデビュー前後のはるかかのサインと合致するわ。

「最後に、同級生と貴方が写っている写真はあるかしら？」

「疑り深いな。見たとして芸能関係者と分かんたらうに。いや、こいつなら分かるか」

「いいから見せなさいよ」

「これで満足「買った！！」はやっ！？」

一目見れば分かるもの。写真にいる男の隣にいる存在が何かなんていい掘り出し物を見つけたわ。

「誰も信じてくれなかったからおじさん嬉しいぜ」

「そりゃ普通はそうよ。それに貴方があの独眼Pの同級生なんて誰も考えないもの」

「そうか？ これでもそこそこの有名人だと思うんだが」

「そうよ。というかおじさん見た事ないわよ」

独眼Pといえば芸能界でも指折りのビッグプロデューサー。その同級生がそこらへんでアイドルの生写真を売るなんて初耳よ。

「おじさん、メアド交換しましょう。芸能関係者の知り合いがいるとグッズ集めが楽だわ」

「がめついこった。お嬢さんの名前は？」

「博麗霊夢よ。おじさんは？」

「ザンギエフだ」

――

開始30分前、既にドーム内は熱気に包まれていた。

「博麗、入り口でもらったクジはなんなんだ？」

「さあ？　今回初の試みだそうよ」

初めてか。今まで前例のない事をすると考えてもいいのかな。

「七夜、疲れてるな」

「煉に振り回されてな」

うちもアイルーがはしゃいでたが、あつちはそれ以上だったみたいだ。煉のホクホク顔を見れば分かる。

「時間まで暇だな。ジュース買ってくる。みんなはどうする？」

「俺は麦茶で」

「なら俺はスポーツドリンクで」

「僕はコーラがいいな」

「私は持ってきてるからいいわ」

「僕もありますニャ」

「了解。七夜が麦茶でカンフーはスポーツドリンク、煉はコーラな。戻ってきたら金渡せよ」

「」「え」「」

「お約束な反応ありがとう」

「
♪」

あ、ロックは意外に乗ってる。楽しんでるならいいか。

「「「はるかっか————!!!!!!」」」

博麗とアイルーと煉はまさにファンの行動だ。特に博麗はお手製の法被なんて着てるよ。まあ俺もほどほどに楽しもうか。

——

パンフレットではコンサートももう終わり。生はテレビと違って臨場感が凄かった。はつきり言って面白かった。そんな中放送が流れた。

『それでは最後にお客様にも参加をしていただきます。入場時に貰ったクジはお持ちでしょうか？ そのクジの番号とこれからモニターに表示される数字が同じの方は舞台へ上がって下さい』

ほほう、当たれば間近ではるかっかが見れるのか。これはファンにはたまらないだろう。

「当たるかなニヤ？」

「当たると良いな」

モニターに8つの数字が表示される。どれどれ。

「「当たったー！！！」」

いきなり博麗と煉が叫ぶ。随分運が良いな。ってマジか。俺も当たってやがる。

「……アイルー」

「にやんでしょう？」

「行つてきな」

「ニヤ！？ でもそれはご主人の」

「いいんだよ。目の前に行きたそうにしてる奴がいるんだ。まあこれが格闘家、例えばザンギエフさん辺りだったら譲らんがな」

「ザンギエフさん？ あのおじさん格闘家だったの？」

「知っているのか博麗。意外だな」

「だってはるかっかのサイン入り生写真売ってたわよ」

「嘘だろ！？ ロシアの英雄だぞ！！ 今は世界修行に出てるって

話なのに!!」

「……メアドあるわよ」

「くれ!!」

どうして俺は博麗と行動を共にしなかったんだ。ああ勿体無い。しかしあのザンギエフさんがそんな事をしているなんて。

「さあアイルー、煉、舞台へ行くわよ」

「はいニャ!!」

「うん!!」

三人は仲良く舞台へ向かった。

「……………カンフー」

「どしたロック」

「俺にもザンギエフさんのメアドくれ」

「分かったよ、友よ」

――
舞台に行くと私以外の参加者は全員集まっていた。ってあら。

「スペランカー先生」

「やあ博麗君。君も来ていたんだね」

「スペランカー先生も。少し意外です」

「ハハハ、実は私だけじゃなくて教師一行で来たんだよ」

教師も暇ね。他のは知らない顔ね。ここまで見知った顔がこれだけの観客の中から集まるのが珍しいんだけど。

『それでは皆さんには4対4のチーム戦をしてもらい、勝った方はるかつかと楽屋で談話が出来ます。負けてもこの場で生写真です』

なっ、アイドルと楽屋で談話？ 負けても決して美味しくないわけではない。こんなイベントに参加出来るなんて。

「さあお前ら！ この箱からカラーボールを引きな――！」

「独眼P――！」

確かにはるかつかのプロデューサーは独眼Pだけど、まさか出てきてくれるなんて。もう幸せ。

「ニヤ、赤ですニヤ」

「僕も赤だね」

「私は青だ」

アイルーと煉は同じチーム、スペランカー先生は違うチームね。私は……

「赤よ」

どうやらアイルー達と同じだったみたいね。残りは誰になるのかしら。

「……………赤」

なんだかイケメンだけど寡黙な人が同じチームになったわね。

「……………若き博麗の巫女が仲間、か」

「！ あんた、何？」

「サイキカル」

サイキカル……知らないわ。でも実力はありそう。いいわ。何かは知らないけど今は協力しないとね。

『ではチームが決まったようなので試合を始めましょう。まず初戦は、こちらー！』

アイルーVS（・ω・）

「……可愛い」

「えっ」

この男、本当に何？

――

にゃんだかお饅頭みたいにゃ人（？）が相手だけど負けないニャ！！

『Ready Fight!!』

「行くよ」

「ニャ！？」

消えたニャ！？

「ていつ!!」

「フニヤ!?!」

後ろから殴られて飛ばされる。消えた時に後ろから来るのを想定するのは当然なのに油断したニヤ。

「そいつ!?!」

ゲシッ

「ニヤンツ!?!」

「てやあああああ!?!」

「フニヤアアアア!?!」

蹴り上げからの空中コンボ。この人(?!?) 凄い強さニヤ。でも僕だつて何もせずに負けるわけには行かないのニヤ!?!

「フツ!?!」

また高速移動からの攻撃。でも今度は受けるのニヤ。

ガンッ

「盾!?!」

「カウンター突きニヤ!?!」

「おっと」

逃げられたけどその瞬間に爆弾を作っておくのニヤ。小タル爆弾完成ニヤ。

「今度はこっちの番なのニヤ!!」

装備は速くて手数が多い双剣。一気に攻め立てるのニヤ。

「えいつ! ニヤア!!」

「こっちだよ」

あ、当たらない。こうなったら……

「喰らうのニヤア!!」

爆弾を投げつけて周りに砂埃を巻き上げる。これでお互いに場所は分からないはずニヤ。僕は太刀を取り出してブン回す。

「ニヤアアアアアア!!」

……手応えが全くないニヤ。

「悪いけど僕の勝ちだ。楔!!!!」

「フニヤアアア!!?」

――

『そこまで!!』

アイルーが空から降ってきたお饅頭さんにやられた。あのお饅頭さん、まだ本気じゃなかったな。

『お見事でした。それでは次の対戦はこちらです!!』

煉VSスペランカー

僕の出番か。スペランカーって人は七夜達の先生みただけど、負けないよ。それにしても小さな人だよな。

「よろしく願いますね」

「勝たせてもらうよ」

「私だって負けません」

『Ready Fight!!』

「ハッ!!」

僕がランプを投げつけ、それが爆発する。

テッテレテレテッテレッテッテ

『……えっ?』

会場が変な空気に包まれる。もしかして、これで終わっちゃった?

「スペランカー先生は体力が53万、防御力は5000。しかし一撃で負けるのよ!」

『え、ええ』

霊夢の発言に全員が絶句する。何その飾り能力。意味ないじゃん。

『え、とりあえず次の対戦にいきましょう。こちらです』

博麗霊夢VSペットショップ

――

私の相手は鳥なのね。鳥がアイドルのコンサートに来るってのもおかしい話だけど、鳥でも理解出来るなんてくらい素晴らしいという事ね。

「クエクエクエ」

「勝ち譲らないわよ」

「クエエ」

『Ready Fight!!』

「クエエ!!」

氷柱が落ちてきた!? 鳥のくせに氷なんて扱えるの!?

「クエ!」

しかも氷柱を落とすだけじゃなくて飛ばしてきた!! いいわ。この博麗の巫女に弾幕勝負を挑む愚かさを思い知らせてあげる!!

「封魔針!」

細く、連射能力の高い針で落ちてくる氷柱を避けながら飛んでくる氷柱を撃ち落とす。

「ホーミングアミュレット!!」

針から逃げる鳥に追尾性のあるアミュレットを撃つ。

「クエツ!？」

へえ、あれを撃ち落とせるんだ。だけど前ばかり見ていて大丈夫かしら？

――神霊『夢想封印 瞬』

「はい捕まえた」

「ギエ!？」

私は鳥を捕まえて針を突きつける。そこで敗北を理解したのか大人しくなった。

『そこまで!! 霊夢さんが一枚上手でしたね。それでは最終試合です』

サイキカルVS前原圭一

「へへっ、あんた強そうだな。だけど男として負けられないぜ!!」

「倒してみせよ……」

『この試合で圭一さんが勝った場合、それぞれのチームからランダムで選ばれた選手による勝者決定戦が行われます』

そういう方式なのね。でもその必要はなさそうね。あの男、サイキカルが戦闘態勢に入った瞬間に雰囲気が変わった。相手には悪いけど、多分この場にいる誰も勝てないわ。

『Ready Fight!!』

「そこ」

「なあ!？」

サイキカルが後ろを向いた瞬間に相手は何度も打撃を受けたように吹き飛んだ。あれは霊撃!？ しかも不可視なんて。

「ふふふふ」

影に溶けるようにサイキカルが消え、そして地面に無数の紫の光点が出てきた。ヤバい!!

「全員こつち来なさい!! 早く!!」

私の必死さが伝わったのか全員近くにきた。そして私が結界を張るのとほぼ同時に光点から紫の光の柱が上がった。舞台はボロボロ。相手は大丈夫なの？

「ぐう……」

無事みたいね。サイキカルつてのに文句言わないと。

「あんた!! ……いない?」

相手だけ倒して消えたっていうの? 一体何だったの?

「凄かったじゃねえか!! サイキカルはどこだ!! スカウトしねえと!!」

『独眼P、そんな事言ってる場合じゃないですよ!』

「っとそうだったな。勝者は赤チームだ!! 赤チームは晴香の楽屋にいけるぞ!!」

『ですから!!』

「でも本当に凄かったですね」

『晴香さんまで』

この時誰も気付かなかったけど、スペランカー先生もいなくなっていた。

――

ドームの外、そこに先ほどのサイキカルが歩いていた。

「面白い。若き博麗の巫女は才に溢れ、その友も可能性に満ち溢れている」

「そういう君もその才を覚醒させたね」

「先生……」

サイキカルの前にスペランカーが立っていた。

「あのペテン師がこんなに成長するとは思わなかったな」

「止めて下さい。恥ずかしい。今は霊媒師として売ってるんですから」

「しかし相変わらず可愛いもの好きなのは変わってないね」

「先生も好きですよ」

「ありがとう」

「では、後輩の育成を頑張ってください」

そしてサイキカルは影に溶けていった。スペランカーはそれを見届け空を見上げていた。

アイドルコンサート（闘）（後書き）

霊夢がアイドルオタクというのは新ジャンルとしてハヤル（＊、＊、＊）

ではキャラ紹介しましょう。

ザンギエフ

出演：ストリートファイター

スーパープロデューサー独眼Pの同級生。ロシアの英雄。世界修行中だが最近金欠で独眼Pに頼んで、貰ったアイドルの生写真などを売って生計を立てている。

藤堂晴香

出演：寄生ジョーカー

新ジャンル、寄生型アイドル。最近人気が出てきた。体内に寄生体がいるらしい。

独眼P

出演：アイドルマスター（？）、MUGENオリジナル

スーパープロデューサー。戦いの中でこそアイドルは成長するといふよく分からない考えを持つが、それでアイドルが成長しているから困る。自身ももちろん強い。

スペランカー

出演：スペランカーみんなの先生。一撃で死ぬ。高い能力のため数日徹夜しても大丈夫。

（・・ω・・）

出演：A A

シヨボン。可愛い。でも強い。作者はこのキャラとあるキャラのタッグが大好き。

ペットシヨップ

出演：シヨジヨの奇妙な冒険
氷を操るスタンドを持つ鳥。ある人のペット。

前原圭一

出演：ひぐらしのなく頃に
アイドル大好き学生。いじよ。

サイキカル

出演：KOF、MUGENオリジナル

霊媒師。遠距離戦においては敵無しともいえる高い能力を持つ。夢
弦高校のOBにしてスプレーカー先生の教え子。可愛いもの好き。

今、貴方はどうしてますか（前書き）

この作品の高校名、夢弦ですが。どうかで見た事あると思ったとあるストーリー動画と同じでしたorz

今、貴方はどうしてますか

授業前、みんなで購入で買った魚肉ソーセージを食いながら談話していた。

「コンサートの男凄かったな」

「寝ていたから分からん」

七夜はよく寝てたよな。もしあのチーム戦に幼女が出ていたら即座に起きて応援していたろうな。そして煉にトランプを投げつけられるのだろう。

「苦手なタイプだったな」

「ロックはいいだろ。俺はロックみたいな遠距離技があるわけでもないし、七夜みたいな高速移動があるわけでもないんだから」

「そうだよな」

モグモグ

「あ、カンフー、ロック、あのおじさんのメアドあげるからアイドルグッズ代出してよ」

「「もちろんだとも」」

「そんなに価値あるかなあ？」

分からんだろうな。博麗からすればアイドルのメアド、七夜からすれば幼女に匹敵する代物なんだけど。

「お前ら、授業だ」

ジヨンス先生が教室に入ってきた。早く魚肉ソーセージ食わないと。

「まず、バルバトス先生から絵葉書が届いてる。それを読んでやる」
バルバトス先生が絵葉書。意外な事をするな。

「『貴様らあ、こおの手紙を読んでいる時にはあ、俺はもう、この世にいないだろお』」

「「嘘だ!!」」

「『ツツコミご苦労お、ロックう、カンフー』」

「「読まれてた!?!」」

「いや、今のは俺のアドリブだ」

「「ジヨンスさん（先生）か！　しかし声真似上手すぎでしょ!?!」」

「娘にユーモアが足りないと言われて練習してみた」

充分ユーモア足りてるよ。ああ、ロックとのシンクロツツコミは疲れる。やっぱり俺はボケがいい。

「続けるぞ。『貴様らが知っている通りい、俺は某国の戦地にいる』」

――

「貴様の死に場所は、ここだあああああああああ！！！！」

「ぎいやあああああああ！？」

「ば、化け物だあああああ！！！」

「弱い……」

戦地の兵の質のなんと低さ。教師である俺に負けるとは。これなら生徒達の方が余程齒ごたえがある。

「この村も、既に廃村か」

人がいなければいる意味はない。人は人を呼び寄せ、そこから争いが生まれる。争いのない場所には、興味の欠片もない。

ガツガツ

「んん……咀嚼音？」

まあだ生き残りがいるのか。仕方がない。俺も、あくまで教師だ。生きている命があるのなら、せめて保護団体に届けてやろう。

「そこか」

「！」

そこには俺の髪色とよく似た髪の子がいた。歳は俺が担当している生徒程度か。

「……！」

「又ルいわあああああ……！」

「！？」

女が鎌を振ってきたが、俺の愛斧、ディアボリックフアングで砕いてくれたわ。

「女あ、俺を殺せると、思ったのかあ？」

「……………」

まるで獣の目だな。さっきまで食っていたのは犬か。人でないだけマシか。だが生きるためには何でもするな。放っておけば周りに被害を出すだろう。

「死ぬか？」

「……」

こいつは保護団体になんぞ連れて行けば全てを食らってから逃げる。死を与えるのも、また慈悲か。

「！！！！」

俺がディアボリックファングを振り上げた瞬間に女は飛びかかってきた。確実に殺すためか首を狙って腕を突き出してきた。

「見え見えなんだよう！！」

「！！！！？」

俺は女の腕を掴んで投げ飛ばした。女は家にぶち当たり倒れたが、その目は死んでおらず、逆に生きようとする光が強くなっていた。

「いいぞ！ 面白いぞ！！ もっとだ、その気持ちをもっと高ぶらせろ！！！！ 俺の渴きを、癒やしてみせろおおおお！！！！」

そこから一方的な蹂躪は続いた。だがそれでも女は絶望せず、生きようとしていた。いや、絶望にいるからこそ生きようとしているのだろう。

「女、俺の娘になれ」

「？」

「お前を育てるのは楽しそうだ。雑魚を払うより余程楽しめる。さあ、名を名乗れ。そしてついて来い!!」

「……………あたしは……………」

――

「という事で娘と戦地を駆け巡っているようだ」

という事で済ませないでもらいたい。あのバルバトス先生に娘とか。ギャグだよな。ギャグと言ってくれ。

「フハッハッハッハ!!! ここがオヤジの働く学校とやらか!!!」

どこからか聞こえる女性の声。そして教壇の前に現れる底の見えない黒い球体。嫌な予感しかない。

「っと。ようやく着いたぞ」

「……………どちら様でしょうか？」

「なにに？ あたしを知らないのかあ？ あたしはコマチ・ゲイテ

「イア。バルバトス・ゲーティアの義理の娘だよ」

「ですよ。あの球体はバルバトス先生が移動によく使ってたもんだから覚えてるよ。」

「これから授業だ。部外者は出て行ってもらおう」

「こんな状況でも冷静なジョンス先生が素敵です。でももっと冷静に、そして常識的に考えて下さい。部外者ってレベルじゃねえから！！」

「部外者あ？ 違うな。これを見てみる」

「……確かに。ならカンフーマンの隣に座れ」

「これはもしかしなくてもあれですね。」

「今日からクラスメートが増える。仲良くしろ」

「オヤジが教師だからって遠慮することはない。あたしの渴きを見てみるおおおお！！」

「また濃いのが増えたよ。助けて。このままでは俺とロックの影がどんどん薄くなっていく。」

今、貴方はどうしてますか（後書き）

バルバトスさんに娘が出来ました。シリアスっぽくしたかったのに、俺には無理だ。

ではキャラ紹介です。一人だけけど。

コマチ・ゲーティア

出場：東方project（？）、MUGENオリジナル
バルバトスが戦地で拾って鍛えた娘。技などはバルバトスと同じだが、圧倒的にバルバトスの方が上。胸がデカイ。

次回は都古ちゃんか、普通の京先輩メインにしようかな。どっちが
いいだろ。

普通（前書き）

普通なある日常を取り上げてみました。

普通

これは普通な男の話である。

ジリジリジリジリ

「……うつせえ」

普通の目覚ましで普通に起きたこの男こそ、普通な京先輩である。
ちなみに三年生なのに他の三年生にも普通な京先輩と呼ばれている。
普通に留年しているのが理由だ。

「アニキ、さつさと起きろ」

「起きてる」

「なら着替えて飯食え」

彼女は普通な京先輩の妹である京子。普通な京先輩の家族は普通な核家族。父親、母親、普通な京先輩、京子という家族構成であるが、両親は普通に海外旅行でいない。いい加減普通が普通にゲシユタルト崩壊してきた。だが普通に自重しない！！

「アニキ、今年は留年するなよ。留年してるの兄貴と不破さんだけなんだから」

「仕方ねえだろ。俺もあいつも裏が忙しいんだ」

「だからって学業を疎かにしていいと思ってるの？」

「お前は街の平和と俺の卒業。どっちが大事だと思ってんだ」

「卒業に決まってるでしょ！！ それでも裏の仕事優先するなら中退しちゃう！！」

「中退したら就職に支障でんだろ！！」

はつきり言って留年し過ぎるのも普通に就職に支障が出るはずであるが、普通の京先輩は普通にそんな事考えにないようだ。

ブルルル

「あいよ、京だ」

『京君、私だ』

「詐欺か？」

『……………塩くれて「ベガさん何か用か？」今晚仕事を頼みたい』

ケータイに電話を掛けてきたのは裏の仕事を回してくる塩の第一人者、ベガである。

「アニキ、また仕事？」

「夜だから気にするな。で、内容は？」

『簡単だ。エルクウ狩り。君なら容易いだろう？』

「はいよ」

エルクウとは個体名ではなく種族名である。人の姿と黒い鬼の姿の二つを併せ持つ種族、宇宙人とも言われているが、元々は狩猟をして生活をしていた。だがそれを快樂とし、人を狩るようになってしまった。

『今回の報酬は200でどうかね？』

「多いな。どうしたんだ？」

『最近新聞やニュースで見なかったかね？ 毎夜の如く人が失踪しているのを』

「ニュース見ねえし。だがその犯人がエルクウってのは分かった」

『うむ。充分気を付けてくれ。後でメールで目標の写真を送ろう』

ピッ

京先輩は普通に学校へ行く準備を始める。だがエルクウ狩りというとてもない仕事を普通に受けて普通に学校に行くなんて、流石京先輩である。

――
ベガさんもエルクウ狩りなんて他の奴に任せりやいいのによ。

「京、何やら疲れた顔をしているな」

「刃か。京子に説教食らって、更にエルクウ狩りの依頼が来てよ」

「それは難儀であるな。拙も手伝ってやろうか？」

「お前も卒業ヤバいだろ。気にすんな」

こいつも俺と同じようにたまに裏仕事をしているせいで出席日数がヤバイ。だがこいつって忍者（自称）だから裏仕事の本職なんじゃないかなろうか。

「そろそろ授業だな。寝るわ」

「たまの授業くらいちゃんと受けた方が良くぞ」

授業なんてのはちゃんと受けなくてもテストでいい点を取ればいい常識だな。

「何を普通に寝とか！ 阿呆があー！！」

「いてえー！！」

一時間目が保健体育なのを忘れてた。範馬先生の一撃をキツすぎる。

――

深夜。目標の写真を元にエルクウを探す。どうやら昼間は会社員らしいな。しかしせめてどんな会社に勤めているかくらい情報くれよ。

「いやあああああああああああ！！！」

女の叫び声。エルクウか？ まあ違ったとしても助けるぐらいはしてやるか。

「そこの変態。何をしている」

「オオオオオオオオ」

「つと、マジでエルクウだったか。そこの姉ちゃん逃げな。これの相手は「ガアアアアア」！」「うおつと」

相変わらず好戦的な種族だ。ま、そうじゃないと面白くない。

「行くぜ」

「アオオオオオオオ！！」

エルクウは自慢の爪で俺を引き裂こうとしてくる。俺はそれを受け止めてやる。

「！？」

「どうした？ 自分の爪が効かないのがそんなに怖いかな？」

「オオオオオオオオ！！！！」

「そう力ツカすんなよ。だが熱いのは嫌いじゃねえ。さあ、喰らいやがれえええ！！！！」

腕を振ると巨大な炎が巻き起こり、エルクウを飲み込んだ。そこからエルクウは飛び出してきたが、その身体は大半が炭のようになっている。

「オオオ……ハアアア……」

「みつともねえな。天下の狩猟民族エルクウが学生一人に瀕死かな？」

「グウウウ……」

「終わりに……まだいたか」

建物の影から出るわ出るわ。そっぴやエルクウは群れでの狩りをするんだっただか？

「何者？ そのエルクウがいくら若くとも人間の手に負える代物で

はない」

「喋れるのもいたのか」

「エルクウの雌で鬼となるものは少ない。だからと言って弱くわな
いわよ」

女は爪を俺に見せつける。確かにあの爪はエルクウのそれだ。

「危険な貴方はここで死んでもらいます」

「そうかい」

俺は片腕を高く掲げ、拳を握りしめた。

「あめえな」

ドオオオオオオン

たったそれだけで大量にいたエルクウが爆発をした。あの女も含め
数体生き残ったようだが、殆どは肉片となり、その肉片も燃え尽き
た。

「ハアハア！！ 何よ、本当に何なのよ！！」

「別に。ただ普通に攻撃した。それだけだ」

俺にとってはこれが普通。異常な力だろう。だが周りはそれを受け
止め、普通としていてくれた。最近はただの渾名みたいになっ
てるがな。

「夢よ。そうよ、こんなの夢」

「現実見た方がいいぜ。そうだな。最後に名前ぐらい聞いといてやるうか？」

「ふざけるなあ……！」

ヒステリックを起こした女ってのはこええな。

――

ピッポッパ プルルル ガチャ

『私だ』

「報酬の値上げを要求する」

『京君か。どういう事が理由を言ってくれ』

「エルクウが大量に出てきてな。大体3〜40くらいだったか。一人女もいたな」

『なんと……おそらく女はエルクウ一族を統括していた一人、千鶴だろう』

統括していた？　ならこんな事させたら駄目だろう。

『私の予測だが、一族でその街を支配しようとしていたのかもしれない。君が始末した数もその街にいるエルクウの総数と合う』

「やって良かったのか？」

『もちろんだ。感謝する』

「なら謝礼は」

『倍だ』

「何！？　待て！！　それは」

ガチャ　プー　プー

「切りやがった……」

こんだけやって400万ドルかよ。割に合わねえ。

普通（後書き）

とても普通ですね。次回は都古ちゃん回になりそうです。
ではキャラ紹介をしましょうか。

京子

出演：MUGENオリジナル

普通な京先輩の妹。家の事は大抵彼女がこなしている。留年している兄を恥と思っている。二年生なので今年兄が留年したら来年には兄と同級生になってしまう。

ベガ

出演：ストリートファイター

裏の仕事を様々な人に提供し、解決してもらう塩の人。やってくれる人がいない時には自分がやる事も少なくない。

エルクウ

出演：痕

人を殺す鬼。宇宙人とも。男は惨殺、女は犯してから殺す。人として社会に紛れている場合もあるが、そんなエルクウは余程の理由でもない限り殺人はしない。

千鶴

出演：痕

エルクウ一族を統括していた女。徐々に人を殺していき、街をエルクウのためのものにしようとしていたが、京先輩によって殺される。

都古ちゃんと授業参観（前書き）

今回の都古ちゃんは変態臭はありません。

都古ちゃんと授業参観

都古side

今日は学校の授業参観の日。みんな落ち着きがあんまりないなんて子供だよね。

「都古ちゃんのおうちはお母さんが来るの？」

この子は私の同級生の橙ちゃんちえん。ネコミミと尻尾がフサフサして気持ち良い子。

「そうだよ。橙ちゃんは？ やっぱり藍さん？」

「えへへ、今日は紫様ゆかりが来るんだ」

あのボーダー商事社長が来るんだ。仕事が忙しいだろうに。そこはやっぱり式の式である橙ちゃんが気になるのかな。

「俺は兄さんが来るそうだ」

彼はケンシロウ君。小学生とは思えない体格に、なかなか複雑な家庭事情を持った人。確かお兄さんは夢弦高校に入学したんだっけ？

「お兄さんも学生でしょ。学校はどうするの？」

「許可が出たらしい」

「良かったね」

いつもはあんまり見ないケンシロウ君の嬉しそうな顔。でも交流がない人が見れば気づかない程度の些細な変化だ。

「みんないいな。うちは親とか兄弟がいらないから牧師さんが来てくれるみたいけど」

「でも牧師さんはブリちゃんの家族でしょ」

「ちゃんはやめてよ」

この子はブリジット。男の娘だ。ケンシロウ君以上に複雑な家庭事情があるみたいで、今はとある牧師さん家族と暮らしているらしい。

くぱあ

突然変な空間が口を開き、そこから紫のゴスロリ服を着た金髪の女性が出てきた。

「橙、来たわよ」

「紫様！ 嬉しいけどちょっと早いよ」

「いいじゃない」

本物の八雲紫だ。ボーダー商事なんて大規模会社の社長だから今までテレビでしか見た事なかったけど綺麗な人だな。

「みんな、うちの橙がお世話になってるわね」

「そんな事ないですよ」

「貴女は、霊姫の娘さんじゃない。大きくなったわね。胸以外」

「グサアツ!!」

痛いところ突いてくる。でもまだ成長期だもん。すぐにお母さんみたいなバインバインになってロックお兄ちゃんと………むふふ。

「ってお母さんと知り合いなんですか!？」

「まあね。赤ちゃんだった頃の貴女も知ってるわよ」

「すみません遅れました!!」

扉を開けて飛び込んできたのはうちのお母さん、博霊霊姫だった。

「お母さん、まだだよ」

「えっ? あらあら、間違えちゃったわ。時間だと思ってメイクを簡単にやってきちゃった」

メイクなんていいんだよ。問題はその横乳を異様に主張している巫女服。巫女の仕事を切り上げて来たね。男に襲われるよ。

「霊姫は相変わらず天然ね」

「紫! 久しぶりじゃない!! テレビでよく見るわよ」

「久しぶりね。貴女はまだ巫女を続けているのかしら?」

「えっへん」

別に誉められてないから胸を張らないで。男子の大半が前屈みにな
ってるから。

「おやおや、私は三番手ですか」

「牧師さん!!」

「ブリジット、今日は貴方の授業をしつかり見学させてもらいます
よ」

「はい!!」

この人がブリちゃんの家族の牧師さん。名前はゲーニッツさんだっ
け？ 娘さんがロックお兄ちゃんの学校の先生をやってた気がする。

「兄さんはまだか」

「気が早いよ、ケンシロウ君」

「そうだな。授業までまだ30分もある」

授業参観は5時間目。お昼休みを挟むから時間がある。この人達は
早く来すぎなのだ。

ブォンブォン

「車の音？ 随分大きかったけど」

「外に車が止まってるね」

「本当だ」

校門に赤いフェラーリが止まっていた。そこからなんか大きな人が降りてきた。

「兄さん」

「あの人がそうなんだ」

「筋肉モリモリなのはケンシロウにそっくりですけどね」

「筋肉は鍛えればどうとでもなるよ」

でもブリちゃんは永遠にそのままじゃないと大きなお友達が号泣するけど。

「ケンシロウ、参ったぞ」

「兄さん、さっきのは？」

「友人のエドワード・エルリックに送ってもらったのだ。ケンシロウの大事な授業参観故にな」

「そこまでして、嬉しいよ」

「いい話ね」

イイハナシカナー？

「ハッハッハ！ゼノン、パパが来たよ！！　　っていないではないか」

びつくりした。誰かと思ったらルガル社長だ。そういえばうちのクラスのゼノンちゃんのお父さんだったけな。

「お久しぶり、ルガル君。元気そうだなによりだわ」

「ゆ、紫さん！？　何故！？」

「橙の授業参観よ」

この二人、どういう関係なのかな？　社長同士にしてはフランクすぎる。

「お母さん、二人の事知ってる？」

「ええ、二人は同級生なのよ。学園のマドンナだった紫に陸上部エースだったルガル君が憧れてたの。結局告白する前に紫が転校しちゃったんだけど」

「君は何故それを！！　　って博霊！？」

「久しぶり。そう嫌そうな顔しないでよ」

「君は昔から変わらんな」

「何が？」

「そんな天然に人の恥部を抉る所だよ!!」

天然なお母さんはどうしようもないよ。お父さんも若干天然だから釣り合ってるけど娘の私が大変だよ。

「あら？ お父様いらしてましたの？」

「あ、ああゼノン。今来たのだよ」

彼女がルガル社長の娘さんのゼノン・バーンシュタインちゃん。とてもお嬢様な性格をしている。

「もうすぐ授業だね」

いろいろ騒がしかったから気づかなかったけど、もう10分もない。他の保護者も集まってきてるし、準備してよ。

――

なんだか先生遅いなあ。いつもならさっさと来てテキトーに終わらせるのに。

「こんにちわ。さあ授業を始めましょう」

『……………』

「あら皆さん、どうしました？」

やってきた担任のベール・ゼファー先生を見てみんな固まっていた。だってバリバリに化粧して、服だって普段着ないようなスーツだし。少女みたいな見た目でそれはどうなの？

「ポンコツ先生、気合い入れすぎ」

「誰がポンコツよ！！」

「君がだ。ベール・ゼファー君」

「し、シン校長！？」

いつの間にか教室内にいたのはうちの小学校の校長、シン校長がいた。

「この貯まった書類は何かな？」

シン校長が指を鳴らすと他の先生が沢山の書類を台車に乗せてきた。これは酷い。

「えっと、でもほら、今日は授業参観ですし」

「……………だが断る！！ 南斗獄屠拳！！」

「べぶっ!？」

ぼっこーん

「それでは保護者の皆さん、代わりの先生がきますので。サラバダ
ー!!!」

ベール……ポンコツ先生は窓から蹴り落とされ、シン校長もそこから飛び降りていった。あれって自殺技だけど大丈夫かな？ それに代わりの先生って。

「失礼します。ってベール・ゼファー先生は？」

「ロックお兄ちゃん!? 代わりの先生ってもしかして」

「代わりの先生!? 俺は職業体験に来たんだが!？」

「それも体験だ。いいではないか若者」

「良くないです。ってルガルさん!? 霊姫さん、は都古ちゃんのお母さんだから当然か。それにしても凄い保護者だな」

それは言えてる。間違いなくいろんな分野のトップクラスが集まってるもん。

「そういえば若者。クリザリッド君から聞いたのだが、君はギース社長の御子息だそうではないか。ギース社長にはお世話になっているよ」

「貴方がそうなの。うちのボーダー商事もお世話になってるわ」

「今度親父に言っておきます。それより授業はどうするか。とりあえず教科は何だったんだ？」

「道德ですわ」

「ありがとう。道德か。また難しいな。道德って言うルールなんだよな。みんなはちゃんと守れるだろうし」

ロックお兄ちゃんはしばらく考えた後に何かを決めたように話を始めた。

「みんなには家族や友達っていう大切な人がいるよな。俺はみんなにその人を大切にしてもらいたい。当たり前の事だけど、これが出るのは人は立派な人だと思う。人ってのは勝手な生き物だ。自分を中心に考える。だからって忘れないでほしいのは自分は一人で生きているんじゃない。周りに支えられてるって事だ。まあこんなセリフは定番だけどな。まあ定番になるくらい大切なんだ」

少し息を吐いた後、ロックお兄ちゃんは話を続けた。

「でも俺が家族や友達って言ったのは、人はそこまで出来てないからだ。人がどれだけ頑張っても世界どこか街中の人だって救うのだって出来ない。だから自分と大切な人は守ってほしい。これは他の人を守らなくていいって理由じゃない。何かしらの力を手に入れ、余裕が出来た時に他人を救えばいいと思う。まあ最終的に言いたいのは」

『……………』

言いたいのは何なのか。みんながそれを黙って待った。

「道德なんて人に押しつけられるもんじゃないから今の恥ずかしい話は忘れる」

『え、ええ』

なんだかいい感じの話だと思ったなら最終的にオチが付いたよ。まあロックお兄ちゃんだからいいけどね。

「もう話も疲れたな」

元々職業体験なんだからこんな事する必要ないから覚悟してなかったよね。なら疲れてもしようがない。

ガラガラ

「いや、すまんのお。いきなり授業があると言われて遅れてしまったわい」

あれ？ どうしてジョセフ先生が来るの？

「んん、君は誰かな？」

「職業体験に来たロックという者ですけど」

「職業体験に来た子が何故授業を？」

「……………勘違い？」

私達も完全に勘違いしてた。でも冷静に考えたらそんなのあるはずがない。これも全部ポンコツ先生のせいしよう。

都古ちゃんと授業参観（後書き）

新キャラいっぱい。でもそろそろカンフーマン主体の話を作らないと。でも別の話も書きたい。
ではキャラ紹介をしましょう。

橙

出演：東方project

都古の同級生。ネコミミと尻尾を持つ少女。純粹で騙されやすい。
八雲紫の式の式。

ケンシロウ

出演：北斗の拳

都古の同級生の少年（？）。小学四年生（？）。一応クラス委員長。
ある物を使うと橙と合体して……

ブリジット

出演：ギルティギア

都古の同級生。とても可愛い男の娘。ヨーヨーを持ち歩いている。
とある事情があり、牧師であるゲーニッツにお世話になっている。

ゼノン・バーンシュタイン

出演：アイ・舞・ミー

都古の同級生。ルガールの娘。とてもお嬢様。父と同じでいろいろな技を使える。今回の事でロックに興味を持ったようだ。

八雲紫

出演：東方project

ボーダー商事の社長。境界を操る能力で事業を拡大している。ルガ

ールとは同級生。実は紫もそこそこ気があつたらしい。

ゲーニッツ

出演：K O F

ブリジットを預かっている牧師。Windの父。ちなみにゲーニッツというのは苗字らしく、Windの本名はジェミニ・W・ゲーニッツ。Windはミドルネームである。

エドワード・エルリック

出演：鋼の錬金術師

ラオウの友人。特別に免許を取って個人でニーサンタクシーというのをやっているらしい。タクシーは赤いフェラーリ。理由は目立つから。

ベール・ゼファー

出演：ナイトウィザード

魔王で先生。それ以上にポンコツ。なので生徒からはポンコツ先生と呼ばれる。

シン

出演：北斗の拳

校長先生。（学）カこそが正義、とかは別に考えていない。

ジョセフ・ジョースター

出演：ジョジョの奇妙な冒険

おじいちゃん先生。生徒からも人気が高い。

カンフー田舎へ行く(前書き)

勝手に手が動いてこうなった。後悔も反省もしていない。

カンフー田舎へ行く

ゴールデンウィーク。俺は父方の爺ちゃんと婆ちゃんのうちに行くため、電車に乗っていた。

『次は平凡、平凡。お出口は右側です』

次みたいだな。しかし相変わらずの駅名だ。普通よりかはいいかな。普通だったなら京先輩に取られてるし。

『平凡、平凡。お忘れ物のないようご注意ください』

電車を降りて駅を出る。以前来た時と変わらないボロっちい駅前商店街。変わってたらそれはそれで嫌だ。

「おばちゃん、コロッケ一つ」

「30円ね」

「はい」

「ありがとうございます」

商店街の揚げ物屋で安いコロッケを買って食いながら歩く。しばらくすると見えてきたのはこの田舎で一番の高校。やっぱり立派だ。

「田舎にしちゃデカい学校じゃねえか」

「ああ……………ああ!？ コマチ!？」

「よう」

なんている！？ 転移してきた！？ それとも尾行！？ 後者だったら気づかなかった自分が情けない。

「帰れよ」

「か弱い娘にい、一人で帰れとお？」

「かあよわあいい？ 笑わせて「ジェノサイド」コマチ様はか弱い少女です。はい」

「よろしい」

何もよろしくないよ。帰れよ。

「それで、こおんな田舎に何をしに来たんだあ？」

「爺ちゃんと婆ちゃんに会いに来たの」

「強いのか？」

「メチャクチャでハチャメチャだ」

「なら会ってやろう」

「なんでだよ！！」

「戦いが好きだからに決まってるだろう？」

もうやだこの女。やっぱりバルバトス先生に子育ての才能はなかったんだ。

――

着いてしまった。この暴力娘を連れて帰ってきてしまった。

「平屋か」

「悪いかよ」

「悪いと誰が言ったあ？」

「なんじゃ。誰か来とるのか？」

俺達の話し声が聞こえたのか爺ちゃんがやってきた。

「爺ちゃん、久しぶり」

「カンフー、やっと来おったか。んん？ そっちの子は、まさか彼女か！？」

「ちげえから。しかし爺ちゃんは相変わらず細いな。ちゃんと食ってる？」

「待てい、カンフー。あれが細いい？ あれは細いとは言わずに『棒』と言っだろうがぁー！」

いや、まあナーマン爺ちゃんは棒みたいに細いけど、棒ってはっきり言わなくてもいいだろ。爺ちゃん気にしてんだぞ。

「最近の若者は手厳しいの」

「どうしたんじゃ爺さん」

「おっ、婆ちゃん。久しぶり」

「カンフーじゃないかい！！ そっちは彼女さんかい？」

「違っつて。爺ちゃんと同じ事言わないでよ」

こっちがイングリッド婆ちゃん。昔はコードホルダーって力でバリバリ言わせてたらしい。

「しかし女の子を連れてくるとは間が悪い。お前が来ると聞いてお見合いを用意したのに」

「どっついう事だよ婆ちゃん！ー」

「ほほう、カンフーのお見合い。面白そうだ」

「面白くねえから!!」

コマチの野郎、いや女郎。人の苦勞も知らずに勝手な事を言いやがって。

「まあ会ってみなさい。いい子じゃよ。スレンダーで美人さんじゃ」

「爺ちゃんみたいなスレンダーはやだよ」

「わしも嫌じゃ。イングリッドももうちつとボンキュッボンじゃった」

「目の前に本人がいるのによう言えるの、爺さん」

あ、婆ちゃんがキラキラし出した。これは危険だ。昔何度かみた事あるけど家がぶっ飛んだ記憶がある。

「弾ける!!」

「フッ！ ハッ！ ハッ！ ハ！」

婆ちゃんの攻撃を爺ちゃんは防ぎきっていた。流石自称ながらブロッキングのナナーマンと言っただけある。

「強いな。お前の祖父母とは思えん」

「俺だつてあれだけの力があればと思うさ」

両親が言うには俺にも才能はあるらしい。でも覚醒出来るかは分からないとか。

「爺さんもしぶといの」

「まだまだ死ねんわ。カンフー、居間に見合い相手がおるから行きなさい」

「了解」

俺が望まないとしても相手は望んで会いに来ているのかもしれない。だったらせめて会っぐらいはしないと失礼だ。

「お前の見合い相手がどんなのかあたしも確認してやろう」

お前は来るな。

――

そつえば服が正装じゃないが、しょうがないよな。

「失礼します」

「はい」

居間には和服を着た美人さんと、強面のおっさんがいた。

「初めまして。カンフーマンです」

「お市と申します」

「我はあ、市の兄の信長である」

「お兄さんですか」

声！ 声がバルバトス先生と同じだよ！！ コマチも流石に目を丸くしてるよ！！

「して、カンフーマン。そこな娘は何者だ？」

「刀抜きながら質問はやめて下さい！！ ただの学友です！！」

「ならばよい」

おっかない人だ。市さんは大人しいのに信長さんは逆だな。

「あの、カンフーマンさん。少しお話でもしませんか？」

「ああ、お見合いですもんね。ほらコマチ、出て行け」

「仕方ない」

「兄様も、少し席を外して頂けませんか？」

「良かるう」

二人だけになった。こうなると緊張するけど、まあお見合いするだけで付き合うわけじゃない。気負う必要はない。

――

「……が……して……」

「ふふ………ですね」

部屋の中から二人が話しているのが聞こえてくる。内容はよく聞けないが、話は弾んでいるようだ。

「ふうむ、悪くはないようだな」

「……ああ」

オヤジと似た声のおっさんは嬉しそうだが、あたしはそういい気がしない。決して長い付き合いではないが、カンフーには隣の席になつてから世話になつていた。普段そんな事はこつぱずかしくて言えないが、カンフーの事は………嫌いではない。

悪いのはあのおっさんだ。

――

コマチの奴何をしてんだ。廊下ごと信長さん吹き飛ばしたりしてさ。結局市さんとともに話を出来た時間は短かった。

「カンフーマンさん、今日は楽しかったです。あんなにお話したのは初めてです」

あれだけしか話してないのに？ 普段それだけ話さないという事なんだろうか。

「それで……よろしければ、連絡先を交換致しませんか？」

「いいですよ。メルアドでいいですか？」

「あ……携帯電話は持っていませんので。お家のお電話でも。それと……厚かましいようですが、ご住所も」

「分かりました」

市さんと連絡先を交換しているとなんだか不穏な視線を感じる。後ろを見るとコマチがこっちをジト目で見ていた。

「デレデレしやがって。いいご身分だなあ？ あゝ？」

「デレデレしてねえよ」

なんか突っかかってくるようになったな。それもいつもより過激に。

「カンフーマンさん、あの人はあまりお友達としては」

「あゝっ！？」

「ひっ！？」

「おいこら！ 市さんが怖がってるだろ！！」

「ったく、うるせえんだよ」

やっぱりおかしい。そりゃ乱暴の奴だがここまでの奴ではなかったんだが、まあ今は早く二人を離そう。

「じゃあ市さん、俺らは帰りますんで。コマチ、帰るぞ」

「……………」

帰る途中もコマチは不機嫌なままだった。次の日には普通に帰ったが、なんだったのか。

カンフー田舎へ行く（後書き）

どうしてこうなった？ 次はとにかくギャグに走るかな。
ではキャラ紹介をしましょう。

ナナーマン

出演：MUGENオリジナル

カンフーマンの父方の祖父に当たる棒人間。凄まじいブロッキング能力を持つ。年老いても衰える事はない。どうやって子供を作ったかは謎。

イングリッド（コードホルダー）

出演：CF、MUGENオリジナル

カンフーマンの父方の祖母。見た目は少女。でもお婆ちゃん。たまにコードホルダーという神状態になる。

お市

出演：戦国BASARA

カンフーマンのお見合い相手。普段は暗く大人しいが、カンフーマンと話している時はそこそこ明るい。

織田信長

出演：戦国BASARA

CV若本。お市の兄。乱暴ではあるが、妹には優しく気のいい兄。そして結構気遣いが出来る。

武道会（前書き）

今回はギャグと言ったな。あれは嘘になった。

武道会

明日は学校で武道会というイベントがある。別に大会とかではなく、二年生による一年生の少し遅い歓迎会みたいなものだ。

「去年は凄かったよな」

「本気の勇次郎先生VS普通の京先輩&不破刃先輩のあれか。あれには衝撃を受けたな」

「そんな事より幼女を観察したい」

「私はアイドルがいいわ」

「幼女……」

「アイドル……」

「「アイドル幼女!! これは流行る(*´ω´*)」」

「「アイドル幼女は流行るかもしれないが、その顔文字は流行らないし流行らせない」」

WボケとWツツコミ。別に戦いなんて披露しなくともこれで十分な気がする。でもこれは一年生以外にも外部の人に見せるものでもある。強さを見せれば会社採用へのアドバンテージにもなるとか。

「時間も時間だ。行くか」

「腕が鳴るな」

「眠い」

「ほどほどにね。痛いのは嫌よ」

――

カンフー達は舞台となる校庭に着くと二年生の席に座った。校庭には試合用のステージが用意されていた。

「今回ってどんな感じなんだ？」

「知らないのか、カンフー。今回は基本的にタッグだ。だけど前回、勇次郎先生が一人で戦ったような状況もあるらしい」

カンフーとロックは形式について話しており、霊夢はアイドル写真集を見ており、七夜は……

「zzzz」

寝ていた。そんな七夜の後ろに人が立った。

「トラペゾン」

ガンッ

「~~~~っ!? 誰だ!! 快眠を邪魔するのは!!」

「私ですが」

「……………なんだ、あんたか」

「担任をあんた呼ばわりするな!!」

ガンッ

「いった~~~~っ!!」

七夜を起こしたのはナイア先生。方法は棺桶をぶつけたのだ。これは痛い。

「もうすぐ始闘式です。起きなさい」

「面倒な」

「犯しますよ」

「……………チッ」

あの思い出は七夜にとってはやっぱりトラウマらしい。そして始闘式とは大会やイベント前に行われるMUGEN恒例の行事である。

「ナイア先生、今年は誰が？」

「オム君先生と外部ゲストです。始闘式に限った事ではなく、今年は外部ゲストが沢山出場するそうですよ」

これは学校行事なので外部ゲストはあくまで観戦者が基本なのだが、今年は違うようだ。

「おつ、始まるみたいだぜ」

ステージにオム君が上がる。しかしながら相手は出てこない。

「あの、僕の相手は？」

『もうすぐ来ます』

バババババツ

「ヘリコプター？」

「とうっ！ シャキン！！」

「パッチェさん！？ 何してるんですか！？」

「お呼ばれたから」

ヘリコプターから飛び降りてきてポーズを決めたのはCパチュリィ。

「私が呼んだのだ！ 彼女と戦えて嬉しいだろう？」

「何してるんですかキラ校長！！　それに僕とパツチエさんは恋人同士なんかじゃありません！！」

「違うのか？　校内新聞に載ってたぞ」

「あれは七夜君が勝手にやった事です！！」

「悪いね」

「悪いなんて思っていないよね！？」

哀れオム君。しかし世の中勘違いのまま進むのである。そして七夜に反省と自重の二文字はいらぬ。

「おゝい、早く始めてくれ」

「あ、ごめんねパツチエさん。すぐに……凄く震えてるよ！！　どうしたの！？」

「そ、そんなのはいいから」

パツチエさんは最初ブルブルと震えていたが、それが縦に横に、更には回転までし始めた。

「レミ姉さん待って！！　死にたくない！！　死にたくないあああああああああ！！！！！！！！！！」

デデン

「パッチェさああああああん!!!!!!?」

K O

「KOじゃないから!!」

突如パッチェは空へ飛んでいき大爆発を起こした。その様子はまるでフリーザ様に殺されたクリリンのようだった。

『ええと、よく分かりませんが始闘式を終わります』

「終わったらダメEEEEEE!!!!!!」

オム君の虚しい叫びが校庭に響き渡った。

――

ここからはランダムで選ばれた二年生が試合をする事になる。

『では次は山本無頼君&巫浄翡翠さん。そしてクリザリッドさん&紅美鈴さんです』

「いくら美鈴さんが寮長だからって武道会に出演するなんて」

「強敵です」

「そう強張る事もない。俺も美鈴も手加減はしよう」

「それにこれはお祭りなんだから楽しまないとね」

緊張している無頼と翡翠の緊張を解すかのようにクリザリッドと美鈴は話しかけるが、実力ある有名タッグの二人相手では仕方ないだろう。

『準備はよろしいですか？』

「「はい」」

「いつでも」

「さあやりますよ」

『では、試合開始！！』

「ハアッ！！」

「そこです」

試合開始の合図と同時に無頼は二人に突撃し殴りかかろうとし、翡翠はそれを援護するように物を投げつけた。

「テュホンレイジ！！」

「っ！！」

しかしそれもクリザリッドの蹴り上げによって起こった竜巻に止められる。

「いけえ！！」

攻撃を止められた二人に美鈴は虹色の弾幕を撃ち放ち、動きを完全に固めた。

「フッ」

「ぐっ！！」

クリザリッドは無頼を脚で器用に後ろに投げる。これで無頼と翡翠は分断された。だがこれは無頼達にもチャンスである。上手く挟み打ち決めればクリザリッド達を一気に沈める事も可能だからだ。

「行きます！！」

「うおおおおおお！！」

それを理解している二人は攻撃を繰り出す。翡翠はフォークを使った連続突きを、無頼はそのボクシングで鍛えた強力な一撃を放つ。

「気符『星脈弾』！！」

「見せてやる！ 我が力を！！」

それに対して美鈴は気の巨大な砲弾で翡翠を吹き飛ばし、クリザリッドは炎を巻き上げ、両手に溜めたそれを無頼にぶつけた。

『そこまでです！！』

――

流石にクリザリッドさんと美鈴さんは強かったな。無頼と巫浄さんのタッグも強いんだけど、年季の違いだな。

「カンフー、お前選ばれたらどうする？」

「タッグ相手がいるなら喜んでやるんだけどな。ロック、やるか？」

「いいな」

だけど本音を言えば七夜と組んだ方がやりやすいんだろうな。ガキの頃からの付き合いで互いの戦いの癖もよく分かってるし。

『はい？ どうしました？ はい、はい……本当にですか！？』

なんだか本部の方が騒がしい。トラブルという雰囲気ではないだろ

う。

『突然ですが、特別試合が組まれました』

特別試合……何故か汗が出てくる。

「どうしてだろうな。身体が震えてきた」

「……！！」（ガタッ）

「変な空気がするわ」

ロックも七夜も博麗も不穏な雰囲気を感じたらしい。特に七夜なんか寝てたのに起きたぞ。

『世界四大会社の社長の要望で我が校の生徒と社長方の対決が決定しました！』

世界四大会社だと！？ ルガル運送のルガル社長にボーダー商事の八雲紫社長、ロックの実家であるハワードコネクションのギース社長とネスツ医療のイグニス社長か！？

『では社長方、選手を指定して下さい！！』

「では私はカンフー君で頼もう」

「私は霊夢かしら。霊姫の跡を継いだ巫女の力を見たいわ」

「当然ロックだ。さあわしに貴様の成長を見せてみる」

「七夜とやら」

「待て！！ 俺はイグニス社長と交流がないぞ！！」

「クリザリッドの推薦だ」

「クリザリッドさん！！」

「すまないな、七夜君。校長の頼みで誰がいいかと聞かれた時に君が思い浮かんでな」

校長？ そういえば思い出した。ネスツ医療は大学も経営してて、クリザリッドさんはその卒業生でルガール運送に入った超エリートだった。

『では4人はステージに上がって下さい！！』

「「「嫌だ（よ）！！」「」「」

『出ないと単位はないそうです』

「「「この学校最低だ！！」「」「」

もうやるしかない。怪我しないように手加減してくれるよな。

――

ステージに上がるカンフー達。その前に立ちふさがるは世界トップクラスの社長達。

『試合は乱闘形式です』

「乱闘って。誰でもいいから倒して立っていたチームが勝ちなのか？」

『その通り！ では、試合開始！！』

カンフー達の心の準備が出来る前に試合は始まった。その中でも最初に動いたのは七夜だった。

「斬刑に処す！！」

――閃鞘・八点衝

「元気がいいけど、後ろががら空きよ」

イグニスに向かって無数の斬撃を放つ七夜。だがその技の弱点である背後を紫が隙間移動で取る。

「カンフー」

「分かってる」

七夜の事をよく分かっているカンフーは、紫が七夜の背後に移動した瞬間に攻撃をした。小技ではあるが、速度は速く、移動した瞬間では避ける事も防ぐ事も出来ないだろう。

「いい信頼関係だ!!」

「だがこれは乱闘だ!!」

「烈風拳!!」

ルガルとギースが左右から同時に地を這う拳撃、烈風拳を放つ。

「くそっ!!」

カンフーは攻撃を中断し、烈風拳を避けるため下がる。

「えいつ」

ドドドッ

「ぐうっ!？」

「シィッ!!」

七夜は紫に背後から弾幕攻撃を食らう。イグニスがそこに追撃するようには鞭のような武器を振る。

「瞬間移動なら私だって出来るわよ」

「むっ！？」

霊夢が亜空穴でイグニスの上から膝蹴りを入れる。イグニスは避けるも追撃のサマーソルトで飛ばされた。

「いいタイミングだ！！ レイジング「レイジングストーム！」」
くおおお！？」

飛んできたイグニスに更なる追撃のためにロックはレイジングストームを使おうとしたが、ギースのレイジングストームによって上に飛ばされた。

「本当の追撃を見せてあげよう。ジェノサイドカッター！！」

「がっ……！！」

「スキマツアーへご案内」

ルガールの蹴り、ジェノサイドカッターによって地面に叩きつけられそうになったロックは紫の隙間に取り込まれる。その隙間の出口はルガールの前だった。

「さあ、これが私の運送技だ！！ ギガンティックプレッシャー！！！！」

「ガハアッ！！！！？」

ルガールはロックを掴んで走ると、ステージの柱に叩きつけた。ロックは柱からずり落ちると動かなくなった。

「「ロック!!」」

「カンフー！ 博麗！ まだだ!!」

「七夜君の言う通りだよ」

ロックがやられて動揺するカンフーと霊夢を七夜が怒鳴る。まだ試合は終わっていないのだから。

「博麗の巫女よ。先ほどの一撃は見事であった」

「効いてないの!？」

「ネスツ製のマントだ。トラックがぶつかっても問題ない」

ネスツは医療関連の会社のはずだが何故あのような物を作れるのか。霊夢はそう思った。

「ロックがやられたなら全開でやるしかないか。仕留める「フンツ!!」」なあっ!？」

七夜が弾幕モードになろうとした時、ギースの真空投げによって宙を舞った。

「デッドリーレイプ!!」

「ぐあああああああ!？」

「ハアアアツ!!!!」

「うああああああああ!!?」

真空投げからのデッドリーレイプ。元々身体が頑丈な方ではない七夜は連撃から最後の気の放出を喰らい倒れた。

「七夜!!」

「どこを見ている？」

「あ……!？」

霊夢が七夜の方を見た瞬間にイグニスが霊夢を黒い球体に封じ込めた。

「終わりだ。天から堕ちよ!!」

その球体にイグニスが巨大な光球をぶつけると球体は割れ、霊夢も倒れてしまった。あまりに早く倒される仲間。カンフーは呆然としてしまった。

「危ないわよ」

プオッ

「はっ? って電車!？」

ドガッ

「ウオオオオオオ……ウオオオオオオ……ウオオオオオオ……」

――

……いつ！

「あれ？　ここは……」

「保健室よ」

「ああ、博麗か。大丈夫か？」

「私が一番軽傷だからね」

俺の隣には七夜が、博麗の隣にはロックが眠っていた。ロックは特にヤバい連撃を受けたから心配だ。

「あんた電車で弾かれたのによく大丈夫だったわね」

「生命力には自信がある」

「そういえばそこ」

「そこ？」

博麗の指差す先にはコマチとナイア先生、それにオム君先生も寝ていた。

「ナイア先生は七夜のベッドに入ろうとしたそうよ」

「ナイア先生が？」

「七夜が無意識に蹴飛ばしたそうだけど」

ナイア先生がそんな事をするなんて。まさか七夜に気があるのか？
いや、そんな馬鹿な。

「オム君先生はいろいろ傷薬とか用意してくれたみたい。コマチはあんたを心配してたわよ」

電車で弾かれたとなるとそりゃ心配だろうが、ロックを一番心配してやってほしい。あれオーバーキルコンボだろ。

「ふわあ」

「眠いなら寝たら？ 明日休みだし」

「そうする。博麗は？」

「もうちょっといるわ。オム君先生が起きたら任せて帰るから」

「そか。じゃあ……また」

俺は睡魔に身を任せ二度寝についた。

武道会（後書き）

どうしてこうなった。こうなったら次回はギャグキャラを集めてやる。

ではキャラ紹介と会社紹介です。

ギース・ハワード

出演：餓狼伝説

ハワードコネクションの社長。会社をロックに継いでほしいらしいが上手くいっていない。今回の試合で近づこうと思ったがますます逃げられた。

イグニス

出演：KOF

ネスツ医療の社長。医療分野においてトップクラスの実力を持ち、50を超えてもまるで20代。医療分野以外にも手を出している。

四大会社

ルガルル運送

運送ならなんでもお任せ。写真があればどこにいるか分からなくても荷物を届ける。子会社にマスターアジア空輸というのがある。

ボーダー商事

なんでもします。隙間の力で事業を拡大。規模で言えば四大会社の中でもトップ。でも社長はあまり働かず、式神の藍任せ。

ハワードコネクション

人材派遣会社。質がいい人材が多く、派遣される側にとっても確実

に信頼出来る仕事場に飛ばされるので安心。

ネスツ医療

様々な医療に携わる会社。クローン技術で移植だってすぐ出来る。
ネスツ大学という大学もやっている。

MUGEN商店街（前書き）

ギャグ……？ 書いてると面白さが分からない。

MUGEN商店街

ども！ 都古です！ 今日友達の橙ちゃん、ブリちゃん、ケンシロウ君、そしてたまたま会ったゼノンちゃんと一緒に商店街へ遊びに来てるよ。

「何買う？ 私は靴が欲しいな」

「私はね、マタタビ！」

「橙ちゃん、それいいの？」

マタタビで興奮とか暴走とか発情期になったりとかしない？ マタタビ渡されたら変な人にもついて行きそうな橙ちゃんの未来が心配だよ。

「うちは新しいお人形さんが欲しいかな」

「奇遇だなブリジット。俺も人形が欲しい」

「ケンシロウ君も？」

ブリちゃんはいろんな人形、特にデイベアとか集めてるの知ってるけど、ケンシロウ君にもそんな趣味があったんだ。

「超神戦隊アリエンジャーのフィギュアだ」

「「ああ」」

「面白いよね」

「橙も観ているのか。ブリジットは観ていないのか？」

「うちはちよっと」

超神戦隊アリエンジャーっていうのは最近男の子の間で人気爆発の戦隊物。戦いは合体ロボとか出ずに個々の能力で敵を圧倒。でも最後にはイグのんって女の子にいちやもん付けられて一人一人殴られて、ありえん（笑）って言って終わる。観た時には理解が追いつかなかったね。ブリちゃんは女の子寄りだから観ないのかな？

「皆さん子供ですわね」

「むむつ、ならゼノンちゃんの大人って何なのさ。もしかしてピ
ーッとかズキューーンとかして最後には ホアタアッ
とかするのを大人と思ってる？」

「「「？」「」」

「ひ、ひ、卑猥ですわ！！！！／／／／／／」

他の三人はキョトンとしてたけど、ゼノンちゃんは知ってたんだ。
なかなかの耳年増だね。ちなみに今言ったのは私がロックお兄ちゃんにしてほしい事だよ、キャッ♪

「わ、私が買いたい物は舞踏会用のドレスですわ」

「武道会なら終わったよ？」

「橙ちゃん、武道会じゃなくて舞踏会」

「でもそれが大人なな？　うちには分からないなあ」

「大人の買い物が。アリエンジャーウエハースの箱買いは大人だろうか」

「それはただの大人買い」

そんな事を話ながら商店街を歩いているとロックお兄ちゃんとカンフーお兄ちゃん、それと霊夢お姉ちゃんまでいた。

「ロックお兄ちゃん！！」

ズドン

「ふぐっ！？　み、都古ちゃん？」

「都古じゃない。おつきくなつたわね。胸以外」

「霊夢お姉ちゃんほどじゃない。私はまだ希望があるもん」

「それなら私だつて」

「博麗は「カンフー？」希望がない！！」

言い切った！？　霊夢お姉ちゃんの殺気を至近距離で受けながら言い切った！！

「アハハハハ、死になさい！！」

「生きる！！」

カンフーお兄ちゃんは逃げ出し、霊夢お姉ちゃんはそれを追いかけていった。

「あいつは何してんだか。んで都古ちゃんも買物かい？」

「友達とね」（そんなのいいからもっと強く抱きしめて。むしろ抱いて）

「ロック先生だ！！」

「ロック先生こんにちは」

「お久しぶりですロック先生」

「皆さん、ロック先生はもう先生じゃないんですわよ」

「ゼノンちゃんも先生って言うてるよ」

「あらやだ」

あの職業体験事件以来、ロックお兄ちゃんは先生と呼ばれるようになっていた。ロックお兄ちゃんって呼んでるのは私だけでちょっと優越感。

グルルッ

「？」

「……腹減ってるみたいだ」

何の音かと思ったらロックお兄ちゃんのお腹の音か。可愛い♪

「飯にすつかな」

「ロックお兄ちゃん、私達もいい？」

「ああ。奢ってやるよ」

「」「」「ゴチになります」「」「」

「それは悪いのでは」

「ゼノンちゃんも先生に甘えろ。安い店なら知ってるから」

「……それでは」

――

商店街を少し横道に逸れた場所にロックお兄ちゃんの言う安い店が

あつた。ラーメン屋みたい。

「やってますか？」

「ロックか、やってるぜ。そっちのガキンチョ達は？」

「職業体験の時の生徒達ですよ。さあお前ら、好きな頼め」

「ラーメンは醤油しかないけど勘弁な」

店長さんは銀髪の外人さんだった。意外だな。

「チップ店長は元はアメリカで忍者を目指してんだと」

「そうなの？」

「ああ。けどラーメンを食った瞬間に衝撃が走ったな。それまで日本はスシ、スキヤキ、ニンジャ、サムライ、ゲイシャ、ハラキリ、そんなイメージしかなかった。そんなイメージをぶち壊してくれたのがアメリカで食った日本のラーメンだった」

思いっきり日本を勘違いしてる外人さんだね。それにしたって腹切りはないよ。

「それから日本に直接来ていろいろ食ったさ。ラーメン以外にも、カレー、牛丼、トンカツ、アメリカが本場と思ってたステーキまで日本の方が美味かった。けどやっぱりラーメンが印象深くてな。ラーメン屋を始めたんだよ」

「チップ店長はこの店始めて一年なんだが、めっちゃくちゃ美味しいぞ。

天才だ」

「よせやいロック。褒めてもチャーシューしか出ないぞ。さあ注文を言ってくれ」

「俺はラーメン大盛」

「私はラーメン」

「私はラーメンのネギ抜き」

「うちはラーメンのもやし増し」

「俺はラーメン、もやし増し増し、麺増し増し」

「ケンシロウさんは自重なさい。私は普通のラーメンで」

「はいよ……………お待ち」

「……………はやっ!?!?」

いくらなんでも早すぎるよ。三分クッキングじゃあるまいし、作ってあったとは思えない早さだよ。

「うちは早い、安い、美味いが基本だ」

「シッショーを忘れてますよ」

「表に出る」

「サーセン」

――

美味しかった。満足満足。

「たまには庶民の食事も悪くありませんわね」

「ゼノンちゃんはツンデレだなあ」

「誰がツンデレですか!!」

ゼノンちゃん以外には誰もいない。まさにツンデレの極み。なのかな？

「泥棒だ!!」

そんな声が聞こえてきてこっちに魚をくわえたタヌキが走ってきた。
……………タヌキ？

「これはいかん!! 橙、あれをやるぞ!!」

「任せて!!」

ケンシロウ君と橙ちゃんが何かゴソゴソしてる。何をしてるのか確認しようとしたら二人を眩い光が包み込み、光の中から出てきたのは……

「俺の八雲神拳は無敵だ」

橙ちゃんっぽい見た目でケンシロウ君っぽい声の何かが出てきた。

「キヤーチェンシロウ!!」

「ブリちゃん知ってるの!?!」

「なんだか勝手に言葉が……」

「ホアタアツ!!」

「たぬきにくつくばいばー」

よく分からないけどチェンシロウとタヌキの戦いが始まる。とかあのタヌキ強いよ!!

「あれは……」

「ロックお兄ちゃん、どうしたの?」

「いや……まさかな」

「たぬきでいっばー」

「八雲の先人達よ……」

「負けたー!?」

早い、早すぎるよチェンシロウ!! まるでさっきのラーメン屋並みだよ!! あ、元に戻った。

「やはり慣れない身体では北斗神拳を使うと動きづらいか」

「それに一人で一つの身体を動かすのは大変だね」

そういう仕組みだったんだ。どこかの仮面ライダーより面倒だね。

「じゃあ俺がやるか」

ロックお兄ちゃんが前に出る。なら私達は……

「まああああああてええええええええええ！！！」

「いいいいいいいい
やあああああだあああああ！！！」

「たぬうううううううううう！！！！？」

弾かれた！！　タヌキが走ってきたカンフーお兄ちゃんと霊夢お姉ちゃんに弾かれたよ！！　っていうかまだやってたのあの二人！！

「このバカ狸が！！」

「ひゃっ!？」

物凄い怒号が聞こえた。そこにはタヌキの首根っこを掴んでいるお兄さんがいた。

「やっぱりソル先輩のペットでしたか」

「ロックか。うちのバカがみつともないとこ見せたな」

「それよりお店に行った方がいいですよ」

「ああ」

…………… 所謂いえば買い物してない。

「ロックお兄ちゃん、買い物しよ」

「だな。みんなでデパートでも行くか」

この後元々の目的をすっかり達成。そして私はちゃっかりロックお兄ちゃんの部屋にお邪魔したのであった。

MUGEN商店街（後書き）

これでいいのかな？ まあチェンシロウ出したから満足満足。
ではキャラ紹介です。

チップ・ザナフ

出演：ギルティギア
ラーメン屋の店長。ラーメンは早く、安く、そして美味しい。本人は速く、安く、そして紙。

たぬき

出演：MUGENオリジナル
ソルのペット。手癖が悪い。

チェンシロウ

出演：東方？ 北斗？ いいえ北東の拳です
橙とチェンシロウがネスツ製簡易ポタラで合体した姿。肉体は橙ベースなため、北斗神拳を慣れない肉体で使うため合体前より劣化しているとの噂も。

トラウマ克服（前書き）

七夜がロリコン脱却を目指すそうです。

トラウマ克服

俺はこれでいいんだろうか。いつまでも現実逃避をして幼女ばかり追うのが正しいのだろうか。いや駄目だ。いい加減トラウマ克服をしないといけない。

「煉、俺は戦いに出る」

「何をボケかましてるのさ。今日は七夜の大好きなチーズオムレツを作ったよ」

「おっ、それは嬉しいな。って違う!! ボケでもない!! トラウマを克服するために根源を倒しに行くんだ!!」

「根源？」

そうだ。これは俺とあいつら以外には誰も知らない事なんだ。煉になら話してもいいだろう。

――

「とまあ、簡単に纏めるとガキの俺は強姦されたんだ」

「それは……」

あまりの事に言葉も出ないようだ。当然だ、こんな壮絶な経験を聞かされたらな。

「じゃあナイアさんも倒すの？」

「ああ、当然だろ」

「でもなあ……」

ピンポン

こんな時に客か。まあ客はこっちの事情を考えてくれるはずもないからしょうがない。

「出てくるね」

「頼む」

さて、あいつらをどう倒すか。ナイアはともかく、アナザーブラッドと間桐桜の力はよく知らん。せいぜい血と黒い泥を操るという事ぐらいしか。

「な、七夜あ」

「どうし、いきなりか」

煉が連れてきたのは件の三人。向こうから出向いてくるとは予想してなかったな。

「あーあ、出会っちゃったか」

「いい殺気ですね。ゾクゾクします」

「本当にね。これだけでイッちゃいそう」

「あんた達は黙りなさい。七夜、今回は別に襲いにきたわけじゃないわ」

「ならなんだ？」

「そのロリコンを治しにきたわ」

面白い事を言う。俺にトラウマを植え付け、ロリコンにした元凶共がロリコンを治すと？

「私なんて七夜好みの体型じゃないの？」

「ふざけるな。体型が少女でも心が腐っているだろう。俺が求めるのは穢れを知らない無垢でピュアな幼女だ」

「話に聞いていた以上に重症ですね。というか七夜君も腐ってません？」

「だからかもしれないわね。さあ七夜、この棺桶に入りなさい。しっかり治してあげる」

……虎穴に入らずんば虎子を得ず。罨であろうと全て殺す。念のため弾幕の用意はしよう。

「一つ、危険は？」

「七夜！？」

「大丈夫だ煉。戻ってくる」

「危険ならないわ。死にもしないし怪我もしない」

「ならやってやる。そして俺が戻ってきた時にはお前らの終わりだ」

「楽しみにしているわ」

この気味の悪い棺桶に自分から入るのは初めてだな。さてはて、鬼が出るか蛇が出るか。

――

七夜入っちゃった。本当に大丈夫なのかな？ 心配だよ。

「大丈夫よお、煉ちゃん」

「僕は男です」

「あら、ごめんなさい」

この赤い人、分かってて言ってるよね。性格悪いなあ。

「煉君、今七夜君が何をしていますか？」

「知らないよ」

「小さな女の子と遊んでるんですよ」

「えっ？」

ロリコンを治すためのなにどうして小さな女の子と遊ぶの？ それに、この黒い人が言くと、なんだかいやらしく聞こえる。

「悔しいですか？ 大好きな七夜君が知らない女の子と楽しく遊んでいるのは」

「そんな事ない！！ それに僕と七夜は居候と家主の関係だ！！ 変な気持ちはない！！」

「そうでしょうか？ 世の中にはその手の趣味の人がいっぱいいますから」

「いい加減に「桜、そこまでしなさい」ナイアさん……」

「はーい」

僕がランプを取り出して投げつけようとするナイアさんが間に入った。ナイアさんが止めるなら落ち着こう。

「ナイアさん、本当に甘くなりましたね」

「甘いのはいいけど、甘すぎると損しちゃうわよ」

「私の自由よ。あら、もう終わったみたいね」

ナイアさんが棺桶を開けると、中からフラフラしながら七夜が出てきた。

「七夜！！ どうしたの？」

「あれが……あんたらのやりたかった事か？」

「怖かったでしょう？ さあ、お姉ちゃん達が愛して「ふざけるなよ？」！！」

なんだか、雰囲気が違う。いつもの七夜じゃない。

「認めない。あんなもの認めない。幼女はピュアなんだ。純粹だから俺を気持ち悪いと言うのもいる。嫌いと言うのもいる。当然落ち込むが、純粹な心だからこそ俺は許せる。だがあんな穢れだらけの見た目幼女の痴女軍団を真の幼女と認めるか！！」

何があつたの！？ いつも以上に変態度が増してるよ！！

「あら、もしかしたら大変な事しちゃったかしら？」

「ここまで根深いなんて、私の悪^{アンリマ}以上ですよ」

「今回は完全に私のミスよ。煉、逃げなさい」

「でも」

「斬刑に処す」

七夜を中心に魔法陣が浮かび上がって、七夜も宙に浮く。そして魔法陣からは大量の刃物が無差別に辺りを破壊し始めた。

「煉！ 棺桶に入ってなさい！！」

ナイアさんに首根っこ掴まれて棺桶に放り込まれる。外の音も聞こえない真っ黒な世界。だけど少しすると光が見えてそこから外に出た。

「……………」

言葉が出なかった。だってそこには瓦礫しかなかったから。

「煉……………」

「あ………… 七夜……………」

「ハアハア！ なん、とか、収まったみたいね」

七夜は僕と同じで何があっただか分かっていない顔をしていて、ナイ

アさんは服をボロボロにしながら大剣を支えに何とか立っていた。他の二人も倒れてはいるけど無事みたい。

「煉は守ってくれたか。感謝する」

「だったらロリコンを治しなさい」

「……………どうだか」

「まあ、期待せずに待ってるわ」

倒れている二人をナイアさんは抱えて隣にある自宅に帰っていった。被害はうちだけか。

「……………煉。俺、俺……………!!」

「落ち込んでるの？　大丈夫。七夜には僕がいるよ」

「淫乱な少女にもちよつと惹かれちゃった!!」

「死ね」

僕の爆炎が七夜を飲み込んで七夜は倒れた。ハア、家どうしよ。

トラウマ克服（後書き）

棺桶の中で何があったかはとてもじゃないけど書けません。ただ七夜のロリコンは治らなかった。

今回新キャラは出てないけど、七夜の暴走について説明します。

七夜（葬式モード）

MUGENで正しくは葬志貴。深い悲しみを背負った七夜の暴走状態。飛んでくる刃物は非常に危険。一瞬で大抵のものは消し去る。

作者が大好きな某ゴルゴの人の動画では圧倒的な印象を視聴者に植え付けた。

可愛い子鬼（前書き）

今回はカンフーが主人公だよ。いや主人公（笑）かな？

可愛い子鬼

今日は早起きをしたんで優雅な朝食だぜ。とはいっても普段食わないハムエッグを食ってるだけなんだがな。

「ご主人、お手紙ですニヤ」

「市さんか。相変わらずお堅い手紙だな。なにになに……………へえ」

「どんな内容でしたかニヤ？」

「要約すると、もうすぐ遊びに行きます、だとさ」

最初の頃は市さんの手紙はよく分かんなかったが、最近は解読も簡単になってきた。そのせいか古典の成績も上がった。

ピンポン

「フニヤ？」

「こんな早くから誰だ？」

「出てきますニヤ」

気になる。こんな早くから活動するなんて部活の朝練してる奴らぐらいだろう。まあ俺もたまにランニングとかしてるから一概には言えないか。

「ご主人……………なんだか無口な人が来ましたニヤ」

「無口……………なんでお前がいる」

そこには黒いワンピースを着た少女が一人。頭には小さな二本の角がある。

「……………めっ?」

「いや、怒りはしないから。とりあえず学校あるからアイルーとお留守番な。頼むぞ」

「了解しましたのニヤ」

どうして来たかは帰ってきてから聞こう。

――

おかしいな。周りの視線が痛かったり微笑ましかったり、なんぞ?

「おはよう」

「おうカンフー、おはよ……………」

いつものメンバーに挨拶したら固まった。マジでどうした。

「カンフー」

「なんだ七夜」

「こちらの世界へようこそ。だが学校まで連れてくるとは俺への当てつけか？ 極彩に散らすぞ」

「お前ついに頭が……」

ギュッ

俺の後ろには胴着の裾をギュッと握り締める彼女がいた。

「お留守番してなさいって言ったよな!？」

「何か知らないけど、あんたその子と一緒に住んでるの？ ロリフーマン」

「誰がロリフーマンだ!! こいつはな」

「ほおう、こいつは、なんだ？」

いつの間になっていたのか。物凄い殺気を出すコマチが後ろにいた。肉食獣が目の前にいるより怖いです。

プルルル プルルル

け、ケータイ？ この空気の中で出るのはあれかもしれないが、大

切な電話だといけないし。

「出る」

「は、はい」

コマチ様からお許しが出たから電話に出よう。

「もしもし？」

『もしもし。私ですよ』

「あ、市さん。どうしまし『浮気は嫌ですよ？』……………」

ブチッ プープー

こ、こえええええ！！？ コマチが動物的恐怖としたら市さんから
は霊的恐怖を感じたぞ！！ 二つの恐怖で俺の寿命がストレスでマ
ッハなんだが？ てか市さん見てるの！？

「さあ、説明しろ」

「鎌を向けるな！！ 別に変な関係じゃないから！！」

「でも流石に怪しく思うぞ」

「ロック、お前もか。ってか七夜は覚えてないのかよ！！」

「？」

「キョトンとすな！！ カルマだよ！！ 妹のカルマ！！」

「……い、妹！？」「……」

七夜まで驚くな。本気で忘れてたのだっしたらカルマが泣くぞ。

「似てないな」

「カンフーは落書きみたいな顔だもんね」

「誰が落書きだ」

俺だって頑張れば爽やかな感じになるんだぞ。イケメンになるんだぞ。

「カルマちゃんはカンフーに似てなくて可愛いな。ほらおいで」

ササッ

「あれ？」

「ロックは幼女の扱いがまだまだだな。おいで、俺が遊んであげよう」

ササッ

少しでも近づかれそうになるとカルマは俺の後ろに隠れた。

「カルマは照れ屋で引っ込み思案なんだ。許してくれ」

「それもまた良し!!」

「七夜は近づくな」

「カンフー、すまないな。まさか妹とは思わなかった」

「私も。ごめんね、ロリフォーマン」

「コマチは許すが博麗は全力で許さん」

「ただの冗談じゃない」

ただの冗談で人は傷つくんだぞ。七夜と同じ存在なんて俺は嫌だ。

「……にいちや」

「なんだ？ 手紙？」

カルマが手紙を出して渡してきた。それを広げるとみんなが寄ってきた。暑苦しい。

「えっと『脆弱なる我が息子カンフォーマンへ』。……親父か」

「なんか酷いお父さんだな」

「これが普通だ。じゃあ続き読むぞ。『俺は母さんの誕生日プレゼントとして母さんと一年間旅行に行く』。それじゃあ戻ってきたらまた母さんの誕生日じゃないか」

「ツツコミどころってそこかしら？」

「あたしにはカンフーの親の性格が分からんからなあ」

「『だが一年間もカルマを連れ回すのは問題だ。カルマにもちゃんと学校には通ってほしい。だからお前に任せる。手を出したら殺す。父より』。妹に手を出す兄がいるかよ」

「なら俺が」

「ナイア先生、お願いします!!」

「任せなさい」

「なっ!? いつの間に!?!」

「入りなさい」

七夜はナイア先生に捕まって棺桶に投げ入れられた。変態にはお帰り願わんとな。

「最後に何かあるな。『P・S・カルマは地元の中学に通わせるように』」

まあ当然だな。だけどカルマが上手く馴染めるかな? それだけが心配だ。

「カルマちゃんって中学生だったのか!?!」

「……………」

「ロツク、カルマが怒ってるから謝れ」

「あ、ごめんな」

「ナイア先生、今日はここにいさせてもいいですか？」

「授業の邪魔になるなんて事はないでしょうからいいわよ。他の先生にも言っておくわ」

「良かったな。でももうついて来たら駄目だぞ」

「……うん」

仕方のない奴だな。今回だけは見逃そう。

可愛い子鬼（後書き）

まさかのカンフーマンの妹がカルマさんです。これではカルマちゃんですけどね。

ではキャラ紹介をしましょう。

カルマ

出演：MUGENオリジナル

無口で人見知りで引っ込み思案。でも能力はとてつもなく高い。角が生えて鬼っぽくなってるのは先祖帰りだとか。

夜遊びしようよ（前書き）

18歳未満の深夜徘徊はいけませんよ。

夜遊びしようよ

放課後、突然七夜が夜の街に繰り出そうなんて言い出した。こいつは相変わらず馬鹿だ。

「俺ら高校だぞ。警察に補導されるっての」

「カルマちゃんも連れて来いよ」

「死ねえ!!」

「ぐほあ!？」

七夜を殴り飛ばしてついでに踏みつける。カルマをなんだと思ってるんだ。

「放課後SMプレイ？」

「博麗!! お前は馬鹿か!？」

「そうだ!! 男じゃなくて幼女ならバッチコイ!!」

「よし、死ね」

殴る。蹴る。そして投げ飛ばす!!

「うおおおお……」

ガラッ ふみっ

「ぐえっ」

「うおっ！？ 七夜、なんで入り口で寝てんだよ」

教室に入ってきたロックに七夜が踏まれた。ナイスタイミングだ。

「くそ……お前ら今晚絶対に商店街こいよ！！ こないとハブるか
らな！！」

間違いなくハブられるのはお前だな。

――

結局来てしまった。律儀だよな、俺らも。

「なんだ、ちゃんと来たのか。このツンデレ共め」

「お前が犯罪をしないようにな」

「私は仕事よ。夜の街はどうにも霊的なものが多いし」

「一応俺も仕事な。街の防犯は大切だ」

博麗もロックもそういうのやってるんだな。意外だ。いや博麗は巫女だから当然か。

「しかしカンフー、ちゃんとカルマちゃんを連れてこい」

「はいはい、黙ってる」

しかし夜の街でやる事なんてないだろうに。幼女は夜にはいないぞ。

「さて……」

七夜が歩き出す。雰囲気もさっきまでのおちゃらけたものではないぞ。

「どこへ行くんだ？」

「ちょっとな。ついてきてくれ」

まあいい。どうせ提案したのはあいつなんだから付き合ってやろう。

――

七夜は小さな店に入っていく。そして店員を無視して席につく。

「あの、お客様」

「悪と血と混沌」

「……………こちらでお待ちです」

店員に案内されて店の奥へ進む。七夜の目的が見えない。

「地下？」

「こんな所があるなんてね。賭博でもやってるのかしら？」

「待ってたわよお」

あの赤い女は！！

「てめえ、こんな所にいやがったか」

「えっ？ 何？ 知り合い？」

博麗はついてこれていないが、それはいい。問題は俺らを襲った女がいて、何故か七夜がその女のいる場所に來たって事だ。

「なんだお前。ロック達に手を出したのか？」

「私達は七夜一筋よ」

「俺は幼女一筋だ」

「七夜、説明して「なんで貴方達がいるの」ナイア先生！」

ナイア先生まで来るなんて、いよいよもって訳が分からなくなってきた。

「あら、七夜君とお友達が来るなんて聞いてませんが」

「私もよ、桜。大方アナブラの独断でしょう」

「いいじゃない。私だって考え無しじゃないのよお」

さつきから構えっぱなしだったが、ナイア先生も来たしひとまず落ち着こう。話を聞かない限りは始まらない。

「全員揃ったみたいだし、話してあげる。貴方達を理由は簡単。強くしてあ・げ・る」

「「「「お断りします」「」「」」

「ああん、いけずう」

全員が一斉に断る。なんか怪しいからな。断りたくもなる。

「はあ、アナブラ。つまり私と桜はこの子達を強くする手伝いをさせられるのね」

「私は七夜君がいいです」

「ズルいわよ桜ちゃん」

「そうね。抜け駆けは無しよ」

これって七夜だけいればいいんじゃない？ 俺らは俺らで勝手にやるから帰らせて。

「逃がしません」

「ちよっ！？ なんだ！？」

「何よこの泥！？ 悪霊よりも酷いわよ！！」

「逃げようとしたのカンフーだけだろ！？」

「せっかくだから七夜君ついでに鍛えてあげます」

なんだか知らないがこの桜って人も顔と名前に似合わず真っ黒です！！ 助けてカルマ！！

「で、こいつらを連れてきたんだ。まずは約束の物を」

「はい。相変わらず変態さんね」

「お前ほどじゃない」

どっちも変態だよこんちくしょうめ！！ ってかそのDVDはなんだよ！？

「さあ全員棺桶に入りなさい」

「マジですか？」

「比較的マジよ」

マジか、あの中ってどうなってんだろな。

――

黒だよ、真っ黒！！ 七夜と違って初めてナイア先生の棺桶に入っ
たから分からない。

「よく来たわね」

「あ、ナイア先生」

「私はナイアじゃないわよ。ナイアだけどね」

「日本語でok」

「私はナイアの分身。本体ほどお堅くないわ。ok？」

「okok」

これは分かりやすい。ナイア先生はこんな反応しないからな。

「ちなみにロックと霊夢のどこにも分身がいるわ」

「七夜は？」

「オリジナルがアナブラと桜と一緒に遊んでるんじゃないかしら？
感覚共有してるから喘ぐかもしれないけど許してね」

「了解しました」

つまりはそういう事だな。七夜乙。

「じゃ、やるわよ。まあ全員才能あるから死なないでしょ」

「死ぬ死なないの問題なの！？」

強くなるかならないかでしょ！？　これ修行だよ！？

――

パカッ ポイツ

「いてっ!？」

棺桶から放り出される。カンフーや博麗、七夜はまだか。なんかあんまり変わった気がしない。

ポイツ

「あたっ!？」

「博麗お帰り。お前も変わってないな」

「なんか私の場合変な可能性が中に沢山いるからほどほらしいわ」可能性があるだけいいんじゃない？ 俺にはそれがあつたかどうかも教えてもらえなかったしよ。

ドゴッ

「ハアッ! ハアッ!！」

「……激しかった?」

「黙れ!！」

七夜が棺桶を蹴り破って出てきて、その後からあの三人も出てきた。

「七夜、逃げすぎよ」

「そんなに私達が嫌なお？ 酷いわぁ」

「七夜君のためにいろいろ用意したのに」

「お前らの変態的な用意なんているかよー!!」

七夜が言うな。しかしカンフーは遅いな。

「ナイア先生、カンフーは？」

「ん……もうすぐかしら。彼が一番変わったわね。いろいろと」

変わったのか。あいつに抜かされるのは嫌だな。ダチとしては嬉しいんだが、ライバルとしてはな。

パカッ

「ただいま」

「……誰？」

「カンフーマンだよ」

ナイア先生以外が驚愕する。そこにいたのは爽やか系なイケメン。そつえば前回そんな事を言っていたような。本当だったのか。

「ナイア先生、ありがとうございます」

「それは元々貴方の中にあつた素質よ。自分でも気付いていたので

しょう？」

「まあ、はい。でも自由には使えませんでしたし」

「なら手助けになって良かったわ。もう帰りなさい」

「」「はい」「」

「離せアナザーブラッド！！ 間桐桜！！」

「い・や」

「このまま溶け合いましょう」

もう七夜はほつといてもいいんじゃないかな？

――

帰り道。俺らの話題はカンフーだった。

「体格から変わったな」

「こんなに変わると逆に引かれるわよ」

「ペタペタ触るな」

「「だって」「」

こんなに変わると変わってない場所を探そうと思うのが人間ってものだろ。

「全くお前らはよ。そういえば七夜はDVD貰ってたよな。何なんだ？」

ああ、そんなのもあったな。大体の予想は出来るけどな。

「これが。これはな」

「君達！ こんな時間まで何をしている！！」

やべつ、オロミズ警察だ。逃げるか？ 待て、もっと確実な手がある。

「「「お巡りさん！！ こいつロリコンです！！」「」」

「なんだとお！？」

「この裏切り者共め！！」

七夜は逃げ出し、警察はそれを追いかけた。俺らは無事帰宅。ありがとう七夜。裁判の傍聴はしてやるからな。

夜遊びしようよ（後書き）

おめでとう カンフーマンは しんかして ザ・カンフーマンになった

という事でこれからカンフーマンはザ・カンフーマンです。でもカンフーマンって呼んでね。ザ・カンフーマンを知りたい人はググるといいよ。今回はキャラ紹介がないけど組織紹介。そしてオマケを少し。

オロミズ警察

全世界のオロミズ系が集まった地元密着型エリート（？）警察。強いの中から弱いのも幅広い。

――

オマケ

あいつらめ。なんとか逃げ切ったからいいものの、捕まったらヤバかったぞ。

「ただいま、煉」

「お帰り、やつれてるね」

「ちょっと部屋で休む」

「うん」

せっかくだ、DVDを見よう。この『ロリロリハーレム』を本当に手に入れるとは、アナザーブラッドも侮れん。

「では……」

――

七夜は夜食食べるかな？ お味噌汁くらいは……

「れええええん！！」

「わわっ！？ どうしたの！？」

「ロリロリハーレムのDVDがああ！！ アナザーブラッドのストリップDVDになってるよおおお！！」

よく分からないけど騙されたんだね。全くもう。

「おーよしよし、七夜は本当に馬鹿だなあ」

「えっぐ」

「お味噌汁飲んで落ち着きましょね」

「うう……」

こうやって普段から大人しかつたら本当にいいのに。本人は気付かないんだよな。勿体無い。

除霊バトル（前書き）

今回は霊夢メインになりもつした。

除霊バトル

………暇だね。博麗神社がいくら微妙な立地にあるからってこんなに人がこないものかしら？　いつもなら除霊とかが来てもいいのに。霊つてのは夏のイメージがあるけど、それは涼しくなるためだもんね。

「すみません、博麗さんはいますか？」

「はいはい、どちら様？」

「除霊のお願いしたいんですけど」

「任せなさい。料金は霊にもよるけど最低5万円くらいね」

「高っ！！　近くの霊媒師さんなんて1万円だったのに！！」

「なんですって？」

近くに霊媒師なんていたの？　なんて商売仇。これは懲らしめないといけないわね。

「そんであんたはどうしてうちに？」

「やっぱり歴史がある博麗の巫女の方がいいのかなと思って」

よく分かってるじゃない。除霊してあげたいけど、今は商売仇潰しが先よ。

「ちょっと出かけてくるわ」

「あの、除霊は」

「大丈夫よ。あんたに憑いてるの生き霊だから」

「大丈夫じゃないですよね!？」

「ここは博麗の陣地だつてのに割り込んでくるようなのには神罰よ。」

――

このテントね。ボロっちいくせに生意気な。

「ちょっと!! 霊媒師はいるかしら!？」

「……むっ、若き博麗の巫女か」

「なっ!？ あんたサイキカル!！」

そこにいたのはあのドームで滅茶苦茶やつてくれた謎の男、サイキカル。

「成る程ね、納得したわ。あれだけの霊力が使えるなら霊媒師でもおかしくないって事ね」

「それが何か？」

「私の客を盗ってるからじゃない!!」

「彼らは自身の意志で私を選んだ。君にとやかく言われる謂われはない」

「その態度が気に入らないわ。どっちが除霊が上手いか教えてあげるわ!!」

この博麗霊夢の本気を見せてあげるわ!!

――

とりあえずダルそうなサイキカルを連れ出して霊の居そうな場所を歩き回る。

「はいっ！」

「そこ」

むむっ、流石にやるわね。このままじゃ御札が足りなくなるわ。こ
こはデカい霊をぶっ潰して格の違いを見せつけないと。

オギャー　オギャー

赤ん坊の泣き声？　墓地よここ。こんな場所に赤ん坊を連れてくる
親がいるかしら？　お墓参りなら分からなくもないけど。

「感じたか？」

「感じた？　ってああ」

泣き声ができる方からびっくりするくらいの霊気を感じる。それも悪
霊の類だ。これは大物ね。

「行くわよ」

「いいだろう」

赤ん坊の泣き声ができる場所には確かに赤ん坊がいた。悪霊だけどね。

「赤ん坊の面するなんて生意気ね。消し去ってあげるわ！！　霊符
『夢想封印』！！」

色とりどりの霊弾が赤ん坊へと飛んで行く。しかしそれは当たる事
なくかき消された。

ケタケタケタケタケタケタケタケタケタ

「こいつ!!」

「待て」

私が更に強力なスペルカードを使おうとするとサイキカルに止められた。文句を言おうとするとさっきのキモイ笑い声とは違う奇妙な音がした。

ゴキゴキゴキ

「うわキモッ!!」

赤ん坊の身体が折れたり曲がったり膨らんだりして3mはある巨人になった。見た目はガリガリの細い身体にボサボサな黒髪、そして能面のような顔。昨今の三流ホラーよりよっぽど怖いわ。

「そこ」

サイキカルが霊撃を叩き込むけど、多少ブレただけで効いていない。

「ふむ、流石は狂飢か」

「狂飢？」

「性悪説を信じていた親の赤子の霊だ。赤子は大概流産等で生まれてすぐ、もしくは生まれる前に死んでおり、親が性悪説を信じていたおかげで赤子も生まれてすぐには悪しか持っていない」

「赤子は悪だけしか持つていないから絶対に悪霊になるしかない。それも不純物の一切ない純粹悪」

「その寄せ集まりを古来より狂飢と呼ぶ。親の愛に飢え狂った悪霊。力は並の悪霊とは格が違う。……来るぞ」

狂飢とかいうのが巨大な腕を振ってくる。動きは単純、しかも遅い。まあ威力はあるでしょうけど避けるのは簡単。でも硬いのよね。

「払え！」

「神霊『夢想封印』!!」

サイキカルは動きは遅いけど強力な霊弾を一発。私はさっきの夢想封印の強化版を撃つ。

ドゴドゴドゴドゴッ バアン

「キイイイイイイイイ!!!!」

「流石に効いてるようね」

「だが終わりではない」

「そうね」

「カカカカッ……」

う、浮いた!? なんか体育座りみたいに丸まってる。まるで胎児

のように。

ドクン

「きゃあっ!？」

「むうつ!？」

心音が聞こえたと思ったたら私とサイキカルは吹き飛ばされた。今は霊力の波動!？

ドクン ドクン

「つく!！」

「甘い」

私はなんとか避けていたのにサイキカルの奴は以前のように地面に消えた。

「フフフフツ」

地面に紫の光点が出る。またあの技を使うようだ。そして光点は光柱となり狂飢を飲み込んだ。

「結局あんたが倒したわね」

「博麗の巫女。力を隠したな」

「何のことかしらね」

やばいやばい、まさかバレてたなんて。でもあの力は使用禁止なのよ。使ったら私が飲まれるかもしれないわ。

「負けちゃったし、もう帰るわ」

「では私も店をしまおう」

「なんでよ。勝ったからいいじゃない」

「あの場所に出したのは気まぐれだ」

そう言っただけでサイキカルは去っていった。気まぐれで、その気まぐれに私の商売は邪魔されたというの？　はあ、帰ったらあの客の霊でも被ってあげますか。

除霊バトル（後書き）

狂飢はあんな書き方したけどMUGENではいろいろと人気だよ。
霊夢の力が何かは皆さんのご想像にお任せします。
ではキャラ紹介といきましょう。

狂飢

出演：MUGENオリジナル

とてもホラー。作中の設定は作者のオリジナル。特に書く事はないけど、とてもホラー。大事なことで二度と言いました。

ネスツのかぐつてすげー！！（前書き）

今回からちょっといつもとは違う方向へ。それと気が付いたら5000アクセス突破しました。

ネスツのかがかうてすげー！！

今朝はクリザリッドさんに稽古をつけてもらっている。自分もナイア先生の修行で強くなったつもりだったが、この人はやっぱり強い。

「ここまでにしよう。カンフー君も学校があるだろ」

「クリザリッドさん、カン君、飲み物とタオルですよ」

「お二人共ありがとうございます」

「私も出勤前のいい運動になった」

「それにしてもカン君も強くなったわね。見た目も変わったし」

「そうですね」

謙遜はしないぞ。事実なんだから。だからって調子にも乗ってないけどな。

「クリザリッド」

「あ、校長」

「校長はやめよ。今のお前は我が校の生徒ではないのだ」

「はは、すみません」

こんな朝っぱらからイグニス社長がやってくるなんて。後ろには「ちやこちゃオプションが付いてる車がある。」

「クリザリッドに実験してもらったが、仕事か」

「平日ですよ。当然です」

「では君、やりたまえ」

いきなり指名されてしまった。だが俺も学生なんだ。学校に行かないと。

「俺も学校が」

「学校になら伝えておこう」

「校ちょ、イグニスさん。流石に」

「では君か美鈴君がやるか？」

「「カンフー君（カン君）、頑張っ」

「裏切り者！！」

俺だって忙しいんだぞ。しかもネスツの実験ってなんだよ。人体実験とかじゃないだろうな。

「車の運転は可能か？」

「ATなら」

車に乗ってる時の交通ルールとかは知らないが、ATは親の運転を見ていて覚えた。動かすくらいなら簡単だ。

「よろしい。ならあの車に乗って全開で飛ばせ」

「はあ」

イグニス社長の後ろにあった車に乗る。中もごちゃごちゃだ。本来は4〜5人は乗れそうだが、機械のおかげで運転席と助手席しか空いてない。

「渡し忘れていた。キーだ」

「どうも」

キーを差し込みエンジンを動かす。エンジンは問題なく動き始めた。

「あとはとにかく限界までスピードを出すのだ」

「限界までですか？」

「この寮から出なくともここは広い。直線で最高時速を出せる」

公道に出たら交通違反だもんな。流石にそれくらいは知ってるぞ。

「じゃあ行きます」

アクセルを思いっきり踏み込む。すると車はスピードをぐんぐんと上げていった。そして最高時速に達した時だった。

『タイムマシン起動』

「はい？」

俺は車ごと光に飲み込まれた。

――

「……………どこ？」

目を覚ますと寮の敷地とは違う場所にいた。変な機械的建物がいくつもある。……………現実逃避はやめよう。タイムマシンとか言ってたから多分ここは未来だ。

『起きたか？ カンフーマン』

「その声はイグニス社長。俺がいるのは未来なんですか？」

『察しがいいな。その通りだ。デ。リアンをモデルにタイムマシンを造ってみた。それと私はイグニスではなくイグニスボイスのAIだ』

普通タイムマシンは造ってみたで出来ないだろ。それにこのAI、何故イグニス社長の声にした。

『そこが未来という証拠を探してみてくれ』

「探したら帰れます?」

『いや、エネルギー充電に3日はかかる。それまでは待て』

そんなにかかるのか。ならまずは食料確保だな。コインショップを探そう。過去の金なんて未来じゃ高値で売れるはず。

「行くか」

――

しばらく道を歩く。景色は変わったが、道は変わっていないようだ。おっ、第一未来人発見。

「その人、ちょっといいですか?」

「俺？」

「!？」

な、七夜？ いや、ここは未来だ。それに七夜は眼鏡はしてないし、緑の学ランも着ない。別人だ。

「どうした？」

「あ、その、この辺りにコインショップってありますか？」

「あるにはある。ただ教える前に試合でもしてもらおうか。なかなか強そうだし」

うわ、面倒なのを捕まえちゃった。今はそんな時間はないんだよ。

「なら別の人に聞きます」

「待てよ。分かった、試合はまた今度だ」

結局やるのかよ。まあ今じゃないだけいいか。

「じゃあ教えて下さい」

「ここを真っ直ぐ行って、突き当たりを左に曲がって、すぐに右に曲がるとある。目立たないから気をつけろ」

「ありがとうございます。えと」

「獅牙だ。敬語じゃなくてもいいぞ」

「分かった。ありがとう獅牙。俺はカンフーマンだ。じゃあな」

「おう、って連絡先!!」

悪いな獅牙。お前みたいのに関わるといい事ないんだ。ここはとんずらさせてもらうぜ。

――

この店だ。そんなに目立たない事はないと思うが、造りが古いからか？俺からすれば最新どころじゃないんだがな。

「すみません。ちょっと換金を」

「……なんで」

「ナイア、先生？」

「こっち来なさい」

何故か店にいたナイア先生に、店の奥まで連れて行かれて椅子に座

らされた。

「なんでカンフー君がいるのかしら？ 貴方が死んで何百年経った
と思ってるの？」

「どれだけです？」

「100や200ではないわ」

「ただ未来に来たんだ俺。ってかその間ナイア先生は生きてたの
か。そっちに驚きだ。」

「説明は？」

「話せば短くなりますが、ネスツ製の車型タイムマシンで来ました。
タイムマシンは今、寮のあった空き地にあります」

「ネスツ……あんな時からそんなものを。しかし生徒を巻き込むな
んて」

「3日はここにいないといけないそうです」

「そう。ならうちで暮らさない。それくらいなら置いてあげる」

「ありがとうございます……！」

これで一気にいろいろな問題が解決した。ありがてえな。

「そつえば、七夜とか………やっぱりいいです」

「賢明ね。未来の事なんか聞いてもどうしようもないものね。車は取って来てあげる」

「あ、これは聞きたいんですけど、どうしてナイア先生は生きてるんです？」

「乙女の秘密よ」

似合わねー。

ネスツのかがつてすげー！！（後書き）

さあ今回から未来編。未来でカンフーは何をするのか。ナイア先生もいるから安心だね。
ではキャラ紹介をしましょう。

獅牙

出演：MUGENオリジナル
七夜によく似た青年。過去にいた伝説のグラップラー、範馬勇次郎に憧れている。強者を見ると戦いたくなる困った人。

友達が出来ました（前書き）

未来でカンフーは何をするのか。

友達が出来ました

ナイア先生が車を取って来る間、俺は店番をしていた。まあ客が来ないから店のもんを掃除してたんだが、それで2つほど分かった事がある。

まず、未来でも諭吉さんは健在だ。流石諭吉さんです。そしてこの店はコインショップでなく骨董屋だ。獅牙め。

「ただいま」

「お帰りなさい。どうでした？」

「懐かしかったわ。タイヤがある車なんて久しぶりかしら」

この時代の車にはタイヤがないのか。未来らしく空を飛ぶのだろうか。

「カンフー君、夕飯まで時間があるから外にでも行つてなさい。お金はあげるから」

「ありがとうございます」

せつかく未来に来たんだ。いろいろ見て回らないと損だよな。ただ自分の街とはいえ未来だからな。遠出すると迷子になりそう。

「自販機か。茶くらい買おう」

いろいろな種類の飲み物があるが、名前は違っても中身は俺が知るようなものが……………

「どろり濃厚　く　謎邪夢味く」

気になる。手を出したら危険な雰囲気はともするが、気になってしょうがない。自販機なのにパックなのも気になる。だが待てカンフーマン。せつかく未来に来たのにこんなところで冒険を終わらせてもいいのか？　否！！

「なに頭抱えてるのよ」

「はっ！？　ああ、ちよつとこの飲み物が」

後ろから来た赤髪の少女に話しかけられて意識を取り戻す。

「どろり濃厚シリーズの新作じゃない！！　貴方も好きなの？　まさかこんなところで仲間に会えるなんて。私はシルヴィ・ガーネット。貴方は？」

「カンフーマンです」

「カンフーマン、じゃあカン君ね。よろしく、カン君」

「はい」

なんだかこの雰囲気、飲まないといけないような状況になってきたぞ。どうする俺。

ピッ

「はい、奢ってあげるわ」

「ははは、ありがとう、シルヴィ」

全く有り難くねえよ!! 断れよ!! 俺の馬鹿!!

――

結局飲むのか。パックに押して飲んで下さいって注意書きがあるが、普通は逆だろ。……………覚悟を決めるか。

「!?!」

す、吸えない!?! 確かに押す必要がありそうだ。

「!?!?!?!」

な、なんだこの味は!?! 甘ったるさの中に変な酸味? いや苦味? いやいや言葉で表現出来ない風味が口を蹂躪する。シルヴィは大丈夫なのか!?!

「ほおおおお……………」

トリップしてらっしゃる！？ もつ……駄目……………

――

この刺激的な味、癖になりそう。

「見つけたッスー!!」

「プリニー？」

「シルヴィ様！ お家に帰るッスよー!!」

「嫌よ。またパパがお見合い相手を用意してるんでしょ？ どろり濃厚の新作をぶちまけるわよ」

「それはやめてほしいッスー!! テロッスー!!」

こんなに美味しいのにテロとは何事よ。プリニーには味覚がないのかしらね。

「しょうがないッス。用心棒さん、お願いするッスー!!」

用心棒って神竜！？ そんな幻獣どつから連れてきたのよ！！ 私なんてタイダルウェイブで一撃じゃない！！

「カン君逃げる「最高にハイってやつだああああああ！！！！」
「えっ？」

「フツ！！」

ズドン

「「えっ？」」

カン君が蹴りをしたら神竜が消し飛んだ。距離もあるのに一体何をしたのか分からない。

「うつ……………俺は？」

「カン君、何をしたの？」

「悪い。覚えてない」

どろり濃厚のせいかな？ 今回の味はかなり刺激的だったし。

「何をしておるか」

「Mr・師範！！ 邪魔が入ってしまったッス！！」

今度はあいつ？ どこまでパパはお見合いをさせたいのよ。

「うえっ！？」

「カン君どうかした？」

「いや、なんでも。とにかく倒そう」

「拙を倒すというか。この戯けめ。うおおおおおお！！！！」

なんか沢山の大小の男がぐるぐる回りながら飛んできた。これは防がないと。

「くっ、なんて邪魔な」

「それ以上に煩いな」

「いくッス！！」

更にプリニーまで攻めてきた。ってあの男何か光を溜めている。

「プリニー！！ 避けるのだぞ！！」

「分かってるッス！！」

どういう攻撃が来るか分からないけど、プリニーにも当たる攻撃なのよね。

「流影陣！！」

なんか溜めてた光を撃ってきた。かなりの力を感じる。当たれば痛いじゃすまなそう。動きは遅いし、飛んでくる男も無くなったから

避けるのは簡単ね。

「おいペンギン!!」

「ペンギンじゃないツス!!」

「鉄山靠!!」

「ぎゃあっ!!?」

カン君がプリニーを光の方へぶっ飛ばした。

「むっ!!? く、来るな!!」

「無理ツス!!!!!!」

カツ

「ぬああああああああ!!!!?」

「酷いツス!!!!!!?」

プリニーが光に当たると光は爆発して、男もプリニーも光に巻き込まれた。あれって自爆技なのね。

「もっと連携を磨くんだな」

「やるじゃないカン君」

「大した事ないさ。さて、行くか」

「行くって？」

「別に行き先は決まってるな。この街に来たのは初めてだし」

「なら案内してあげるわ」

カン君といたらいろいろ面白そうだしね。楽しませてもらうわよ。

友達が出来ました（後書き）

出す気がなかったキャラがどんどん出てくる。これはどういう事だ？
ではキャラ紹介です。

シルヴィ・ガーネット

出演：AKOF、MUGENオリジナル
甘党でどろり濃厚が大好きなお嬢様、らしい。手から糖分で出来た
ブレードを出して戦う。

プリニー

出演：魔界戦記ディスガイア
ペンギンみたいな生物。魔界から来たらしいが、今はガーネット家
でシルヴィのお世話をしている。爆発する。

神竜

出演：FF
竜。タイダルウェイブという技で敵を一掃する。しかしかませ。

Mr. 師範

出演：MUGENオリジナル
不破刃によく似たすごい漢。流影陣という名のエーテルなど、多彩
な自爆技を所持する。敵を一撃で倒す完全オリジナル技があるらし
い。

ちなみに今回のカンフーマンについて。

カンフーマン（神殺し）

MUGENでは通称名前の長いカンフーマンとして活躍。一発の蹴

りで無量大数を超えるダメージを叩き込む。

未来観光（前書き）

いろいろキャラが増えてきます。

未来観光

シルヴィに引つ張られて街を進む。やっぱり過去とは景色が違う。家は機械的で、車はガソリンではなく電気で動き、空を飛ぶ。

「そんなキヨロキヨロしてたら田舎者みたいよ」

「田舎者だし」

過去なんてこの時代からしたら田舎ってレベルじゃないんだろうな。

「あらシルヴィさん」

「霊夢じゃない」

レイム？　もしかして博麗か？　いや未来だぞ。

「そちらの方は？」

「カン君よ」

「カンフーマンです」

見た目は白い博麗だ。ただバカ丁寧で薄ら寒い。

「初めまして、私白麗霊夢と申します。色の白に麗しいの麗、お化けの霊に夢と書きます」

「これは「丁寧」に」

漢字が違うのを考えると分家とかいうのだろうか。靈姫さんも分家だし。ただ博麗に本当に似てるな。

「いつものメンバーはいないの？」

「獅牙君やゲイル君、ガールちゃんですか？ そんないつも一緒にいるわけでは」

「貴様！ カンフーマン！！ ようやく見つけたぞ！！」

「獅牙、人に突っかかるのは止めた方がいい」

「さっそく獅牙とゲイルが来たじゃない」

「あらら？」

また面倒な敵（獅牙）に見つかっちゃった。しかしゲイルってのはどことなくロックに似てるな。

「あ、みんな！ 何してるの？」

「ガールも来たわよ」

「あら？？」

また来た。今度は俺の服装にどことなく似てる女だな。って待てよ。この面子を並べると……

「ちょっと並んで」

「……はい？」

「いいから、少しだけ、な」

いきなりの事に戸惑っていたが、とりあえず並んでくれた。うん、これ俺らだ。いつも学校とかで集まるメンバーだ。俺の立ち位置に女がいるのがあれだが。

「さてカンフーマン、気が済んだなら勝負だ！！」

「ダブルシュート」

「ぐおっ！？ 何するゲイル！！」

「カンフーマンに迷惑だろう」

「元はといえば……」

獅牙が反論しようとする全員が獅牙を睨んだ。普段から喧嘩を売ってるんだな。全員のこの反応を見れば分かる。

「今カン君は観光に来てるんだから邪魔しない」

「観光ですか。楽しそうですね」

「良ければ俺らも案内しよう。この馬鹿が喧嘩を売ったお詫びだ」

「誰が馬鹿だ」

「あんたよ、獅牙。その性格と趣味治したら？」

獅牙にも変な趣味があるのか。七夜みたいにロリコンだったりして。

「さあ行くわよ！！」

「「「おー！！」」」

「……おー」

「獅牙、暇があれば試合くらいなら」

「獅牙を甘やかしたら駄目よ、カン君」

不憫な奴。周りから見たら七夜もこうなのかな？ だとしたら帰ったら優しくしてやろう。

――

「カンフーマンさんは学生ですか？」

「まあ一応」

「結構強そうだな。獅牙が戦いたくなるのも頷ける」

「そんな事ないって」

シルヴィを先頭に雑談をしながら歩いていた。するとピタリとシルヴィが足を止めた。

「ここがこの辺りでは一番の学校。私達が通う夢弦高校よ!!」

「へえ」

校舎も、門も、校庭も、何もかも変わったな。流石に残っている物を探す方が難しいだろう。

「……………あれは」

「どうかした？」

「あの、木」

校庭の端っこ。そこに生える一本の大きな木。

「あれね。立派でしょ。あの木は昔、本当に昔の卒業生が植えたものらしいの。先生や生徒達が代々世話をしてるうちのシンボルツリーなんだから」

「ちなみに柿の木だから毎年秋には沢山の実が採れるぞ」

「美味しいんだよね、あの柿」

懐かしい、つてほどでもないか。俺が一年の頃の三年生が植えていた柿があんなにデカくなるんだな。ちょっと感動。俺も何か後世に残るものを作ってみたいな。

「あの木で思い出したけど、あの木が植えられた前後に校舎が破壊されたって噂があるんだよ」

「ああ、伝説の4人の話か。俺らもそういうのには成りたくないな」とんでもない4人もいたもんだな。もしかして俺の学年にいたりしてな。

「次は」

「俺がオススメする場所に案内してやる」

「獅牙君のですか。カンフーマンさんは満足されるでしょうか？」

「とりあえず行ってみるよ。やらない事には何も始まらない」

「良い事言っね。じゃあ行ってみよう」

――

獅牙の案内で来た場所はどう見ても危ないお店だった。こいつもまた変態か。

「どうだー!」

「何がどうだ、よー!! カンフーブラックホールー!」

「ぐああああああー!!?」

おいガール。なんでもかんでもカンフーって付けたらカンフーになるわけじゃないぞ。カンフーはブラックホールなんか作らない。

「この変態め」

「悪いなカンフーマン。この近くに俺のオススメのスポットがあるから行こう」

「そうだな。ゲイルに任せよう」

「はううゝ／／／／」

「霊夢!? 大丈夫!?」

「このお店の前に立っただけで真っ赤になるなんて、霊夢ちゃんはムツツリだなあ」

こついう純粹なタイプも初めてだよな。都古ちゃんはロックには純

粹にしているように見えてガッツリスケベだからな。お兄さんの眼は誤魔化せないぞ。

「お前ら、遊んでないで行くぞ」

「そうですよ！！ 早く行きましょう！！」

「まあ目の前なんだがな」

「ふえええ！？」

確かにあの店から目と鼻の先だな。屋台のようだが、店員がいないぞ。

「おやっさん、いないのか？」

「呼んだかゲイル」

うわっ！？ いつの間に後ろにいたんだ！？ こんな筋骨隆々とした金髪の人がいたのに気付かないなんて。なんか電気みたいのがバチバチしてるし。

「紹介するよ。ラーメン屋台のブローリーのおやっさん」

「お前達、よく覚えておけ」

「おやっさん、ラーメン5人前頼むよ」

「そこで倒れているのはいいのか？」

「あれは消毒すべき汚物だから」

「そうか。スローイングブラスター!!」

デデン

どこかで聞いたような効果音と共に獅牙は吹き飛んだ。あれ生きてるよな。流石に目の前で死なれると気分が悪い。

「そんな心配しなくても獅牙ならギャグ補正で生きるよ」

「とても納得した」

ギャグ補正なら誰も死なないな。心臓が止まろうとも、身体がバラけようとも死なない。ギャグ補正は偉大だ。

――

もう暗くなってきたんで別れたが、面白い奴らだった。

「カンフー君」

「ナイア先生、買い物ですか？」

「ええ」

「荷物持ちますよ」

「ありがとう」

ナイア先生の荷物を持って店へ帰る。そんな時、ナイア先生がふとこんな事を言った。

「あんまり人と親しくならない方がいいわ。よく言われる事だけど、別れる時に辛くなるわよ」

「そうですね」

「その様子だと遅かったみたいね」

この先会えなくなるのは確実。親しくなって別れが悲しくなるなんてのは分かってたのにな。

「貴方の性格じゃあ無理なのは分かってるけど気をつけなさい」

「了解です」

しかし無理って断言するなんて、俺の性格はどんなだよ。

未来観光（後書き）

未来でもあのメンバーは健在なのです。
ではキャラ紹介をしましょう。

白麗霊夢

出演：MUGENオリジナル
白い霊夢。本気になるとにかく凄い。エロい事への耐性が全くない。

ゲイル

出演：MUGENオリジナル
ロックっぽい人。常識人。それでも周りに流されず自分の思うように生きる。

ガール

出演：MUGENオリジナル
カンフーガール。でもカンフーなんて使わない。カンフーと言う名の変な技を使う。

ブローリー

出演：ドラゴンボール
屋台のおやっさん。激しいツッコミが特徴。

異形がなんぞや（前書き）

白麗霊夢とハクレイム、博麗トキを混同してる人がいるので簡単な説明。

白麗霊夢…神キャラ、四大霊夢、ふつくしい

ハクレイム・博麗トキ…ナギツ、スマイルビーム、世紀末

異形がなんぞや

未来での初睡眠と初起床は別に変わりありませんでした。当然なんだけどな。強いて言うなら枕が違うから寝にくかったって事だな。修学旅行ではマイ枕を持って行く事にしよう。

「起きた？　ならさっさと朝食を食べなさい。話があるから」

「分かりました」

まだ5時だよな。そんな時間から話って、あんまりいい予感はいないな。

「はい、パンとコーンスープ」

「トーストしてないんですね」

「コーンスープに浸すなら生でしょう」

焼いたあの食感が好きなのに、ナイア先生は生派なのか。これくらい自由にさせてくれよ。

「話だけど」

「早いですね」

「早い方がいいでしょう。話というのは昨晚から出たっていう怪物の調査よ」

どうして俺がそんな事をしなくちゃいけないんだ。居候って辛い。

「怪物ってなんですか？ こないだ神竜とかいうのは見ましたよ」

「情報は少ないけど人型みたいね。ただ暗闇に光る目は一つだったとか。それと被害者は泥まみれだそうよ」

となるとその怪物ってのは泥を操る隻眼の人間なのかな？ 何にする情報が少ない。

「これって依頼が何かで？」

「そうね。八雲紫からよ。社員が被害者みたいだから」

「生きてるんですね」

「妖怪ババアですもの」

そうだった。霊姫さんから聞いてたが、あの人は妖怪だったな。霊姫さんと同級生だからそういうイメージがなかった。

「貴方は暇でしょう。街を隅々まで探さない」

「了解です。地図下さい」

「分かってるわよ」

ナイア先生から地図を受け取る。もちろん紙ではなく地図が映っているタッチパネル式タブレットだ。

「行ってきます」

「私と八雲紫も探してるから、見つけたら連絡するわ。もちろんそっちもね」

「分かってますって」

――

相手は人型。普通に街中を歩かれたら分からないだろう。隻眼つても決定的な証拠にはならない。しかし気になるのは怪物という言葉だ。泥を使う力が怪物という事なのか？

「その男」

「……………」

「黙って立ち去ろうとするな!!」

「俺？」

「そうよ。あんた以外いないでしょう」

本当だ。考え込んで気付かなかった。だけどこの少女はどうして俺を呼び止めたんだ？

「占ってあげるから椅子に座りなさい」

「金が勿体ないから」

「金なんていらないわ。あんたを占うと面白そうなもの。さ、座りなさい」

タダならやってみるか。占いは基本的に信じないタイプだけど。

「私はフィサリス。あんたは？」

「カンフーマン」

「！へえ……」

占い師、フィサリスは何か驚いたような顔をしたけど、すぐに水晶に向き合い始めた。

「あんた、死ぬわよ」

「えっ！？」

「嘘」

嘘でも簡単にそういう事言っなよ。

「とりあえず、並々ならぬ苦勞があんたを襲うわ。ただあんた自身はそうは考えないでしょうね。大した根性よ」

「普段が普段だから」

あいつらのダチをやっただけで苦勞だよ。でも一番苦勞掛けてるのはロックなんだろうな。

「それとこの先運命的な出会いがあるかも。これは当たる確率が低そうね。でも何か出会いがあるのは確かよ」

「ふーん」

出会いが。人間って常に出会いと別れがあるし、これって適当じゃね？

「ラッキーアイテムは、ないわ」

「ないのかよ」

「あんたがラッキーになれるアイテムはこの先もないわ」

そこまで断言しなくてもいいだろうに。つまり俺は幸せになれないというのか。

「まあいい気分転換にはなったよ」

「そう。こんなペテン師の言葉はその程度に考えておくのが一番よ」

「ペテン師？」

ドブン

何の事が聞こえたと思ったらあいつは地面に沈んでいった。ペテン師で、あれ全部嘘だったのか？

――

カンフーマンがフィサリスの事を考えながら歩いているとあるものを見つけた。足跡だ。乾いたアスファルトの地面にある湿った泥の足跡。

「……連絡するか」

カンフーマンは地図の映るタブレットを通話モードに切り替えナイアに電話をした。

『何か見つけたのかしら？』

「周りに泥がない場所で泥の足跡を」

『怪しいわね。八雲紫にはこっちから連絡するわ。場所は、そのタ

ブレットの位置端末を使えば分かるから別に聞かなくていいわね』

「では足跡を追ってみます」

『気をつけなさい。私の生徒だから大丈夫だと思うけど』

カンフーマンは通話を切り、足跡を追いかける。足跡はしばらく進んだ先の廃ビルの中に続いていた。カンフーマンはそれを見上げた後に中に入る。

「暗いな。電気点くかな？」

カンフーマンが電灯のスイッチを探して歩いていると、何かグチャツとしたものを踏んだ。

バン

「!？」

突如カンフーマンが踏んだものが爆発をした。カンフーマンは咄嗟に後ろへ跳んで無事ではあった。

「地雷！？ しかもこれは、泥!？」

「……誰」

カンフーマンが入ろうとした部屋から聞こえてきたのは女の声だった。

「お前こそ誰だ？ さっきのもお前の仕業か？」

「……クス」

女は何も答えずに攻撃を始めた。泥で出来た巨大な爪や手足による中距離攻撃。しかし地雷とは違いあらかじめ構えていたカンフーマンはそれを避け、近くにあった廃材の板を投げつけた。

「そんな板で大丈夫か？」

「大丈夫だ、問題ねえ！！」

しかし女には当たらなかったようで

「やっぱり今回も駄目だったよ。あいつは話を聞かないからな」

「くっ、一番いい板を頼む」

この2人、ノリノリである。

そういつまでもボケてはいられないのか、カンフーマンが飛び出した。

「コレデヨイ……」

女はカンフーマンが来る前に地面に何かをしたようだが、暗くて何かは分からなかった。そのまま突撃するカンフーマンは、またあの泥を踏んだ。

「カンフーに同じ技は二度通用しない！！」

バン

カンフーマンは泥の地雷が爆発するよりも早く女の方へと駆け抜けた。

「アッパーーーーー！！！！」

「ひでぶっ！？」

懐に入り込んだカンフーマンのアッパーが女の顎に決まり、女は倒れた。更にカンフーマンは手足を抑えるために覆い被さった。そこでカンフーマンは気が付いた。女は自分が予想していたような隻眼ではなく、一つ目小僧のような単眼という事に。

――

一つ目とは、これが怪物と言われた理由か。

「見ないでよお／＼／＼」

「でも逃がす訳にはいかないからな」

「……怖くない？ 化け物だよ？」

「別に」

怖さならコマチや市さんの方が怖いし、化け物とかいうならナナーマンの爺ちゃんなんて棒だぞ。それに比べたら一つ目なんてな。

パッ

「「うおつまぶしっ」」

突然光を向けられたのでついネタを言ってしまった。しかしこいつもさっきから結構ネタを出すよな。

「カンフー君、久しぶりね」

「紫社長、お久しぶりです」

「お盛んね」

「あっ、いやこれは！！ 違うよな、な！！」

「ポッ／／／／」

「否定しろ！！」

なんなんだよこいつ。さっきまでのお淑やかさはどこへ消えた。

「ふふっ、一旦ナイアの家に行きましょう。話はそこでね」

「はい」

「それとカンフー君」

「なんですか？」

「浮気は駄目よ」

浮気って……

――

ナイア先生の家で女からいろいろと話を聞いた。まず名前はモノ・フリークスという事。改造人間という事。

「改造人間、いい響きはしないな」

「でも勘違いしては駄目よカンフー君。過去から来た貴方にとっては聞こえが悪いかもしれないけど、立派に医療に役立つ技術よ。ただこんな非人道的なのは初めて見たけど」

「ごめんなさいねモノちゃん。うちの社員にはキツク言っておくわ」

「大丈夫」

社員にもあんまり非はないと思うんだけどな。

「それじゃあモノはこれからどうしたい？」

「カンフーと一緒にいる」

「なぬっ!？」

俺は過去に帰るんだぞ。なのに俺と一緒にとは何事か。モノは知らないからしょうがないんだが、二人になんとかしてもらおう。

「いいんじゃない？」

「そうよね」

「良くない!!」

この二人は頼りにならない。ここは直接説得するしかない。

「ならモノ」

「嫌だ」

「まだ何も言っていないよな!？」

「絶対に嫌」

……………諦めんからな。

異形がなんぞや（後書き）

モノ「シルヴィがヒロインと思ったかい？ 私だよ！！」

今回未来編のヒロインとなるモノ・フリークスの登場です。ヒロインの理由？ 趣味ですが何か？
では彼女の紹介です。

モノ・フリークス

出演：AKOF、MUGENオリジナル
単眼黒髪の少女。改造人間。泥を使う能力を持つ。豊富なネタを戦闘中だろつと使う。素顔を見られると顔を真っ赤にする。カワイイ！

学校潜入（前書き）

前回フィサリスの紹介を忘れてたんでここで。

フィサリス

出演：MUGENオリジナル

自称占い師兼ペテン師。突然現れては適当に占う。収入はもっと別の仕事で手に入れているらしい。

学校潜入

前回、とにかくいろいろあったような感じがしたけど、まだ午前中なんだよな。濃い午前だった。

「カンフー君、学校に行ってみなさい」

「どうしてです？」

「暇でしょう」

いや、確かに予定はないんだが。だからって未来の学校へ行く義理はないというか。

「面白いものがあるわよ」

「うーん」

「いいじゃん。私と行こ」

「一緒に来る気が。モノは顔を隠すものがないと」

「八雲紫からモノ用バイザーを貰ったわよ」

いつの間にそんなものを。普通に考えればモノの目を隠すくらい大きなバイザーなんてダサいんだろうが、そんな事もなくよく出来ている。

「どう、似合う？」

「よく似合うよ」

「いゃん／＼／＼」

何がいやんだ。恥ずかしがるなら聞くなよ。しかし行かなきゃ駄目かな？ 駄目だよな。

「行つてきます」

「待ちなさい」

「なんですか」

「モノの身支度しないといけないでしょう。女の準備は時間がかかるのだから」

「へいへい」

母さんも出掛ける時には化粧とかで時間掛かってたからな。それくらいは待ってやるか。

――

モノと一緒に学校へ向かっているのだが、ジロジロと見られる。やっぱりモノのバイザーは目立つのだろうか。

「みんなの視線を独り占めなんて、私って罪作りなお・ん・な」

「そーですね」

こいつは素顔が見えないと本当に調子に乗るよな。バイザー無しで街に放り出してやろうか。……………それは可哀想だな。

「あれじゃない？」

「あれだぞ。ただ入るのは裏からだけだな」

「こちらモノ。これよりミッションを開始する。どうぞ」

「了解。十分に注意せよ。ってこら」

ポカッ

「あたっ」

「遊んでないで行くぞ」

勝手に入るのは忍びないが、あれだ、俺はOBだから問題ない！！

――

校内は過去とは全く違うと思ったら、意外と教室の場所とか職員室の場所とかは変わっていないようだ。

「見つからないね。カンフーって隠密性能高い？」

「地味と言いたいのか？ 今授業中だからだろ」

目的なく歩いているように思えるが、実はナイア先生から手紙を貰っている。教頭先生に渡せばいいらしいけど、教頭先生ってきつと

……

「カンフー、教頭室だよ」

「おう」

コンコン

「どちら様です？」

聞こえてくるのは安心のあの声。

「カンフーマンです」

「カンフーマン君？ 何故生きて」

「その話は入ってからでも？」

「そうですね。どうぞ」

教頭室に入ると神々しい光が見えた。

「うおっまぶしっ」

「二度ネタはつまらんど。お久しぶり、というべきでしょうか、マハヴィロ教頭先生」

「お久しぶりです」

――

教頭先生に俺の事情を話すと納得してもらえ、ナイア先生から貰った手紙を渡した。

「……成る程、モノさんでしたね」

「はい」

「貴方について分かりそうな人を知っています。呼びますから待って下さい」

ナイア先生の手紙になんて書いてあったかは知らないが、モノについてだったようだ。そして心当たりがある教頭先生は流石だ。

「こんにちは、マハヴィロです。……………ネスツの技術関連でしてはい」

教頭先生が電話をしているのだが、ネスツ？　そういえばモノは改造人間。そんな事が出来そうなのはネスツぐらいか。

「では」

ピッ

「すぐに来るそうです」

「来ましたよ」

「「はやっ!」「」

瞬間移動してきたのか何か知らないが、黒い服の少女がやってきた。

「彼女はイグニス・スカーレット。カンフーマン君を未来に送ったイグニス君の子孫です」

「我が先祖が迷惑を掛けた。謝罪しよう」

「いえ、それより」

「うむ。一目見れば分かる。モノとやらはクーラのクローンの改造人間だ」

クーラ？ クローン？ なんだか壮大な話になってきたぞ。

「まずはクーラについて説明しよう。クーラはネスツの最初にして最後の改造人間だ。クーラはまだ胎児の時に母親が死に、そのままではクーラまで死んでしまいそうなのをクーラの父親に頼まれ、改造人間として生き延びさせた人間だ。漫画、ブラックジャックのピノコみたいなものと考えてくれ」

「生き残らせる手段が改造だったと」

「ああ。もちろん倫理的に批判もあったが、それを無視して我らネスツはクーラを生き残らせた。その成果からか改造人間は医療技術として認められたのだが、我らも倫理を考えない訳ではない。これを特例とし、改造人間技術は封印した」

だからクーラは最初で最後の改造人間って事か。ならどうしてモノは改造人間としてそこにいる。

「数年前にこの技術を持ってネスツから消えた人間がいる」

「じゃあそいつが」

「可能性は高い。奴はクローン技術も得意分野としていた。確か名

は、ザトー」

ザトー。そいつがモノを勝手に創って改造人間にした奴か。

「ただ不自然なのはザトーは倫理的に非常に優れた人間であつた。改造人間やクローン技術に手を出したのもそれらが悪用されないようにするためであつたのに」

「段々それに魅入られたとかじゃないの？　それで私を創ったとか」

「可能性としては無きにしも非ず、なのだがな」

イグニスちゃんは残念そうな顔をして言う。それだけ信用に足る人物だったのか。

「ありがとうございます。いろいろ分かりました」

「あんがとね、イグニスちゃん」

「私は25だ!!」

「マジ？」

「マジだ!!」

これで25。あ、イグニス社長も50超えてたっけ。

「なんだロリババアか」

「ババアじゃない!!」

「なあに、聞こえんなあ」

「う、うー!!」

モノ、あんまり苛めるなよ。

――

校内から外に行くまでは先生を付き添わせるといふ事で教頭先生がある先生を呼んでくれた。

「まさかスペランカー先生まで生きてるなんて」

「驚いたのはこっちだよ」

「ちっちゃい先生」

「はっはっは」

スペランカー先生曰く、残機がある限り生きていけるらしい。マジパネエッス。

「ではさようなら。過去の私によろしく」

「分かりました」

「じゃあね」

学校からの帰り道。なんかさっきのイグニスちゃ……イグニスさんの話を考えるとモノに何を話せばいいか。ここははっきり聞いてみよう。

「モノ」

「ん？」

「もしザトーってのを見つけたらどうする？」

「そんな事よりおうどん食べたい」

「……………なら今日はぶっかけうどんだ」

「やゝらし」

「お前の思考がな」

悩んだ俺が馬鹿だったか。それとも照れ隠しか。まあ今晚はナイア先生に頼んでぶっかけうどん決定だな。

学校潜入（後書き）

なんかややこしい事になってますが、なに、気にすることはない川（ー、、）

ではキャラ紹介です。

イグニス・スカーレット

出演：東方＋KOF、MUGENオリジナル

イグニスっぽいレミリア。もしくはレミリアっぽいイグニス。普段はカリスマ。弄られるとかりちゅま。うー

クローン軍団（前書き）

シリアル、なのかな？

クローン軍団

習慣というものはどうにも抜けない。朝からランニングをして走っている。と獅牙に会った。

「ようカンフー」

「よう獅牙。お前もランニングか？」

「いや、お前を探してた」

「俺を？」

「お前、昨日学校に来てたらしいな。しかも女の子連れて」

うわっ、見られてたのか。なんて言うかな。適当な言い訳じゃあ聞いてすらくれなさそうだし。

「そんなの誰から聞いたんだ？」

「ゲイルが見たんだよ」

くそ、知り合いじゃないのが見たなら勘違いとかで済まそうと思っただのに。

「みんな気になってんだからな。ちゃんと話してもらっぞ」

………どうしようか。

――

獅牙に連れられて残り4人が待つ場所へとやってきた。全員がなんか言いたそうな顔をしてる。

「何か聞きたい事は？」

「じゃあ、俺からいいか？」

「ならゲイル」

「あれは彼女か？」

「ちゃうわ!!」

つい関西弁でツツコンでしまったが、仕方ないよな。あいつは彼女でもなんでもないってのに。

「ならどうして彼女でもない人とどうして学校に来てるのよ」

「そもそも学校に来る理由が分からないですよね」

「シルヴィと白麗の疑問にも答えよう。ナイアさんに頼まれたから

だ」

「ナイアさんだと！？ お前、ナイアさんとそんな仲だったのか！？」

そんな仲ってどんな仲だよ。全く獅牙の奴何をそんなに興奮してるんだ？ ……待て、七夜がロリコンだから、もしかしたらこいつは

……

「獅牙はお姉さん好きなんだよ」

七夜とは逆な変態かよ。もうこいつもどうしてくれようか。

「何を頼まれたかは教えてくれないの？」

「悪いなガール。そればかりは」

「いいわよ。教えたって」

「ナイア先せ……さん」

「ナイアさん！ 俺といい事」

「消えなさい」

ドガッ

「あべばー！？」

ナイア先生の棺桶にぶっ飛ばされる獅牙を見てホッとした俺がいる。

人物は違ってもやってる事が同じだからだろうな。

「それで、どうしてこいつらまで？」

「貴方には時間がないじゃない。それに相手は1人じゃないのよ」

「！ その言い方だと、まさか」

「ザトーを見つけたわ」

早いな。多分紫社長やイグニスちゃんの協力もあつたんだろうが。とにかくこれで気に入らないのをぶん殴れる。

「すみません、説明をお願い出来ますか？」

「いいわ。ただ聞いたら協力してもらおうわよ」

全員、いや気絶している獅牙以外が頷くとナイア先生は話を始めた。

――

「改造人間……」

「封印された技術なのに使うのがいるなんて。カン君もとんでもない事に巻き込まれてるわね」

「まあ、な」

「そんな奴許せねえな」

「獅牙起きたんだ。あ、私も意見は同じ。許せないね」

「なら行きましょう。車は用意してあるわ」

みんなが用意してあった車に乗り込んでいる時、ゲイルは1人だけ考え込むように動いていなかった。しかしさつきも何も言っていなかったな。

「ゲイル、どうした？」

「あ、いや、何でもない」

何でもないって雰囲気じゃなかったが、無理に聞くのは悪いな。

「ふみゅ／＼／＼／」

「れ、霊夢ちゃん!？」

「どうした？」

車の中では白麗が顔を真っ赤にしていた。これは前に獅牙にあれなお店の前に連れて行かれた時と同じ、いやそれ以上だ。

「カン君、モノって子の発言が凄まじいんだけど」

「お前か」

「私だ」

ビシッ

「いたひっ!？」

デコピン一発。馬鹿娘はどうしてそういう話をするかね。シルヴィも顔が赤いし、相当な話をしたんだろうな。

――

ザトーとかいうのがいる場所は廃業したホテルだった。ナイア先生が言うにはこの地下にいるらしい。

「モノ、見覚えは？」

「あるよ。嫌ってくらいに」

なら正解か。だが真正面から行くのは馬鹿のやる事だよな。

「おし行くぜ!!」

いたよ馬鹿が。獅牙が突撃するのは想定すべきだろう。仕方ない。俺らも行くか。

「ケホケホッ、埃っぽいです」

「まあ廃業して結構経ってるみたいだからな」

「敵はどこだ!？」

「モノ、貴女なら分かるでしょう?」

「任せなさい」

モノはカウンターの裏に回ると何かをしていた。すると小さな音がした。

「ここだ!!」

そしてモノが古びたカーペットをめくると……

「何もないぞ」

「ここに隠し扉があるの!! さっきのは鍵を開けた音!!」

そう言っつてモノは床をこじ開けた。確かに下には階段が続いていた。

そこを進むと研究施設みたいな場所についた。

「これは……」

そこにはポッドに入った人間や脳、臓器が大量にあった。B級映画のようだけどやっぱり生はグロい。更に奥へ進むと今度は広間に出て、男が1人立っていた。

「やあやあ、よく来たね。そしてお帰り、とても言おうか？」

「ハア？ 馬鹿なの？ 死ぬの？」

「お前がザトーだな」

「そうだよカンフーマン君。私がザトー。その出来損ない達を創った創造主とも言おうか」

「……達？ おかしい。モノだけでは達とは言わない。ならそれが意味するのは。」

「お友達には言っていないのかい？ ゲイル」

「黙れ、屑が」

「ゲイル君、貴方は」

「白麗、お前の想像通りだ。俺は改造人間だ」

「正しく言えばロック・ハワードのクローンをメインに改造したそのモノ・フリークスと同じ存在だね」

ロックのクローンだと！？ 成る程、良く似ているはずだ。

「ゲイルは親の言う事を全く聞かないから大変だったよ。家出もするしね。でも君達が連れてきてくれて助かったよ」

「何がだ！！ ゲイルは俺らのダチだ！！ お前に渡すか！！」

「そうです。ゲイル君は渡しません」

「あんたみたいな外道が親？ 笑わせてくれるわ！！」

「ゲイルは大切な友達なの！ 覚えておきなさい！！」

「……みんな」

「これは手厳しい。モノ、君はどうする？ 過去の人間といつまで共にいる気かね？」

「過去の人間？」

知っていたか。ロックのクローンを創るぐらいだから当然と言えば当然か。

「そのカンフーマンはそこにいるガール君の先祖だ」

「私の！？ ならどうして今にいるの！？」

「それは分からないな」

「いろいろ理由があるんだよ」

「だがお陰で面白い事になりそうだ。ナイア・ルラトホテップだけでも楽しめた予定だったか」

「なら楽しませてもらいましょうか。貴方の影だけでも面白いけど影？ 確かに影がおかしい。光ではなく、もっと別の理由で動いているような。」

「よく見てらっしゃる。ですが私が楽しんでもらいたいのはこちらでね。ではご覧あれ」

奥から数人の人間が出てきた。全員がこっちの知り合いのクローンみたいだ。

「どうかね？ この巫浄翡翠のクローンは機械人間にしてみたのだよ」

「ヨロシク、オネガイタシマス」

機械人間。そのままと捉えるべきか。無頼が見たらキレそうだ。

「こちらの博麗霊夢のクローンは本人とは逆方向へねじ曲げてみたのだよ」

「ハ―イッ」

「私のご先祖様まで」

黒い博麗って感じが。雰囲気も口調も違うからなんとも言い難いな。

「そして草薙京のクローン、KUSANAGIだ」

「さっさとやろうぜ」

「「ぷっ」」

「何笑ってやがる……!!」

俺とナイア先生が嘖くとキレられた。でもあんな色黒なのが京先輩のクローンとか。いや、それ以上に普通じゃない。

「落ち着きたまえKUSANAGI。次はモノと同じクーラクローンの改造人間、ネージュ・ペブル」

「やつほネージュ。暇してる？」

「忙しいわ。裏切り者の欠陥品」

「グサッ」

モノと似た雰囲気の奴だな。バイザーも付けてるし。

「最後は私の最高傑作だ。その獅牙君の先祖でもある七夜のクローン。殺人鬼・七夜」

「……………」

「俺の先祖だと!？」

なんだあいつは。あれが七夜のクローン？ あんなかつこいいの七夜と認めるもんか！！

「さあお前達。あの愚か者達を殺せ」

「あー、それは構わないけどさ。一ついいか？」

「なんだい七夜」

トスッ

「カツ……！？ なに……を！？」

「俺は俺を呼ぶモノを殺す存在だ。あんたはカンフーのクローンでも創るべきだったんだ。あれは地味だが一番潜在能力があり、逆らう可能性が一番低かった。あんたは、最初の一步を間違えたんだ」

「く…そ…」

ドサッ

ただナイフで突かれただけなのに、死んだのか？ 七夜にあんな力は無かったんじゃない。

「直死の魔眼ね。そんなの持ってるなんて」

「改造されまくって臨死体験でもしたのかね。便利だから好きだけどね。さあ、殺し合おう」

「ねは、少々ヤバそうだ。」

クローン軍団（後書き）

いろいろ出しちゃいました。やつちゃいました。そういえば皆さんが好きなMUGEN動画はなんですか？
ではキャラ紹介です。

ザトー

出演：ギルティギア
元ネスツの社員。大量のクローン改造人間を創った。七夜に刺される。

クローン翡翠

出演：メルティブラッド
メカヒスイ。ただ原作とは違い、100%機械ではなく、生身の翡翠のクローンを改造したもの。

クローン霊夢

出演：東方project、MUGENオリジナル
闇巫女。黒いとカンフーは言っていたが、色は群青。性格が悪い。

KUSANAGI

出演：KOF
京先輩のクローン。普通じゃないから笑われてもしょうがない。色黒。

ネージュ・ペブル

出演：AKOF、MUGENオリジナル
クーラシリーズ。バイザーを付けているがビームは出ない。ザトー曰く、モノと同じく失敗作らしい。

殺人鬼・七夜

出演：メルティブラッド、MUGENオリジナル

正しくは殺人貴・七夜。ザトーの最終兵器だが、ザトーを殺す。直
死の魔眼を持ち、高速戦闘をする。

終わりへと（前書き）

かなり急ぎ足で書きました。

終わりへと

誰と戦うか。相手より人数は多いが、強さはどうか。特に七夜は1人で対処するにはキツイ。

「モノ、貴女を倒すわ」

「ご指名されちゃった。じゃあやってくるわ」

モノはネージユってのと戦うようだ。互いに手の内を知る者同士だ。無難な組み合わせではあるが、無理はしないでほしい。

「白麗ちゃん、やりましょう」

「ご先祖様を侮辱する存在である貴女は許せません」

向こうはクローン博麗と白麗か。クローン博麗の強さは当然だが、白麗の強さも俺は知らないんだが、誰も止めないのを見ると大丈夫のようだ。

「俺はあの色黒を相手しよう」

「逃げ出した腰抜けに俺の相手が務まるのか？」

「俺は以前の俺とは違う。ここで過去にけりを付ける！！」

普通の京先輩ならともかく、あのクローンは普通加減がない。だったらゲイルなら勝てるはずだ。

「私はあの翡翠つて子を倒すわ」

「シルヴィちゃん、私も手伝うよ。強そうだもんね」

巫浄のクローンはシルヴィとガールか。となると最後は……

「3人掛かりか？ 大人気ないね」

「お前が俺の先祖のクローンだろうと倒してやる！！」

「私の七夜もあれくらいクールだったら」

「本人なら『俺はあんたのじゃない！ 幼女のだ！！』って否定しますよ」

「違うないわ」

こうやって遊んでいられるのも七夜が仕掛けてこないうちだけだ。みんなは大丈夫だろうか。

――

モノとネージユは研究施設内の闘技場にて既に戦いを始めていた。

「凍れ！！」

ネージユは不純物を大量に含んだ汚れた氷でモノを閉じ込めようとしたが、モノは軽くそれを避ける。

「そうカッカしないでよ」

「黙りなさい！！」

「貴女ってそんな性格だった？ もっと大らかだったでしょう」

「裏切り者が何をいけしゃあしゃあと！！」

ネージユは止まる事なく攻撃を続けるが、モノには一切当たらない。

「羨ましい？」

「！ 黙れ！！」

「逃げ出した私が1日もしないうちに仲間が出来てるのがそんなに羨ましいの？」

「黙れ黙れ黙れ！！」

「五月蠅い弱虫！！」

モノはネージユの攻撃をかいくぐり、渾身の一撃をネージユの腹に叩き込んだ。

「う……！？」

「そんな悲観的になってさ、どうして自分で行動しないの。どうして無理って諦めるの。あんたにだって幸せになる権利はあるの！！」

「……………モノ……………」

「泣いていいのよ。さあ私の胸の中においで」

モノは両手を広げ、ネージュを迎え入れる体勢をとった。

「嫌」

「うえっ！？」

無駄になった。

「ふ、ふふふ、貴女の馬鹿さに感化されたのかしらね。探してみるわ、私の幸せ」

「その意気よ！！」

「一言だけ。さっきのセリフ、臭くて痛くてウザかったわ」

「一言じゃないし酷い！？」

そんなやり取りをしながらも2人は笑顔だった。

――

「なんで！ どうして！！」

こちらはクローン霊夢と白麗霊夢の戦い。クローン霊夢が一方的に攻撃をしているのだが、それが白麗に効いている気配はない。

「おかしいわよ！ 同じ博麗の力を持っていながら何故私の攻撃が効かないの！？」

「簡単な話です。悪の意思では博麗の力は使いこなせない。例外は貴方のオリジナルにして私のご先祖様、博麗霊夢ただ1人」

「くそおおおおお！！」

クローン霊夢は青黒い霊力の炎を纏って突撃してきた。だが白麗が片手を振るとその炎は消し飛んだ。

「あ……ああ……」

「お終いです」

白麗が再度手を振るとクローン霊夢は吹き飛び、壁に激突して気絶

した。

――

「食らえええ!!」

「くそっ!!」

ゲイルとKUSANAGIの戦いではゲイルが圧倒されていた。遠中近、あらゆる距離での戦いにおいてKUSANAGIが勝っていた。

「つまらねえな。その程度でよく吼えやがる」

「ハア、ハア」

「反応する気力もねえのか。なら終わりだ。真っ赤に燃えろおお!!!!!」

KUSANAGIが大きく振りかぶった腕を振ると巨大な炎がゲイルを飲み込んだ。

「バスター」

「!!!?」

「ウルフ!!」

だがゲイルは炎から飛び出し、KUSANAGIに拳を当てて吹き飛ばした。

「んだよ。やれば出来るじゃねえかよ。ならもつと楽しませてくれるよな!!」

「遊びに付き合うつつもりはない。それにもうお前の動きは覚えた」

「言ったな。なら見せてみるや!!」

「そこだ」

KUSANAGIが地面を走る炎を放つが、ゲイルが片手を上げると地面から小型の竜巻が巻き起こり炎を消した。

「何!？」

「ダブルシュート!!」

「こんなもん当たるか!」

地を走る衝撃波を跳んで避けたKUSANAGI。ゲイルはそのKUSANAGIの下に飛び込んだ。

「レイジングストーム!!」

「なっ!?! うおおおおお!!?!」

ゲイルがKUSANAGIの下で地面に手を叩きつけると衝撃が巻き上がり、KUSANAGIを吹き飛ばした。

「くっ……いい攻撃、おつと?」

「無理に動くな。戦いたいならお互い回復してからやろっ」

「なんだ。お前も動けないのかよ」

2人は座り込んで全ての終わりを待った。

――

クローン翡翠と戦っているガールとシルヴィは苦戦を強いられていた。

「カンフーゴーストアタック!!」

「ピピッ、バリヤー」

ガールが気の霊を放つがバリヤーで防がれる。

「そこっ!!」

バリヤーが切れた瞬間を狙って、シルヴィが手から伸びるブレードで斬りかかる。

「ピッ、ワイヤー」

「キャアアアッ!!?」

だがそれを感じていたかのように、クローン翡翠は電気の通ったワイヤーでシルヴィを投げ飛ばした。

「シルヴィちゃん、大丈夫?」

「正直キツイわ」

「ナパーム」

「させないわよ!!」

クローン翡翠はスカートの下からナパームミサイルを飛ばそうとしたが、ガールの伸びる拳打で狙いをずらされる。その隙に2人は遠くに逃れた。

「やっぱいわよ」

「強いわね。大きな隙があれば私の斬撃を叩き込めるんだけど」

「……………バリヤー貫通出来ない？」

「糖分消費を気にしなければいけるかも」

シルヴィのブレードは糖分消費によって発動する。もちろん大量に消費すればそれだけ強力になるが、それだけの糖分消費は人体への影響がデカい。

「ここにどろり濃厚が3本あります」

「………どうして!？」

「今日はシルヴィちゃんの誕生日でしょ」

「ガール………それ来週」

「えっ？」

「とにかく有り難いわ」

ゴクゴクゴクゴクゴクゴクゴクゴクゴクゴクゴクゴクゴクゴクゴク
ゴクゴクゴク

3本のどろり濃厚を一気に飲み干すシルヴィ。その間にもクローン翡翠は向かってきていた。

「ご馳走様……… あつまいわぁ………」

「敵影再確認。排除開始」

「来たわね。カンフーゴーストアタック!!」

「無駄デス。バリヤー」

「使ったわね」

シルヴィの手のブレードが一気に巨大化する。ブレードは先ほどまでとは桁違いのエネルギー量である。

「ピピッ、危険危険危険」

「危険でもバリヤー解除は出来ないのでしょ。斬れなさい!!」

シルヴィの振り下ろしたブレードがバリヤーごとクローン翡翠を引き裂いた。

「行動……不能……」

「ごめんなさいね」

「でも斬ったのは機械部分だけだったみたいだね。生身部分だったから危なかったかも」

「……そういえばロボットじゃなかったわね」

「忘れてたの!?!」

――

残る戦いはカンフーマン達とクローン七夜の戦いであるが、大変な状況に至っていた。

「どうしたよ。その程度か？」

「ハアハア……これが、俺の先祖」

「これが、七夜かよ」

「全く……強化が、過ぎるわよ」

獅牙は七夜の動きを知らないがために苦戦をし、カンフーマンとナイアは七夜の動きを知りすぎているがために、僅かに違うクローン七夜の動きに苦戦しているのである。

「斬刑に処す」

「流石にそれは見慣れてるんだよ！！」

クローン七夜の連続斬撃を全て防ぎきるカンフーマン。その後ろから飛び込んできたナイアが大剣をクローン七夜へと振り下ろした。

更にクローン七夜の後ろからは獅牙がアッパーを繰り出していた。
しかし七夜はそこから消えていた。

「遅すぎるんだよ!!」

「しまっ」

ザンッ

「「ナイアさん（先生）」」

いつの間にか天井に張り付いていたクローン七夜は、ナイアの背中に飛びかかり、ナイアを押し倒すと背中をナイフで斬り裂いた。

「てめえ!!」

「落ち着け獅牙!!」

「カンフーの言う通りだ。ただか1人倒れただけだろう」

「この、野郎!!!!」

獅牙は七夜への間合いを詰めて殴りかかろうとしたが、カンフーマンに殴り飛ばされた。

「何しやが……」

獅牙はカンフーマンに文句を言おうとしたが、カンフーマンはクローン七夜に斬られ、地に伏していた。

「馬鹿な奴だ。あんなの庇わなければ勝率は上がったろうに」

「俺……は……」

「理解したか？ お前が勝手な事をしなければこいつは無事だったはずだ」

「……」

「ん？」

クローン七夜が何かに気付く。それは獅牙から湧き上がる目に見えるほどの闘気だった。

「許せねえ。これで決めてやる！！」

今までとは比べものにならないスピードでクローン七夜に迫る獅牙の拳。流石にクローン七夜も防がざるおえなかった。そこからも獅牙の連撃は続くが、クローン七夜は防ぎきりナイフを振った。獅牙はバク転でそれを避けた。

「「終わりだ」」

2人は同じような構えをし、そして次の瞬間には2人の立ち位置が入れ替わっていた。

ザンッ

獅牙は大きく一閃を食らい倒れた。

「しかし下手だね、どうも」

そう言った後にクローン七夜も倒れた。理由は獅牙がすれ違いざまに叩き込んだ無数の打撃によってだった。

「俺の、勝ちだ」

「なん、だ。もう…立てるの、か」

「頑丈だが、らな」

立ち上がりクローン七夜に話しかける獅牙。

「無理、するなよ」

「お前も、な」

「違いない。さて……」

トスッ

「!？」

「自分殺し。こういう結果も、悪くない」

クローン七夜は直死の魔眼を使い、自らの死点を突いて消滅した。

――

全てが終わった。獅牙が言うには七夜は自害したらしい。そこが少し残念だったな。

「カンフーマン君、治ったよ」

「ありがとうございます……………って治ってる!？」

今俺らはイグニスちゃんが手配してくれたファウストって医者に治療を受けていたのだが、治すの早すぎ。

「しかしあの七夜も馬鹿ね」

「どうしてです？」

「私達に直死を使わなかったじゃない。埋め込まれた記憶の情に流されたのかしら」

「だったら七夜らしいですね。そういえばザトーは直死で殺されたのに消えませんでしたね」

「彼は死んでないわよ」

死んでない？ でもあの時確かに刺されていたはず。

「死んだのは彼に憑いていた悪霊。本当に七夜は」

悪霊。もしかしてあの時ナイア先生が言っていた影がそれか。

「そろそろ休みなさい。明日帰るんだから」

「分かりました」

いよいよ過去へ帰るのか。短かったけど濃い日々だった。もう来れないのかと思うと少し、いやとても残念だ。

終わりへと（後書き）

次回で未来編は終了。どんな結末が待っているのか。
ではキャラ紹介です。

ファウスト

出演：ギルティギア

超長身の外科医。とんでもない腕の持ち主で大抵の怪我ならすぐに治せる。

帰還（前書き）

まあ適当に書けばこんなもんでしょう。

帰還

ついに帰る日が来てしまった。本当はこんな事考えたら駄目なんだろうけど、もっと居たかったな。

「準備は出来たわよ」

「ありがとうございます、ナイア先生」

周りは何もないだっ広い平原。車を飛ばすにはぴったりだ。さて、別れた。

「みんな、ありがとう」

「水臭い事言うなよ。しかし遂に戦えなかったな」

「獅牙はそればかりだな。だが俺も会えなくなると思うと寂しいな」

「う、うう、ガン、フーマンさん、お、元気で」

「霊夢ちゃん、泣いてないで笑顔で送ってあげなよ。じゃあね、ご先祖様」

「カン君、楽しかったよ。またどろり濃厚と一緒に飲もう」

獅牙、ゲイル、白麗、ガール、シルヴィ……駄目だ。ここで泣くんじゃない。男は人前で泣いたら駄目なんだ。

「カンフーマン君」

「ザトー……さん」

「ありがとう。君達のお陰で私は影から開放された」

「あれは七夜がやった事ですよ」

「それでも礼を言わせてくれ。私はこれから贖罪の意を込めて、あの子達の親として、あの子達に真つ当な人生を歩ませるよ」

「もちろん、ネスツで死ぬまでこき使うがな」

「社長はお厳しい。ではカンフーマン君、過去に行っても忘れないでくれよ」

「はい。あの、モノは」

あいつなら真つ先に飛び出してきて文句なりなんなりを言いそうなんだが、影も形も見当たらない。

「モノか。彼女は寂しがり屋だね。別れなんてしたくないと」

「そう、なんですか。ならこう伝えて下さい。お前も大切な仲間だ、と」

「了解した」

俺は車に乗り込みエンジンを点ける。いい調子だ。

『もついいのか?』

「ええ、行きましょう」

『座標と時間軸はこちらで設定しよう。さあ行きたまえ!!』

アクセルを蒸かし発進する。車はスピードを上げ、そしてトッパス
ピードに乗った瞬間、時間移動をした。

――

カンフーマンがいなくなった未来。全員がカンフーマンが消えた地
点を見つめていた。

「不思議な奴だったな」

「たったの3日。それだけで俺らの中に入り込んできていると
変えていった」

「ざびじい、でずう」

「れ、霊夢ちゃん、チーンして。みっともないよ」

「もう会えないのかな。タイムマシン、造ってみようかな」

全員が感傷に浸る中、クローン翡翠やってきた。

「才父様」

「どうしたヒスイ」

「御報告ガアリマス。モノガ居ナクナリマシタ」

「全くあの子は。何処へ行ったかリーダーで解らないか？」

「イエ、ソノ……」

珍しくはっきりと発言しないクローン翡翠に疑問を覚えたザトー。
そしてその頭の中ではある意味悪いシナリオが想像された。

「モノノ生体反応ガコノ世界カラ『ロスト』シマシタ」

『えっ』

全員が固まる。ザトーの想像が当たった瞬間であった。

――

ああ、寮だ。帰ってきたと実感させられる。

『今は君がいなくなった時から12時間ほど経った夜だ』

「そうですか」

俺が車から出るとそこにはイグニス社長が待っていた。

「帰還したか」

「まさか」

「流石に立って待ち続けてはいない。君の部屋に邪魔をした」

マジかよ。カルマとか怖がらなかつたろうな。イグニス社長って雰囲気ゴツいから。

「未来はどうであつた？」

「機会があればまた行きたいですね」

「そうか。良い事があつたようだな」

「そうですね。とてもいい経験でした」

「それで、そこで吐いてる娘はなんだ？」

「はい？」

車の反対側に回るとorzの体勢で吐いているモノがいた。

「どうしてお前が!!」

「うつぶ、か、カンフー、オッスオッ、オロロロロッ!!」

「ぎゃああああああ!!? こっち向いて吐くな!! 未来へ帰れ!!」

「に、逃げないでえ」

「……カンフー」

「あ、コマチ」

「風邪をひいたと聞いて人が卵酒を持ってきてやったというのに、なににしてやがるうううううう!!!!」

何って……

現状

モノがカンフーマンの下半身に抱きついていてる。

この野郎おおおおおお!!!!!!

「一発で沈めてやるよ。覚悟は出来たか？」

「出来てない出来てない!!」

「返事など聞いてない！！　ワールドデストロイヤー！！！！！！」

「「ぎゃああああああ！！！！？」」

数日ぶりのコマチの一撃は激しかった。モノも過去に来て早々とんでもない洗礼を受けたな。

帰還（後書き）

モノはタイムトラベル酔いです。仕方ないね、酔わないカンフーがおかしいんだ。

コマチはやっぱり激しい。

しかしカンフーはコマチ、お市、モノ。

七夜はナイア、アナブラ、桜。

なんだか残念なハーレム。

中学転入（前書き）

今回はカルマちゃんの出番ですよ。

追記：書き忘れてたA D Sの紹介を後書きに書きました。

中学転入

こんにちは、カルマです。今日はこの街での中学校生活初日です。

「着付け終了。綺麗だぞ」

「ありがと、にいちゃ」

まだ自分では上手く出来ないからお兄ちゃんに着物を着させてもらう。初日はしっかりしていかないと舐められるってお父さんが言っていた。

「わざわざ着物じゃなくても」

「モノ姉さんの言う通りニヤ」

「カルマが着たいからいいんだよ」

昨日突然家族になったモノお姉ちゃん。一つ目だけどナナーマンお爺ちゃんの方が人間としておかしいと思う。

「忘れ物はないか？」

「ん」

筆記用具とハンカチとティッシュ。時間割りが分かんないから教科書は持ってけない。

「行ってきます」

「行つてらっしゃい（ニヤ）」

部屋から出て寮の前に行くとき美鈴さんが待っていてくれた。今日は美鈴さんが車で送ってくれる。

「綺麗な着物ね。でも制服とかじゃないの？」

「自由」

「あ、夢弦高校と同じだったわね」

これから私が通う夢弦西中学校は制服がなくて服装自由だからこれでも大丈夫。

「さあ乗って。ちゃんと道を覚えるようにね」

「はい」

――

美鈴さんが道を丁寧に教えてくれて覚えるのも簡単だった。

「職員室とか分かる？ 分からなかったらちゃんと聞かないと駄目よ」

「はい」

もう中学三年生なんだから何事も自分の力で出来るようになっていないと駄目ってお兄ちゃんが言ってた。だから頑張る。

「……どこ？」

早速迷った。そうだ、迷ったら聞かないと。あそこにいるスーツの人に聞いてみよう。

「あの……」

「何か？」

「ぴっ……！」

こ、怖いよ。でもやらないと………

「君は我が校の生徒ではないようだな」

「……」(コクリ)

「………もしかや今日転入してくるという子かな？」

「……」(コクリ)

し、知ってみたいで助かった。それでも怖くて動けない。

「おやグスタフ先生、どうしましたか？」

サングラスを着けたなんだか優しそうなお爺ちゃんがやってきた。

「オズワルド先生。実は転入生の子を見つけたのですが、固まってしまってます」

「グスタフ先生は強面ですからね。大丈夫ですよ、こんな顔してグスタフ先生は優しいですから」

「こんな顔とはなんですか」

「さあ職員室に行きましょう」

「……はい」

なんとか動けるようになったよ。

――

私の担任となるのはあの見た目怖い先生だった。なんだか資料を見て微妙な顔をしている。

「ご両親や祖父母は、本当にこの人かい？」

「……」（コクリ）

おかしなところがあるのかな？ お兄ちゃんもたまにうちの家系はおかしいって言うてるけど。

「……せんせ」

「あ、ああ、少し見覚えがあつたものでね。特に君のお母様には」

「？」

「なんでもない。では君のクラスへ行こう」

お母さん何したんだろ。多分ろくでもない事だと思うけど。

――

今私は教室の前で待っている。緊張するよ。

「ではカルマ君、入ってきてくれ」

「はひっ！」

声が変わった。落ち着いた私。手に人を書いて……吹くんだっけ？

「し、失礼します」

教室に入るとみんなの視線が異様に気になる。私が気にしすぎなだけだろうか。（着物のせいです）

「自己紹介を」

「か、かりゅま……カルマ、です」

噛んじやったよ。うう、恥ずかしい。

「カルマ君はご両親の事情でこの学校に転入してきた。仲良くするように」

『はい』

「では……カルマ君、あそこのADS君の隣に座ってくれ」

「……分かりました」

ADS君って外国の人なのかな。どうやって話せばいいんだろ。

「よろしくね、カルマさん」

「……………」

ボール？ 黒いボールだね。それが浮いて挨拶してきた。もしかしてこれがADS君？ 遂に人型じゃない知り合いが私にも出来た。

「……よ……よろしく」

これが授業受けてるんだよね。 気になる。

――

ADS君はボールだけど優しかった。そして鉛筆とかは浮かせて使ってるのが分かった。手がないから仕方ないね。

「カルマだったな」

「…………」（コクリ）

休み時間になってすぐに金髪の女の子と無精ひげの生えた男の人がきた。

「アンジェリア、そう高圧的に迫るな。俺はトキ、クラス委員長だ」

「同じくクラス委員長のアンジェリア・アヴァロンだ。よろしくな」

「……よろしく」

委員長さんなんだ。そうなんだ。なんというか対照的な2人だね。

「今日は私が学校を案内してやってもいいんだぞ」

「是非とも案内したいそうだな」

「勝手に改変するなあ!!」

「ありがとう」

せつかくだからお世話になろう。また迷子にはなりたくないもん。

――

放課後に案内してもらったことになったけど、アンジェリアちゃんとト

キ君、それとA D S君以外にも人が来た。

「ジャギ、来たのか」

「姉者に誘われてな。お前が転校生か」

「……」（コクリ）

「ジャギ、カルマを怖がらせたら駄目だぞ。紹介するな。私の弟のジャギだ。あっちにいるボインは妹のミルドだぞ」

「俺がジャギ様だ。覚えておけよ」

「ミルドレッドだ。よろしく」

「……よろしく」

どう見てもアンジェリアちゃんの方がちっちゃくて妹みたいだけとお姉ちゃんなんだね。というかジャギ君とミルドレッドさんが大人すぎるよ。

「浪清は何故いる？」

「転校生が格闘部に入れるような奴が見たかったのだが、駄目そうだな」

「……」（ジーツ）

「そう睨んでくれるな。俺は右浪清。格闘部主将だ」

私だってちゃんと戦えるもん。お兄ちゃんにだって負けないもん。というか三年生だからほとんど参加出来ないんじゃないかな。

「ははっ、悪かったって。さて、彼女の見学はどうする？」

「今日は主要な施設を見て回ればいいと思うよ」

「A D Sの言う通りだな」

「あ」

「どうしたんだ？」

「今日はお迎えがある」

帰日も美鈴さんが車で迎えに来てくれる約束になっているのを忘れてた。

「えー、ならどうするんだ」

「姉様、我が儘を言うものじゃないよ。カルマ先輩にだって用事があるんだから後日にしよう」

「……ごめんなさい」

「そっ気にする事でもねえよ」

「ありがと、ジャギ君」

「ジャギ様だ。ま、先輩だから許してやろう」

残念だけど、また今度で我慢してもらわないと。でもみんな優しく
て良かった。ちよっとは無口が治るかな。

中学転入（後書き）

実はカルマちゃんは三河弁キャラにするつもりでしたが、文字にするに難しい。

ではキャラ紹介と北斗一族とアヴァロン一族の関係です。

グスタフ・ミュンヒハウゼン

出演：KOF

カルマちゃんの担任。ちょっと怖い雰囲気だけど優しい先生。元々要人のSPだったらしく今は娘が受け継いでいる。

オズワルド

出演：KOF

ベテラン教師。生徒にも教師にも人気。

ADS

出演：MUGENオリジナル

三年生。カルマちゃんの隣の席の黒い球体。みんなのアイドル。

アンジェリア・アヴァロン

出演：アルカナハート

ちっちゃいけど三年生。クラス委員長。いじよ。

トキ

出演：北斗の拳

見た目がおじさんだけど三年生。クラス委員長。ユクゾツ。

ジャギ・アヴァロン

出演：北斗の拳

二年生。よくアンジェリアと一緒に戦う。ある事情からヘルメットを被っている。その事情は後ほど。

ミルドレッド・アヴァロン

出演：アルカナハート

大人の女性みたいだけど一年生。短髪だったり長髪だったりする。

右浪清

出演：MUGENオリジナル

三年生。格闘部主将。背が小さいのが悩み。

北斗一家とアヴァロン一家の関係

元々ラオウ、トキ、ジャギ、ケンシロウの北斗四兄弟だった。ジャギは拳法家としての才能が低かったが、努力は欠かさなかった。そんな時に目覚めたのが錬金術の才能がある。しかし初めての火の錬金をした時に暴走し顔を焼いてしまった。

北斗神拳を使えば治せるそれをジャギは戒めとし残した。だが問題となったのは錬金術の才能である。武術に精通していてもその手のものはさっぱりだった北斗一族が頼ったのはアヴァロン一族である。アヴァロン一族の養子になったジャギは才能を伸ばし、若くして石油の錬金術という称号を手に入れた。養子になっても拳法の鍛練も怠らなかった。

ジャギは重い病気に掛かっていたトキへ、石油の錬金によって出来た金を仕送りするなど兄弟への思いも忘れていない。そして新しい家族であるアンジェリアやミルドレッドにも優しくしていて慕われている。

なげえ……

花火祭りへ行こう・前編（前書き）

注：SMH（スーパーメカ翡翠）は出ません。

花火祭りへ行こう・前編

連休だ。暇だ。ロックでも誘ってゲーセンにでも行くか。

「にいちゃ、電話」

「おう。もしもし、今替わりました」

『ワシじゃ、ワシ』

「せめて名前を」

『マーシャルじゃ』

「なんだ、マーシャル爺ちゃんか」

電話をしてきたのはナナーマン爺ちゃんの弟になるマーシャル爺ちゃんだ。もちろん棒人間である。

『明日こっちで花火祭りがあるから見に来んか？ 友達も好きなので連れてこい』

「マジで。さんきゅ、爺ちゃん」

『では明日に迎えに行くからの。準備しとけえよ』

「わーたよ」

ピッ

「カルマ、明日マーシャル爺ちゃんと一緒に花火祭り行くぞ」

「！ やた！！」

誰を連れて行くか。モノとあの3人は確定。ついでにコマチも居た方がいいか。あ、都古ちゃん辺りも呼ぼう。

「カルマも友達呼んでもいいぞ」

「……まだ、恥ずかしい」

「そか。無理にとは言わないが、もうちょっと積極的にならないとな」

「……」（もじもじ）

兄としてはこれで大丈夫か心配だ。

――

次の日、沢山集まりました。ちょっと数えてみよう。俺、カルマ、

モノ、七夜、ロック、博麗、コマチ、煉、都古ちゃん、ゼノンちゃん、知らない人。

「どちら様で？」

「ゼノンの兄のアーデルハイド・バーンシュタインだ。今日はゼノンと俺が世話になる」

「いえいえ」

都古ちゃんがゼノンちゃんを呼んで、ゼノンちゃんがお兄さんと呼んだって構図でいいのかな。

「カンフーお兄ちゃん、今日はありがとうね」(上手く行けばロックお兄ちゃんと2人で……むふふ。カンフーお兄ちゃんにはジュースを奢ってやろう)

「気にする事はないさ」(9本でいい)

「!？」

驚いているようだが、ここはギャグ空間なのだよ都古ちゃん。主人公の俺に君と同じそれが出来ないはずがないだろう。

「ねえカンフー、この人数で大丈夫？」

確かにモノの疑問ももっともだ。これだけの人数では普通の車だと乗れないだろう。まあ普通じゃない車なら大丈夫って事だ。

ブロロロロッ

「待たせたの」

颯爽とバスで登場するマーシャル爺ちゃん。そしてそれに呆然とするみんな。仕方ないよな。年寄りがこんなバスを運転してるんだから。

『棒だー！ー！！』

あ、うん、そっちね。確かに棒人間だよ。

「早く乗れい。行くぞい」

これから楽しいバス移動の始まりだ。カラオケとか設置してあったっけな？

「バス内での事が描写されると思ったかね？ 残念、カットだ」

あー、楽しかった。まさか伝言ゲームでああなるとは。アーデルハイド悔りがたし。

「出店が多いな。これにつられて幼女が沢山」

「七夜はその思考を捨てろ」

「不可能だ」

はつきり不可能と断言した。誰かこいつに神罰を。

「祭りが終わるまで自由行動にしよう。そっちのがみんな楽だろ」

「ロックお兄ちゃんに賛成」

「じゃあそうすつか」

それが決まるとそれぞれがバラバラに行動を始めた。俺もカルマと手をつないで出店回りを始めた。

まず七夜と煉、霊夢から見てみよう。

「煉、縛るのはやめてくれ」

「駄目。七夜はほんとくと大変だもん」

「あんたらも相変わらずね」

七夜は煉に紐で上半身縛られて、霊夢は隣でたこ焼きを食べながら歩いていた。その様子を周囲の人は奇異の目で見ているのだが、それを気にしていないのは流石と言うべきか。

「やめて下さい!!」

「いいじゃん」とさ
お祭りだからさ
パーティー

そんな3人の前に金髪の鎧男に絡まれている女の子が現れた。

「あらやだナンパかしら？」

「七夜、やってしまいなさい」

「俺は助さんか角さんかつての」

そう愚痴りながらも七夜は金髪退治に歩き出した。もちろん紐は解かれている。

「その頭悪そうなの」

「なにwwwwww俺様のwwwwwwことwwwwww言つてんのwwwwwwww」

「ああそうだ。不愉快だから消えろ」

――閃鞘・迷極沙門

「うはつwwwwww不意打ちwwwwww修正されるねwwwwwwww」

七夜が一撃で金髪男を倒す。ナイフでの攻撃したものの、峰打ちなので怪我はしていない。

「あ、ありがとうございます」

「そのデカイ刀は飾りか？　そうでないならそれで倒せ」

「すみません」

「別に謝らなくてもいい」

「あの、私はナコルルと言います。貴方の名前は？」

「七夜だ。じゃあな」

七夜は煉と霊夢のところへ戻り、祭りの喧騒の中へと消えていった。それを見ていたナコルルは歪んだ笑顔をしていた。

「あれが私の王子様」

――

場所は変わってナイア家。そこには家主のナイアと友人のアナブラと桜がいた。

ピキーン

「!?!」

「どうしたの桜」

「なんだか同じ気配がしました」

「桜ちゃんと同じ気配? あのお市って子かしら?」

「いえ、七夜君に近付くヤンデレです」

同じ存在は引かれ会うのか。それともつと別な理由なのか。とにかく桜はナコルルの気配を感知したらしい。しかし何故3人が集まってるかというと……

「あ、クーラードリンク忘れました」

「クーラーミートならあげるわよ」

「アナブラはどうしてそんな微妙なものを持つてくるのよ。ほら、アルバが来るわよ。さっさとなさい」

女3人モンハンパーティーである。

花火祭りへ行こう・前編（後書き）

区切りがいいから前編後編に分けました。もしかしたら明日は更新が難しいかもしれません。
ではキャラ紹介をします。

マーシャル

出演：MUGENオリジナル
棒人間。ナナーマンの兄。何故かバスの免許とバスを持っている。

アーデルハイド・バーンシュタイン

出演：KOF
ルガールの息子。次期社長として期待をされている。意外とおちゃめらしい。

内藤

出演：FF11
金髪の剣士。セリフにwを入れるのが特徴。七夜に瞬殺される。

ナコルル（ナコ月ルル娘）

出演：サムライスピリッツ
この作品では巨大な刀を使うナコ月ルル娘状態。白馬の王子様を信じるような純真無垢なヤンデレ。

花火祭りへ行こう・後編（前書き）

1万アクセスを超えました。やったねたえちゃん、アクセス数が増えるよ。

花火祭りへ行こう・後編

前回花火祭りに来たカンフーマン達、そんな彼らの様子を見てみよう。

「やっぱり繋ぎは大切だな」

「ああ、一撃で攻めるのはいいが、それだけ破壊力のある技があるわけでもない」

ここはロック、アーデルハイド、都古、ゼノンの4人組。中でもロックとアーデルハイドは互いに格闘技談話に夢中になっていた。

「相変わらず男というものは自分の好きなものには熱いですわね」

「そこが可愛いんだよ」

都古とゼノンはそんな2人を見ながら苦笑していた。そして何気に自分の食べたいものを買っていたりする。

「ヘイツ！　そこなヤング達！　ちょっと寄ってかないか？」

そこへある出店から声がかかり、ロックはその店員を見て驚いた。

「テリー！？　何やってんだよ！！」

「ロックか。祭りと言ったら出店、出店と言ったら焼きそばだろ！」

「どんな理屈だよ」

そこにいたのはロックの師匠とも言える存在、テリー・ボガードだった。普段料理をしない彼が焼きそばの出店をやっているのはその場のノリというやつだろう。

「貴方が伝説の狼か。是非とも手合わせを願いたいものだ」

「祭りでそんなのはナンセンスだぜ、ルーキー」

「むう」

「それよりうちの焼きそばを食ってきな。今なら1人前タダだぜ」

「なら4人前くれないか？」

「OK!! すぐに作ってやるよ!!」

テリーが焼きそばを作っている間に4人は談話を始めた。

「お兄様、ロックさん、テリーさんは凄い人なのですか？」

「ゼノンちゃん知らないの？ 有名人だよ」

「テリーさんは伝説の狼とも呼ばれている格闘家だ。実力は父さん並みかもな」

「お父様並みですか」

このメンバーで知らないのはゼノンだけらしく、テリーがそこそこな有名人というのが分かる。そして実力もルガー並みとかなり高

いようだ。

「お待ち！！ 祭りをエンジョイしてこいよ！！」

「ありがとうテリー」

余談だがテリーの焼きそばは濃かったらしい。だがそんな微妙な味の焼きそばもまた祭りの楽しみかもしれない。

――

「わー！ 何あれ！！」

「落ち着けての」

こちらはカンフーマン、カルマ、モノ、コマチなのだが、過去の祭りが初めてのモノにとっては全てが新鮮であり、興奮するなという方が酷である。

「カンフー、こっちこっち」

「出店は逃げないから安心しろ」

カンフーマンを引っ張り回すモノ。そんな2人を快く思わない者もいるようだ。

「……………」

「コマチねえちゃ」

「なあんでもない。カルマは気にするな」

コマチである。妹であるカルマならともかく、いきなり出てきたモノがカンフーマンに引っ付いているのが気に食わないようだ。このままではまたワールドデストロイヤーだろうが、ここに1人、空気の読める子がいた。

「にいちやにいちや」

「どうしたカルマ」

「あれみんなで食べたい」

「チヨコバナナか。よし、買ってやろう」

ねだられたカンフーマンがチヨコバナナを買いに行く。すぐに戻ったのかカンフーマンは4人分のチヨコバナナを持って小走りに戻ってきた。そこへ駆け寄るカルマ。そして……

ガッ

「へっ？」

カルマがカンフーマンの足を引つ掛けた。急いだカルマが止まりきれず、たまたま足がぶつかったようにしか周りからは見えなかっただろう。

「あぶねえ！！」

両手にチョコバナナを持っており、そのままでは倒れそうなカンフーマンへコマチが走る。

ポフッ

「ムガツ！？」

「きちゃん!?」

「……」
(グツ)

コマチの胸にダイブしたカンフーマン。そしてカルマはこっそりガッツポーズをとっていた。

「か、カンフー、はなれ「むぐぐ」んあつ!? や、やめ「ふぐー
っ」ああ!?! う、う、動くんじゃねええええええ!!!!」

ドゴオオオン

「うぐおおおおお！？」

あまりにコマチの胸でもがきすぎたために殴り飛ばされるカンフーマン。それを見ていたモノは自分の胸に手を当てて溜め息を吐いた

そうな。

――

もうすぐ花火という時間になり、全員がバスへと集まってきた。

「カンフー、顔真つ赤よ。お酒でも呑んだ？」

「……事故だ」

「事故か。察しよう」

「ありがとうロック」

察してもらって心に余裕が出来たカンフーマンはある事に気が付いた。なんか1人多い、と。

「誰だあんた!!」

「なんでいる!？」

「すみません。やっぱりどうしてもお礼がしたくて」

それは七夜が助けた少女、ナコルルだった。

「なんじゃ、友達が増えたのか？　ならそれでも構わん。花火のベ
ストスポットに行くから全員バスに乗りなさい」

全員どうでもいいか、といった感じの顔でバスに乗り込む。ただ七
夜だけは異様な寒気を感じていた。

――

マーシャル爺ちゃんの運転するバスで俺らは高台に着いた。それと
同時に花火が打ち上げられ始めた。

「綺麗」

「そつだな」

全員が静かに空を見上げる。大きい花火や小さい花火、変な形にな
る花火。花火の名前なんてのは知らないが、風情が楽しめればいい
んじゃないかな。

ドドドドドッ

花火が連射され始め、そして最後に大輪の花火が咲いて、そして散っていった。

「良かった」

ポツリと呟く。これはまたみんなで来たいな。

――

花火は良かった。だがこのナコルルという女はなんだ。ずっと俺に着いて歩いて。なんだか間桐桜臭がするんだが。

「七夜さん、ずっとこうしてたいです。ずっと、ずっと……アハッ」

ゾッ

やべえよやべえよ。助けて煉。この状況を察知出来るのはお前しかない。

「ナコルルさん、七夜は変態だから気をつけてね」

「大丈夫ですよ煉君。七夜さん、優しいですから」

ちっがー！うー！！ 煉の馬鹿！！

「ゼノンちゃん、七夜お兄ちゃん達あつつあつだよ」（でもあの女の人やばいかも）

「邪魔してはいけませんわね」

幼女達、勘違いしないでくれ！！ 俺はこんな女には興味の欠片もないんだ！！ ってか誰か気付いてなかったか？

「な・な・や・さ・ん♪」

「は、ははははは」

帰り際に運命と称されて半ば無理矢理連絡先を交換させられた。着信拒否とかにしようか考えたが、そうすると直接乗り込んできそうで怖いからやめた。

花火祭りへ行こう・後編（後書き）

ヤンデレのストレスで七夜の頭痛がマッハ。
ではキャラ紹介をしましょう。

テリー・ボガード

出演：餓狼伝説

ロックの師匠。世界を旅しているはずなのに日本以外での目撃情報がない。ノリでいろいろやってしまう。

MUGEN 昔話（前書き）

自分でも何がしたいのか。教えてエロい人。

MUGEN 昔話

それはある日の事、モノがうちの本棚の奥からそれを見つけたのが始まりだった。

「カンフー、これ何？」

「おお、懐かしい。これは絵本だよ」

「それは見れば分かるよ。見た事ないタイトルなんだけど」

「マイナーだからな。どれ、読んでやろう」

俺が絵本を広げると、どこからともなくカルマとアイルーがやってきた。

「お前らも聞くか？」

「うん」

「懐かしいですニヤ。僕もパパに読んでもらったのを思い出しますニヤ」

「アイルーのパパって？」

「ご主人のパパのアイルーが僕のパパですニヤ」

よく知らんがこいつの一族はなんかうちの家系に引っ付くように仕えている。だから昔から一緒にいるんだよな。この絵本を知ってる

理由もそれ。

「じゃあ読むぞ」

「絵本なのに絵は見せてくれないの？」

「絵は重要じゃないからな。では、昔々ある村に……………」

――

昔々ある村に、1人の男が住んでおりました。男は若き時に修行を重ね、大層強かったそうです。そして心も優しく、何不自由なく生活しておりました。しかしそんな男にも悩みがありました。

「おはよう」

「……………」

人に気付いてもらえない事です。何を言っても最初には気付いてもらえない。何度も話し掛けてようやく気付いてもらえる。そして気付いてもらえても……

「えっと、誰だっけ？」

名前も覚えてもらえてない。何度教えても次に会う時には忘れられてしまうのです。彼は悲しかった、悔しかった、何故自分はこんなにも地味なのか。男はそんな地味な自分が大嫌いでした。

「フウツ！！ ハアツ！！」

彼はそんな気を紛らわすように鍛錬に打ち込みました。しかし彼がどんなに頑張っても彼は忘れ去られ、ついに彼は自分の名を名乗る事すら止めてしまいました。

――

「壮絶ね」

モノが言う。確かにこんな人生を送ってる人がいたら同情する。まあいた事を忘れて同情も出来ないだろうけど。

「お前みたいの一つ目だったら覚えられたかもな」

「冗談で言ってる？」

「比較的本気だが」

「本気なら良し」

「いいんだ」

「きつといいんですニヤ」

こいつの性格が分かる奴はいないんじゃないかな。まあ本人がいいならそれはいいんだろう。さて絵本の続きを読もう。

――

男はあらゆるものに興味を無くしました。自分が関わろうがなんだろうが結局忘れられるのだからです。そんなある日、魔王ミクトランが村を襲撃してくるという話を聞きました。

魔王ミクトラン、彼は天才でした。しかし天才故にその力に溺れ、自分のように優れた人間を神のように天に住まう者、天上人とし、それ以外を地に這いずる者、地上人と分けました。そして地上人を排斥し、天上人のみが住む完璧な世界を創ろうと考えていました。

「くだらない」

男は自分の村にそんなとんでもないのが攻めてくるといつの日に日常を満喫していました。

ドガッ

そんな時、誰かが男の家のドアを蹴破ってきました。それはミクトランの手下でした。

「家がいるから人がいるかと思ったら、誰もいねえじゃねえかよ」

「人の家に入ってきて偉そうだな」

「!!!?」

「シャドウ・ドラゴン!!!」

男は巨大な気弾でミクトランの手下を吹き飛ばしました。また家を荒らされては面倒と考えた男はミクトランを倒しに外へ出ました。村では既にミクトランの手下が村人を捕まえていました。流石に男もこれは見逃せません。

「アース・ドラゴン!!!」

『うわあああああああ!?!?』

男に気付かないのが運の尽き。男が地面に手を付けると地面から沢山の気の柱が出てきてミクトランの手下を薙ぎ倒しました。

――
「絵本なのに『気』なんて単語が出るんだ」

「いや、これは俺が変えた」

実際に書いてあるのは超パワーだからな。これはある意味ぶち壊しだ。

「これからクライマックスなのかな？」

「それは聞いてからのお楽しみな」

――

男がミクトランの手下を一掃すると遂にミクトランが出てきました。ミクトランは手に持った黒い禍々しい剣を男に向けて言いました。

「貴様、よくもやってくれたな。たかだか地上人如きが」

「知るか。私の平穏を邪魔したお前が悪いのだ」

「なんだと？」

「消えなくては去るがいい」

「やはり地上人は野蠻で馬鹿者だな。貴様のような者は死ねい！！ヘルスライサー！！」

「ドラゴン・スラッシュ！！」

ミクトランが剣を振ると斬撃が飛んだが、男は気の刃でそれを撃ち落としました。そしてすぐに男はミクトランの首を掴みました。

「ぐっ！？」

男が掴むとミクトランの身体を黒い龍が這いずり、爆発しました。

「ガアッ！？ ハアハア！！」

「どうした」

「ひいっ！？」

ここでミクトランは理解しました。男は相手にしてはならない存在だったと。ミクトランはすぐに逃げ出しました。男は追いませんでした。彼は自分の周りを荒らされないならそれで良かったからです。この事がミクトランの心に深い傷を残し、二度と同じような事をしませんでした。

きつとこんな事があつたのも忘れられるでしょう。しかし私はこの絵本を描く事によって彼を忘れません。

――

「小さな村人に住んでいた『J』の事を。おしまい」

「変な話。普通絵本とかは教訓とかを教えるんじゃないの？」

「そうだな」

でもこの絵本はこういう風でいいかもしれない。この著者はただこの男の事を残すためにやったのだから。誰もが忘れた英雄を残したかったんだろう。

MUGEN昔話（後書き）

カンフーの家に代々伝わる謎の昔話。地味な人でも大切に。
ではキャラ紹介をしましょう。

村人」

出演：レイジ・オブ・ザ・ドラゴンズ、MUGENオリジナル
地味な人。でもとても強い。

ミクトラン

出演：ティルズ・オブ・デステイニー

魔王役。ティルズシリーズで救いようのないラスボスナンバーワン
だと作者は信じている。オリジナルデステイニーでの弱さからティ
ルズシリーズで最弱なラスボスナンバーワンとも作者は信じている。

期末試験（前書き）

面倒だよね。やりたくないよね。だがやらないといけないんだ。

期末試験

今年もこの時期がやってきたわね。あの恐怖の期末試験の時期が。

「博麗、勉強やってるか？」

「うっさいわよ。やってないから焦ってるのよ。そういうカンフーはどうなのよ」

ロックは何気に頭がいいし、七夜は煉が見張ってるから勉強せざる負えないのよね。

「今年はカルマがいるからな」

「カルマちゃん？ あの子がなんなのよ」

「カルマは頭がいいからな。俺が分からん問題は教えてくれる」

「兄としてどうなのよ」

しかしカルマちゃんって高校の問題が分かるなんて偉いわね。ってそんな事考えてる場合じゃないのよ。

「博麗、大丈夫か？ 教えてやろうか？」

「本当ロック！！」

「ああ」

助かるわ。ロツクに教えてもらえるとっただけで安心感が増し増しよ。まずは何から聞こうかしら。

「じゃあこれから」

「なんだ博麗、この程度も分からないのか？」

「七夜、あんたはいらないの」

「博麗の巫女の名が泣くぞ」

「別に博麗の巫女は勉強出来なくてもいいのよ。お祓いとかが出来たら十分」

「案外楽な仕事なんだな、博麗の巫女って」

まあ実際には銭勘定出来るくらいには数学が出来ると便利ね。それは自然に覚えたから数学もいらないけど。

「しかしそこまでして点を取らないといけないもんか？」

「天才は赤点の恐怖を知らないからよ」

大門先生やWind先生、スペランカー先生ならともかく、他の先生は赤点取ると危険なのよ。

「それで何を知りたいんだ？」

「この英文法なんだけど」

「座りなさい。時間よ」

ナイア先生、タイミング悪過ぎよ。謀ったわね。

「今回からテストの形式が変わるから」

「形式？ マークシートにでもなるんですか？」

「惜しいわ博麗。校長が今回決めた方式はこれよ」

問題：この中で空手の技はどれでしょう。

A：震脚 B：昇竜拳

C：双掌進 D：ウルトラバックドロップ

ミリオ。アか！！ ってか今の答えないでしょう。しかも一つカタカナだし。

「ちなみに今の答えはウルトラバックドロップよ」

「分かりますよ」

「常識だな」

ちよっ、みんなおかしいわよ。それは空手でも何でもないわよ。

「これは全39問あるわ。そしてこのクラスは40人。この意味が分かるかしら？」

「もしかして、勝ち抜け？」

「そうよロック。最後まで残った生徒が赤点。早押しだけど間違えたら一回休みよ」

完全にクイズじゃない。でもこれなら勝ち目があるわ。やってやるわよ。

「では第一問」

――

まさか最後まで残るなんて。他に残っているのは……

「くそっ！！ 全然わかんねえ！！」

……なんだキワミか。

「最終問題。次のうち年間売上が一番の企業は？」

- | | |
|----------|--------------|
| A：ボーダー商事 | B：ルガルル運送 |
| C：ネスツ医療 | D：ハワードコネクション |

「あれ？ 英語じゃ」

「サービス問題よ」

サービス問題でも難しいんだけど。どの企業かしら。

「はい!!」

「ではキワミ」

「実は全部同じ!!」

「違うわよ。博麗は分かる？」

「……ネスツ医療」

「正解」

「ちくしょおおおお!!!!」

良かった。なんとなく医療関係は高いと思ったら当たったわ。さあこの先も当てていくわよ。あいつがいる限り負ける気はしないわ。

――

あれから何度もテストがあつたけど、結局キワミが負け続けてた。私だつて得意科目では早めに抜けたのに。

「F o o、日本史最終問題です」

日本史は苦手でキワミと一緒に最後まで残つたけど、今回だつて大丈夫よ。あ、紹介忘れてたけど日本史の先生は天草四郎時貞先生。うちの学校、日本史と世界史と社会科は別なのよね。

「赤報隊結成の「滋賀県愛知郡愛荘町にある金剛輪寺！！ 別名は松尾寺！！」F o o！！ キワミ君お見事！！」

「えっ？」

なんでそんなに詳しいの？ 普通あそこまで知らないわよ。ファンなの？

「博麗君、汝のカルマ、救い難し」

「ウゾダンドコードーン！！」

シヨックだわ。赤点とかそんな事よりもキワミに負けた事が何よりもシヨック。夏休みの補習が鬱だわ。

期末試験（後書き）

まさかキワミが出るとは思わなかったろう。うちの霊夢は頭が？ほどではないけどよろしくない。
ではキャラ紹介です。

キワミ

出演：るろくに剣心、ニコニコ動画、MUGENオリジナル
もうニコニコ動画のキャラでいいと思う。自爆技が豊富。

天草四郎時貞

出演：サムライスピリッツ

Football これが彼を表す一言である。日本史の先生。

煉君バイトする（前書き）

題名通りです。

煉君バイトする

僕は悩んでいた。居候なのに働かなくていいのだろうか。いや、ただ七夜の世話をするだけではないけない。仕事を探そう。幸い夏休みに入ったからその手の短期バイトは多いはず。新聞のチラシとかに

……

「うーん」

どれも条件が厳しいな。僕って子供に見られちゃうし、あんまり長い期間だと七夜の世話が出来ないし。

「……あ」

あった。年齢性別不問の短期バイト。給料もかなり高い。早速連絡してみよう。

ピッポッパッ プルルルプルルルル ガチャ

『はい、ありがとうございます。ルガール運送です』

「あの、バイトの記事を見たんですけど」

『ありがとうございます。お名前とお住まいをお教えいただけますか？』

「煉です。夢弦市在住です」

『煉様ですね。夢弦市在住でしたらルガール運送本社にて面接にな

ります。明日の午前10時となります。身分証と筆記用具をお持ちいただけますでしょうか？」

「大丈夫です」

『ありがとうございます。ではお待ちしております』

やった。とりあえず面接をしてもらえるぞ。上手く受かるといいな。

――

次の日、七夜がまだ起きないけど朝食兼昼食を作っておけば大丈夫かな。

「行つてきます」

小声でそう言ってから家を出る。ルガール運送本社は徒歩15分と結構近所にある。

「やっぱり大きい」

普段見慣れたルガール運送本社だけど、面接のために入るとなると

緊張する。入るの自体初めてだし。

「いらっしゃいませ。ルガル運送本社へようこそ」

「あ、あの、バイトの面接なんですけど」

「でしたらこちらのマップのこの場所になります」

会社内のマップがあるなんて、流石ルガル運送。まずは教えてもらった場所に行こう。

「この部屋かな」

「！ 煉にいちや」

「カルマちゃん。カルマちゃんもバイト？」

「ん。人生経験」

「受験生なのに大丈夫？」

「推薦通った」

つまりもう高校が決まったの？ カルマちゃんって凄いな。七夜も見習わせたいよ。

「えっと、順番は」

「モニタ」

カルマちゃんが指差す電子モニターに名前がいくつも書いてあった。ピンポーンという電子音と共に名前が赤くなり、人が部屋へと入っていく。

ピンポーン

「きた」

「頑張つてね」

「ん！」

カルマちゃんが部屋へ入っていく。それにしても随分人数が多いな。受かるか心配になってきた。

ピンポーン

「もう僕か」

これだけの人数がいるから流れ作業みたいにやってるのかも。

「失礼します」

「おや、煉君……だつたか」

「アーデルハイドさん！　なんで面接官を？」

「まあ夏休みの小遣い稼ぎみたいなものさ。コンビニとかでも良かったんだけど、バーンシュタインの名を出すと変な扱いをされてね」

「御曹司も大変ですね」

「全くだよ」

面接官がアーデルハイドさんって事で緊張がなくなった。僕も単純だな。

「君の人格は知ってるから、殆どの質問は省くよ。聞きたいのは1つだけだ」

「何でしょう?」

「運送技は使えるかな?」

――

ハッハッハ! 突然ですまないね。私はルガル・バーンシュタインだ。ここでは運送技を知らない人のために運送技の説明しよう!!

通常運送

これは基本的な運送技だな。私のギガンティックプレッシャーはこ

れに属するな。技の内容としては相手を掴んでそのまま壁に叩きつけるものだ。中には地面に押し付けながら走るものもあるぞ。

縦運送

これは相手を掴んで縦に投げる技だ。掴んだまま持ち上げるものもあるぞ。見た目は地味だが破壊力は抜群だ。私も使える技だ。

仕分け

これは相手を壁に押し付けた後に無数の攻撃を叩き込む技だ。この作品ではクリザリッド君やオズワルドさんなんかが使い手だな。

空輸

これは運送技でも掴みが必要としないものがある珍しい種類だ。１度当たっただけでは運送技としては成立しないのだが、連続で当てることにより運送技となるのだ。私の会社の子会社であるマスターアジア空輸の社長、東方不敗マスターアジアさんなんかはこれの名人だ。

さあ運送技を理解したかな？　だがこれはMUGEN用語のほんの一部。みなもMUGEN用語を理解して楽しいMUGENライフを！　では本編へ戻ろう！！

――

何か挟んだ気もするけど、とりあえず答えないと。

「使えますよ」

「なら少し見せてくれないか？」

「荷物がないんですけど」

「このサンドバッグ君に頼むよ」

アーデルハイドさんが持ってきたのはサンドバッグに可愛い目が付いたもの。ちよつと罪悪感があるんだけど。

「行きます。ふう……たあああ！！」

爆発による推進力でサンドバッグ君を掴んで壁へ持つて行く。荷物と考えてぶつけないように気をつける。というかこんな可愛い目をしてるものをぶつけない。

「いい技だ。合格だよ。あっちの扉から出て行くと会場に着くから」

「ありがとうございます！でも会場って？」

「合格者は集められるんだよ。君はタイプの通常運送に回されるだろう」

それぞれ配属先に分けられるのが会場なんだな。早速行こう。

――

会場には沢山の人がいた。ここにいるのが全員バイトなんだ。

「皆さん注目して下さい！ 私がルガル・バーンシュタインの妻のサユリ・バーンシュタインです！！」

あの人ガールさんの奥さん？ まるで学生みたいに若いんだけど。よく考えるとアーデルハイドさんのお母さんでもあるんだよね。

「皆さんが運送したサンドバッグ君には特別な機械が入ってて、その機械が運送データを記録して皆さんに合った部署を自動検索してくれます」

サユリさんの言葉が終わると同時にサユリさんの後ろのモニターにバイトの名前と配属先が映された。僕は通常運送だった。

「頑張った人には出来高ボーナスがありますからね」

そんなのもあるんだ。よし、明日から頑張るぞ。

――

「このバイトはさして面白いトラブルもなく進んだので、カット」

――

バイトを始めて早一週間。今日のバイトも無事に終わり、そして給料を貰う時がきた。

「やあ煉君。七夜君達は元気かね？」

「お陰様で」

なんでか僕は直接社長室に呼ばれてお給料を貰うことになった。

「君の働きは実に素晴らしい。そこでどうかね。我が社に入らないか？」

「えっ、それって」

「もちろん無理にとは言わない。入るかどうかは君の自由だ」

入ればそこの企業より圧倒的な好待遇を受けるのは間違いない。
でも……

「ごめんなさい」

「そうか。だが君が謝る必要はない。これはバイト料だ。多少色を付けておいた」

「ありがとうございます」

社長から封筒を受け取り、僕はルガー運送本社を出た。そしてうちに戻ると七夜がご飯を作っていてくれた。

「どうしたの？ 普段そんな事しないのに」

「仕事を頑張ったお前への礼だ」

「似合わないの」

「五月蠅い。そんな事より給料はどうなんだ？」

全くもう。でも僕も気になるから見よう。

「しかし薄い給料袋だな。数万じゃないか？」

「でも十分だよ」

ピラッ

封筒を開けると出てきたのは紙1枚。

「嘘……」

「……マジか」

紙はお札なんかじゃなくて数字の書いてある紙。つまり小切手だった。そこに書いてあった数字は……

「99万円……」

「税金が掛からないギリギリか。しかしくれすぎだろ」

……七夜に手が掛からないようになったらルガル運送に就職しようかな。

煉君バイトする（後書き）

あの99万円は大半が社長のポケットマネー。そしてカルマちゃん
は仕分けをやっていたようです。
ではキャラ紹介をしましょう。

サユリ・バーンシュタイン

出演：EFZ、MUGENオリジナル

マジカルステッキを持って戦う奥さん。旦那であるルガルと同じ
ような技を使う。カンフーマンやカルマのお母さんと知り合いらし
い。

ついでにこの人も。

カットの人

花火祭りの前編にも出たこの人、実は一度名前が出ただけのワラキ
ア先生だったんだよ！！

四者面談（前書き）

なんとなく会わせてみました。

四者面談

俺、カンフーマンは現在非常に危険な状況に置かれている。とにかくこの状況を見てほしい。こいつをどう思う？

「カンフーと一緒に暮らして何が悪い！！ 私がガンダムだ！！」

「なあと訳の分からん事をいいやがる！！ この寮にはまだ部屋が空いてるだろうがああああああ！！」

「カンフーマンさんの迷惑を考えた事がありますか？ この国で育ったのならば一歩引くのが礼儀というもの」

そう、すごく、危険です。モノとコマチと市さんがいるだけでこんな状況になるなんて。カルマはアイルーが逃がしたから大丈夫だが、俺が大丈夫じゃないんだよ。本当に、どうしてこうなった……………

――

それはいつもの朝、とはちょっぴり違う朝。

「グーグー」

「……漫画みたいなびきだな」

ツツコミどころが違うだと自分にツツコミたくなる。問題はモノが俺のベッドの中にいるって事だろ。

「起きろ。邪魔だ」

「うゝん、後5刹那」

「はい起きた。今刹那と言った瞬間にお前起きた」

「グーグー」

「……まさか、本当に寝てるのか？」

だとしたらとんでもない寝言だ。これだけはつきりした寝言を言うなんてある種の病気じゃないのか？

「いい加減起きて離れろ」

「んゝ」

ガチャ

「にいちや、お客」

「……カンフー、何をしている？」

「これは説明してもらいませんか」

どうしてコマチと市さんの2人が一緒にいらっしゃるのですか？

「五月蠅いなあ」

「やっと起きたか！！ 何故俺のベッドの中にいた！？」

「酷いわ！！ 私を弄んだのね！！」

こゝこいつ、こんな時に限ってこんなボケをかましやがった。ああ、
2人の殺気がぐんぐん上がっている。俺オワタ＼（＾o＾）／

――

もう嫌だ。俺はあの後すぐにワースとオーモイーガーが食らって
身体がボロボロだよ。

「結局あんた達のは嫉妬じゃん！！ カンフーと一緒に寝たいんで
しょ！？」

モノ、何を言ってるんだ。そんな事あるはずがないだろう。

「ば、馬鹿か貴様あ！！ そんな事があるかあ！！」

ほらコマチだってこう言ってるのにモノは何を考えてんだか。俺は今まで告白された事もラブレターを貰った事もない人間だぞ。

「私はしたいです」

「へっ？」

「ほれ見なさい」

「私はカンフーマンさんが好きです。いい機会ですからはっきり言います。コマチさんにもモノさんにも負けません」

市さん、一歩引く精神はどこへ消えた。

「おい！ あたしは」

「ふふん、市にそんな事出来る？ コマチには無理みたいだけど」

「当然です。コマチさんとは違いますので」

いやいやいや、何故そうなるんだ！！ そうか、夢なんだ。これは夢に違いない。だから起きれば全てが日常に戻るはず。

「……やってやろうじゃねえか！！ カンフーと一緒に寝る程度お、朝飯前だあ！！」

「コマチさーん！？」

落ち着けカンフーマン。夢なんだから何でもあるんだ。コマチがこんな有り得ない事を言うのだっておかしくない。

「表へ出るお！！ 誰が上かぁ、はつきりさせてやろっじゃねえか
ああああああああ！！！！」

「野蛮ですね。力でなんでも決められると思っておいでで？」

「来いよコマチ、鎌なんて捨てて掛かってこい！！」

「あの、お二方？」

「ハッハー！！ 一騎打ちだモノ！！」

「負けるのが怖い弱虫市はいらないね」

「っ！！ いいでしょう。相手に、カンフーマンさん？」

夢だ夢だ夢なんだぞ。だから何をしても大丈夫。何をしてもおかしくない。だから俺が空を飛ぶのだって出来るんだ。

「アイ」

窓を開ける。ここは4階。

「キャン」

窓に足を掛ける。後ろで声が聞こえるが気にしない。

「フアアアアアアアアアイ！！！！」

そして大空へと羽ばたいた。俺だって空を飛べるん

ゴキッ

「んぎいやああああああああああああ！！！！？」

「『カンフー（マンさん）！！？』」

結果、両脚がポツキリ逝きました。でもカルマの友人のトキ君が秘孔とやらで治してくれました。反省しています。

四者面談（後書き）

北斗神拳ってすげー！！ カンフーが自分を鈍感と気付く回でしたね（えっ

キャラ紹介もないのでちゃっちゃと終わらしましょう。では。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0580x/>

MUGENな日常

2011年10月26日09時00分発行